

ローバースカウト ハンドブック

は じ め に

日本に於けるローバースカウト隊の組織化は、昭和29年(1954年)に青年スカウト隊として始められ、平成5年(1993年)3月のローバースカウト隊の(平成4年度末)加盟登録状況は1,229こ隊、スカウト数17,080名(2月末)という状況にある。

その間、昭和42年(1967年)から10年間にわたり、シニア・ローバー特別委員会が設置されたが、ローバースカウト部門については、成人の域に達した年代であることから、援助の必要性はあまりないとの意見もあって、具体的な動きはなかった。

しかし、各県連盟でのローバースカウト活動に関する研究は引き続き行われ、「ローバースカウト活動の方向、指針についての指導と援助」ならびに「ローバースカウト活動を認め、活動を奨励するためのアワードの設定」などを始め、ローバースカウト活動に関する具体的な方向づけや施策を求める声が多く出されてきた。

このことから、昭和60年(1985年)に進歩委員会にローバースカウト小委員会が設けられて研究が重ねられ、中央審議会に「ローバースカウト活動の進め方」として中間答申が出されたが、一つの形として認められるまでに至らなかった。

プログラム委員会が平成元年(1989年)に設立されてから、前述の進歩委員会の中間答申を基に、ローバー部門担当者を委員会の中に定め、種々の検討を行ってきた結果、平成3年(1991年)3月に「ローバースカウト活動の進め方(方針への提案)」としてまとめら

れ、同年5月の中央審議会においてこの提案が承認された。

このハンドブックは、この「ローバースカウト活動の進め方（方針への提案）」に添って書かれたものであるが、その骨子となっているものは、要約してみると、以下のようなものである。

1. ローバースカウト部門のねらいは「自ら有為の生涯を築き、社会に奉仕する精神と体力を養う」こととし、ローバースカウト隊は野外活動と奉仕活動をする仲間たちで構成する。
2. 班制度は固定化せず、活動ごとにグループ編成するが、グループ活動のねらいは、「相互作用の中で社会性を養う」ものとする。
3. 成人の部門として位置づけ、進歩制度は設けず、「自己啓発と自己達成を目指す」ものとする。
4. ローバースカウト隊の活動の目標は、現在の教育規定にある活動目標のとおりとする。
5. 活動の型として、伝統型、開放型、指導者型、専門技能型の4つの型を示し、メンバーの総意によって任意に1つを選択、あるいは2つ以上の型の異なる性格を合わせたものを選択して、隊独自にプログラムを組み立てていくものとする。
6. 隊運営の方法は会社組織など一般社会で行われている運営組織を参考にして、隊の規模や活動の型によって、自主運営の組織を隊ごとに定める。
7. これら活動の型や隊運営組織・運営方法を隊ごとに定めるものを「憲章」と呼称することとする。

8. 他部門とはやや異なる組織・運営とすることから、隊をクルー、ローバー隊長をアドバイザー、見習いスカウトをスクワイヤーあるいはトレイニーと呼ぶ等の新しい呼称を用いた。
9. このハンドブックは、スカウト向きだが、クルーの特性を明らかにするために指導者の役割を付記する。

以上のようなことを骨子として、このハンドブックはローバースカウト活動の指針となることを願って書かれたが、このハンドブックを基に、全国のローバースカウトがそれぞれの置かれた状況に合わせて活発な活動を展開することを期待したい。

また、このようなことを修正したらどうか、あるいは書き加えてほしいという点について忌憚のない意見を寄せられ、ローバースカウト活動がさらに前進することを願っている。

目 次

はじめに

1. どのように始まったか (ローバー活動の推移)	1
(1) ローバーリング・ツー・サクセス	1
(2) 英国から世界への広まり	4
(3) 日本における動き	6
2. われわれは、今 (ローバー活動の現状と問題点)	9
(1) ローバー隊の種別	9
① 地域ローバー隊	10
② 大学ローバー隊	11
③ 職域ローバー隊	11
(2) 都市と地方におけるローバー隊	12
(3) 世界の仲間たち	14
(4) 今後の進むべき道	16
3. ローバー年代とは	
(ローバーのスカウティングにおける位置づけ)	19
(1) スカウトの完成の時期	19
(2) 豊かな青春	20
(3) 社会人となる前	21
(4) 社会人になってから	21

4. 青年は何を目ざすか (ローバー活動の教育目標)	23
(1) ローバースカウト教育	23
(2) ちかいとおきて	24
(3) 自ら有為の生活を築く	25
(4) 社会に奉仕する	26
(5) 強い身体	27
(6) 人生の幸せ	27
5. 青年たちが行動する (ローバー活動の目標)	29
(1) 明確な信仰をもって	30
(2) 高度の野外活動	30
(3) 自ら課題を探す	31
(4) スカウト運動の指導者となる	32
(5) 地域社会に貢献する	33
(6) 国際社会の一員	34
6. 青年は仲間と共に (ローバー隊の組織)	35
(1) ローバースカウトの仲間	35
(2) ローバースカウト隊	37
(3) ローバースカウト隊のタイプ	40
(4) ローバースカウト隊の構成	46
(5) メンバーの必要条件	50
(6) 上進者	52
(7) スカウト経験のない者	54

(8) 女子の参加	62
(9) 隊を発足させる方法	63
(10) 憲章	63
7. 自主運営と指導者の助言 (ローバー隊の運営)	73
(1) 自治の仲間たち	73
(2) ローバースカウト仲間の中の指導者	75
(3) 役務の分担と管理	76
(4) ローバースカウト隊の指導者	77
(5) 団内の他の組織との関係	81
8. 隊活動の計画と展開 (隊活動のプログラム展開)	83
(1) 活動計画とプログラム	83
(2) プログラム立案の過程	85
(3) 活動プログラムの進め方	88
(4) それぞれの型でのプログラム展開	91
9. 個人プロジェクトと自己訓練	103
(1) プロジェクト法とは	103
(2) 自己訓練	104
(3) 自己研修	106
(4) 課題遂行の評価	108

10. 集合訓練	111
(1) グループプロジェクト	111
(2) 活動プログラムの例	113
(3) ローバースカウト活動での安全対策	114
(4) リーダーシップとメンバーシップ	119
(5) 実行資金の確保	122
(6) 集合訓練実施上の地区・県連盟・全国組織の構成	123
11. 奉仕活動	127
(1) スカウト運動への奉仕	127
(2) 社会への奉仕	128
(3) 奉仕活動プログラム展開例	130
12. セレモニーとスカウツオウン	135
(1) セレモニーについて	135
(2) ローバー部門のセレモニー	136
(3) ローバー隊におけるセレモニーの例	136
(4) その他のセレモニー	142
(5) スカウツオウン	143
13. 服制と記章類	145
(1) ローバースカウトの服装	145
(2) ローバースカウトの記章	146
参考資料	149
用語解説	171

1. どのように始まったか

(ローバー活動の推移)

(1) ローバーリング・ツー・サクセス

ボーイスカウト運動の創始者ベーデン-パウエル卿は1922年にローバーリング・ツー・サクセスを出版し、これは「若者が男らしさを身につける手引」としてスカウト運動に参加している年長の少年たちや、若い指導者に青年としての生き方、将来進むべき方向を示した。

1907年ブラウンシー島での実験キャンプから始まったボーイスカウト運動は、いわゆるボーイつまり少年のための活動であった。当時はまだ、今日ほど社会的成熟度が低年令層に及んでいる時代ではなかったにしろ、少年という一般的な用語は16～7歳までであり、それ以上の年齢の者は職についたり、家を離れたりして、親元を出て独立していく年齢層であった。

スカウト活動に参加して、その教育を受けた青年たちが、社会に出ようとしているときに、どのように行動したらよいのかを示すことは、ボーイスカウト運動にとって見過ごすことのできない責任であった。とくに、社会に出れば甘えや無責任さは許されない。そのための備えとしては、自分を強くきたえておくこと、人の意見に流されて自分の考えを捨てないこと、社会にはさまざまな誘惑があるからそれに陥らないこと、そして何よりも、良き伴侶をえることが当時の社会では理想的な人生の道筋であったといえる。

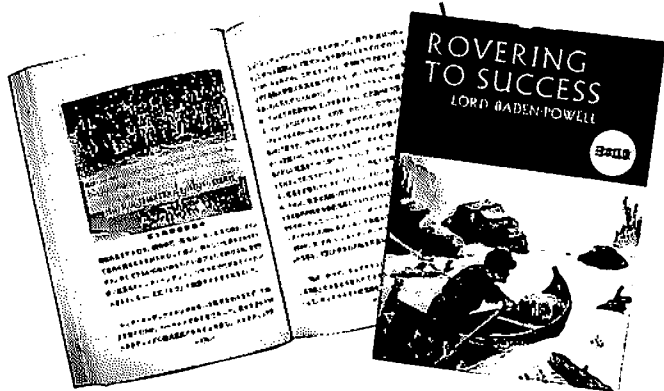
創始者はさまざまな予想できないような困難に対し、青年たちに社会を海にたとえ、その中を自分の力だけで乗りきっていく雄々しい姿を「自分のカヌーは自分で漕げ」と励ましたのである。そして、経験者である年輩者の立場から予想される困難を知らせ、直面したときに、全力をあげてどのように乗り切っていくかを教えたのである。

理論家、独創的な思想家というより、体験的、実践主義的な理想家として人生を築き上げてきた創始者は、多くの本を読み、自分の体験や実践から得た信念をもって、青年に自ら挑戦し、行動することを呼びかけている。世界のあらゆる地域に出かけ、広い視野と自然や人間の生き方を自分の目で見て、崇高な目的を体得し、公平な考えを持って人生にたち向かうことを奨めている。当時にあっては、広い世界へ出かける人たちは、冒険家であり、開拓者であり、探検家であり、船乗りであり、貿易商人であった。これらの人たちへの憧れや彼らの体験を通して築かれてきた知識や技能をもとに、青年たちに高い理想と強い体、高潔な人格を築くように励まし、その手段としてさまざまな活動を提示したのであった。

ローバーリング・ツー・サクセスは、「成功への履歴」と日本語訳されている。真の成功とは、幸福であると創始者は語っているが、これは決して創始者が本に書いてあることだけをすれば、幸福になるといっているのではない。創始者はローバーリング (Rovering) とは「目的もなくさまよう」ことではないと明言しているが、この年代の青少年はその行動が「さまよえる人」のように見えながら、その基本となる考え方が性格を築きあげるにより、幸福への道

を歩めるといっている。「このさまよえる人の活動 (Rovering)」は
遍歴 (広く諸国をめぐり回ること) を通して「青年としての生き方」
を築きあげることであり、あくまでも活動が重要なのである。「成功
への」は目的ではなく、活動した結果ついてくるものである。成功
を目的と考えると、自由な活動に規制がかかり、独創性や積極性を
育むことが制限される。成功を活動の結果ついてくるものと考えれ
ば、その活動は明るく愉快で充実したものとなる。

「行動することによって学ぶ」という信念のもとに、青年の時代
にはどのようにしたらよいか、評価をどのようにしたらよいかなど
「青年に人生の幸せを与える」この書から創始者の意図を汲むこと
ができよう。われわれのローバーリングも、このことを基本に据え
て取り組まねばならない。



ローバーリング ツウ サクセス

(2) 英国から世界への広まり

イギリスでローバーリングが展開はされていたが、それは運動内の期待に反して、組織的にもプログラム面でもボーイ部門やカブ部門のような大きな着実な進歩を印すことができなかった。このことは、一つには、少年と青年との間の大きな変化にボーイスカウトのプログラムが適応できなかったからといえる。

このために、ローバー部門が確立されないままに、少年の年長の部門であるシニア部門が、シニアスカウト計画として発表され、ボーイ部門とローバー部門の間に生まれていった。

B-Pはこの構想には賛成ではなかった。少年が成長をしたからといって、ボーイスカウトの延長である教育方式で年長の少年や青年期に達した若者を訓練するのは、ボーイスカウト、シニアスカウト両部門にとって良い結果をもたらさないと考えたからだ。これではボーイ部門が弱体化すると共に、シニア部門はボーイ部門で育ちきった少年の成長の芽をかえって摘んでしまうことを恐れたのであった。このようなことから、B-P生存中には構想はあったけれど、世間に公表されずに、このシニアスカウト方式はB-Pの死後、第2次世界大戦終結後の1950年代に公式に発表されたのであった。

イギリスで発表された方式は当然のことながら、世界中のボーイスカウト活動を行っていた国々の関心と呼び、各国でもさまざまな対応がなされていった。この部門の対象となる15歳以上の少年の環境が大きく変化し、高等教育への要求も高まっていく中で、この方式はボーイスカウト運動にその年代の少年を留めておきたいという

願いに発するものではあったが、少年たちを引き付けるに足る十分なインパクトに欠け、また指導者として適任者を得ることも難しく、いずれの国にも十分な発展をみることはなかった。各国にはローバースカウトを残すか、シニアスカウトをその方向に変えていくのかの選択を迫られることになった。

このような中で世界のローバーの大会であるローバームートを開き、討論と野外活動を通じて交流と親睦をはかり、ボーイスカウト活動に参加した者たちの親交を深める機会を求めていった。1950年代から開かれていたローバームートの記録を見ると、1931年にスイスのカンデルステッヒで20か国からの3300名が参加して開かれて以来、第2次世界大戦中を除き4年ごとに開かれてたが、1961年に第7回がオーストラリアのメルボルンで15か国、1000名弱の参加者で開かれた後は、4年ごとに「ローバームート」年を設定して、地域的な行事として開かれるようになった。この「ローバームート」年の事業は多くの地域でのローバームート参加を可能にしたが、ローバースカウト部門を持つ国が少なくなってきたことから、地域行事は難しくなったが、1990年に第8回世界ムートがオーストラリアのメルボルンで開かれるというように世界的な大会に復活した。以後、1992年にスイスのカンデルステッヒで第9回世界ムートが開かれ、1996年にはスウェーデンで第10回世界ムート開催を予定している。

世界ローバームートといわれる大会とは別に各国でもローバームートは開かれていた。青年たちが集い、話しあい奉仕活動を行っていたが、それは親睦が主な目的であって人と人との交流によって広い世界を知ること、人間性を豊かにするもので、決して訓練という

ものではなかった。

世界的に見て、ローバー部門はシニア部門との関係、成人指導者との関係などその成長をどのように援助していくか結論がえられずに今日に至ったといえる。その結果として、シニア部門をベンチャーに、ローバー部門を廃止するか、成人部門の青年部のような位置づけをしてきたといえる。

(3) 日本における動き

日本のローバースカウト活動はローバーリング・ツー・サクセスを通じて始まっていった。青年の年齢に達したスカウト経験者がこの本を読み、「青年教範」として人生のガイドラインを学び、自己研鑽と集合訓練を行っていった。それは、組織化されたものというより、散在する個人的な活動といったようなものであった。

これが実質的な活動となっていったのは、1960年代に入ってローバーリング・ツー・サクセスが新訳され、中村知氏のイギリスのローバースカウト活動の紹介がスカウティング誌にシリーズで掲載されたことによる。また、この頃から日本の団制度も確立し、スカウト経験者がローバースカウト年代に達したという背景もあったといえよう。

また当時の日本のボーイスカウト運動は、戦後のアメリカの影響から脱する時期であり、原点を求める欲求からイギリスのボーイスカウト運動の研究が盛んになり、バック・ツー・ギルウェルのかけ声と唱和するようにイギリスの活動が広まっていった。ローバースカウト活動についても、ローバーリング・ツー・サクセス以外に活

動の手引となるものがなかったので、イギリスでのローバースカウト活動は多くの示唆を与える素晴らしい人間教育の進め方として研究が進められ、浸透していった。イギリスの社会と日本の社会の相違はあるものの、当時はまだ社会のニーズ、とくに青少年教育内におけるニーズに大きな相違は見られなかったことから、日本のスカウト運動はひたすら、イギリスのローバースカウトの研究から多くのことを学びとり、今後の進むべき指針として受け入れていった。

同時に、日本のスカウト運動の中にイギリスで行われている方式が定着し、開発の努力も行われていた。イギリスの騎士道に対する武士道、キリスト教の行き方に対する修験道を提案することも行われた。キャンプや自然を教場とするボーイスカウト教育のあり方から、野外活動を通した人間形成を中心に置いてローバースカウト教育のあり方が求められた。「青年の道は青年に見い出させよ」「青年の抱負を青年に聞こう」ということも、ローバームートやローバースカウトの集会を通して行われてきた。

1970年代に入って、世界の流れから10年近く遅れてはいるが、ローバースカウト部門のあり方が進歩委員会において本格的に研究、調査、検討が進められ出した。1970年代においては、シニア・ローバー委員会が特別委員会として設置され、「ローバースカウトは成人の部門として位置づけられるべきものであり、青年のスカウトとしての教育プログラムは考えられない」という将来の方向性を示した。しかし、これに対する反対の意見が、とくに日本の教育制度の下では大学卒業までは親の経済的保護下にあり、社会的にも一人前とは認められないので、自己研鑽へのプログラムを提示すべきであ

るとの立場から、進歩制度により明確な記章等を設置する案が出されたりした。とくに、ローバースカウト部門が大学のサークル活動の一環として大学ローバースカウトを認めたことから、この意見に共鳴する者も多く見られた。

1980年前半の進歩委員会は、ローバースカウト部門におけるプログラムを明示する必要性は認めながら、ローバースカウト本来の自己修養は他人に認められることではなく、社会的な成長へのステップとして社会に認められることを考えるべきとのことから、運動内で記章取得をめざすことは考えないことを確認した。そしてただひたすら進歩の促進をはかるという片寄った傾向が生まれないためにも、ローバースカウト進歩記章あるいはアワードは認めない方向を再確認し、あわせてローバースカウト活動が野外活動と奉仕を目的とすることを具体的に提示できるために、個人または隊の活動例を示すことにした。

言い換えれば、現行のローバー規定に定められた大枠の中で、活発なローバー活動が展開できるよう細かな規定を設けず、活動の手引きを示すことにしたのである。



救援活動へ奉仕（阪神大震災）

2. われわれは、今

(ローバースカウト活動の現状と問題点)

ローバーリング・ツー・サクセスに著わされた青年のスカウティングの理念は、男性社会と女性社会とが明確に区分されていた時代に生まれたものではあるが、70年を経た今日でも変わることはなく、社会に有為な青年を送り出す指針として多くの人々の共感を得ている。青年の心身の健全な成長に寄せる創始者の気持ちが時代を越えて青年の心を打つことは疑いないし、そのねらいを生かす指導方法として自己啓発を励ます行き方は現代においてますます強く求められている教育方法であるといえる。

しかし同時に、現代は創始者の生存中の状況とは大きく様相を変えており、その中で生きる青年に魅力ある活動、現代社会から求められている期待される人間像ははるかに複雑な価値観から規定されている。現代における青年の将来に役立つ理念、技能、心構えは何かを踏まえて、新しいローバースカウト活動の展開をはかっていかなければならない。

ところで、現在の日本のローバー活動はどのようなであろうか、まずは現状を凝視してそこから、ローバースカウト活動の進め方を導きだしていこう。

(1) ローバー隊の種別

日本連盟に加盟登録されたローバースカウト隊を見るに、その種

別は平成2年度(1990年)末の登録状況によれば、全国に1,101こ隊あるうち地域・地区・その他が1,056こ隊(96%)、大学ローバー35こ隊(3%)、職域ローバー10こ隊(1%)である。これにローバー班の登録をしているもの、約700名も地域団にあることを加味すると、地域のローバースカウトが圧倒的に多い。このことは発足以来ローバー隊そのものが、地域団のスカウト出身者に提供する青年のためのスカウティングであることから当然のことであり、ローバー隊が増加するにつれ、この傾向が顕著になってきていることも当然といえる。

そして、その活動に目を向けた場合、それぞれのローバー隊はさまざまな個性と問題点を持っている。

① 地域ローバー隊

ローバースカウト隊を持ち、活動することが基本であるから、多くの地域団はローバー隊を設置し、ビーバーからローバーまでの一貫教育が実現できるようになってきている。しかし、これらの団の大部分では、ローバースカウトを準指導者として重複登録していることが多いのが現状である。

これは各団の指導者不足が、ローバー年代のスカウトを準指導者及び指導者予備軍としなければならないために、ローバー独自のプログラムの展開ができないことを示している。従って、ローバー活動に専念するよりも、隊奉仕活動に追われてローバー年代に期待されるスカウトとしての技能・知識・資質の研鑽ができにくい状況が共通の悩みとなっている。

また、団の役員、隊指導者そしてローバースカウト自身すらローバー活動への理解が不十分であることも見逃せない点でもある。さらに、ローバースカウト年代は大学や就職で居住地を離れることが多く、そのために人数が不足したり登録はしているが日常活動が困難な者があったりして、隊としての活動が行えないことも現状である。

② 大学ローバー隊

大学ローバー隊にはスカウト未経験者が多く参加し、スカウティングの野外活動の面に関心が集中し、時には探検部、ワンダーフォーゲル部及びボーイスカウト研究会的なサークルとして活動する傾向が見られる。

これに関連して、上級生と下級生の硬直的な上下関係（時として長所として作用することもある）が存在したり、特異な階級社会となったり、卒業と同時にスカウティングから離れてしまう者が多い。

大学ローバーは、大学教育の組織に組み込まれ、大学での教育や生活に大きな関わりがあるため、大学関係者（教職員）の中から指導者を得ることが望まれている。

③ 職域ローバー隊

職域ローバー隊は、全く企業側の理解と方針に依存しなければならない。スカウト活動が企業にとって有効と認められない限り設立も活動も困難である。

経済動向が職域ローバー隊の活動に直接影響を与えているという

状況もある。

それぞれの種別のローバー隊には、このような状況が認識されるが、スカウティングの魅力は、いずれもローバー年代の青年の自主的な行動によって彼らの年代にふさわしい知的、体力的、精神的な面での幅広いニーズに対応した活動を求める欲求を程度の差こそあれ満たしていると考えられる。

また、ローバースカウトにしてみれば、スカウティングの理念に情熱をかきたてられ、自身に内包している可能性を活動を通して伸ばし、彼らの人間的な成長を助け、持てる力を実際に役立てていけると考えられる。

野外活動と奉仕の仲間であるローバースカウトには、スカウト行事の多くが彼らの活躍に依存されていることから、ローバーのプログラムに明確な指針が打ち出しにくくなっているとも考えられる。しかし、別の見方をすれば、単一のプログラムが存在しない現状がローバースカウト活動の本来の姿ともいえよう。

(2) 都市と地方におけるローバー隊

日本のローバースカウト活動でもう一つ顕著な点は都市部と地方との相違があげられよう。

都市においては、この年代の青年たちは大学や専門学校などの高等教育をうけたり、就職をして都市に移住している。就職をすると、スカウト活動をしたり、スカウト団に所属することは困難な点があるが、大学へ進学した青年たちは、大学に大学ローバー隊を形成し、

活動を行っている。このときには、大学内やその地域、職域における一種のクラブ活動として、他の趣味や運動のクラブと同様の扱いを受けることから、ややもすればスカウト運動の特色や独自性が薄れて、単なるアウトドア活動クラブとして参加者を集めるという結果になりやすい。

これに対し、地方都市やその周辺の団においては、ローバー隊を形成するスカウトの数が少なく、規定に示された標準の組織として登録する人数に達しない場合も多々ある。このような場合は、「地区ローバー隊」または団内に「暫定的ローバー班」を組織して活動することになる。また、ローバー隊として登録できる人数は確保されているとしても、この年代は大学や就職等によって団の所在地から離れるローバースカウトが多く、原隊に留まって常時活動する者が少数になってしまうことも生じている。

そのような場合は、自己訓練と研修・修養とをする個人プログラムを自ら計画して実施することによって活動を継続することになるのであるが、隊長や他のローバースカウトの協力を得難いことから、単独で自己訓練と修養のためのプログラムを立案して実行することは不可能なことが多い。また、そのような状況におかれたローバースカウトにとって、他のローバースカウトとの活動、すなわち「集合訓練」の実施を行うことは事実上できないのが通例であろうと思われる。

ローバースカウト年代は、自分たちの活動を展開するために、自分の置かれた環境や状況を見極めて、少しでもよい状況をつくり出すために仲間づくりをしたり、仲間呼び掛けていく積極的姿勢が

要求される年代である。彼らの意欲と青年の特徴である積極性を生かしたスカウティングの実践の場を導き出すことが必要である。

(3) 世界の仲間たち

世界全体を見回すとき、スカウト運動の根本理念である目的・原理・方法に変わりはないが、その組織・プログラム・展開はさまざまである。いずれの国も、自国の文化・社会・経済等の状況の中で、自国社会のニーズ、青少年のニーズを組み込んだプログラムを開発し、それを支援するための組織や指導者の訓練を行っているからである。

これはローバースカウト部門だけではなく、ボーイスカウト運動そのものが現在、青少年（男女）の教育に十分に効果を与える範囲として、小学校から大学卒業までを対象とし、国によっては成人の分野まで押し広げてプログラムを提供している。また、その在り方は、外国で開始された教育プログラムをそのまま自国に導入し「教え込む」ことに主眼を置くのではなく、自国にあった教育プログラムを開発し「共に育ちあう」ことに力点をおいて進めていることによる。

ローバースカウト部門だけに限ってみると、社会のニーズによりローバー部門を設置してない国もかなりある。このような国においては、18～20歳の間に公民権を有するようになり、社会的成人としてこの年代は取り扱われ、青少年教育受益者とするのは適当でないとか、徴兵制度により兵役に入ることから、活動が成立しにくいなどの理由があったり、開発途上国のように、この年齢の青年が家庭

や社会の生産者として重要な役割りを果たしていたり、指導者として活動することにより大きな意義づけをしている国もあつたりするからである。

反対に、ローバー部門のある国を見ると（これは国の数からいっても少なく、加盟員の数は総数に比してわずかである）、年齢は25～30歳までを上限とした青年たちを対象とした活動となっている。

スカウト部門を終了した年齢以上の者たちに引き続きスカウト教育を提供するというイギリスで始まったローバー活動の考えとは異なり、成人の中の若者たちを対象とした活動はいかにあるべきかという観点から、青年のための活動が新しく構築されているといってもよい。

ローバーリング・ツー・サクセスを原点としていながら青年像を固定的な鋳型にはめるのではなく、社会生活に適応し、社会生活を楽しんでいくための行き方や技能、社会的経験などが求められている。

たしかに、イギリス古来のローバー活動を基盤としてローバー活動の展開をはかっている国もある。例えば、インド、パキスタン等の国々の活動には、そのような趣が感じられるが、それは社会が固定的な風習の下で非流動的な状況が保たれている国といえなくもない。しかし、そのような国においても、スカウティングの原理に基づいて青年のための有意義な活動は何であるかを根幹として楽しく実施していく仲間作りを目指している。

(4) 今後の進むべき道

要は、いずれの国においても青年たちのニーズや社会のニーズが共に多様化し、変化の激しい中であって、青年にとって、とくに運動に加盟している青年たちにとって、どのような活動が必要かを基本に据えて、運動が広い視野からプログラムの要否を考え、そして自国にもっとも適した活動を構築し、しかも青年たちの選択によりそれを展開していくことが肝要であろう。

ここで、ローバーリング・ツー・サクセスの中に創始者B-Pが「ローバーの組織」を次のように記していることを思い起こし、ひとつの進路を見いだそう。

① ルール

スカウト兄弟の仲間のローバー部門は、楽しく幸福なものである。けれども今やその組織と運営のために、それは規約を作らなければならないほど大きなものに成長した。

しかし、規約は規約であって制約ではない。それは言うなれば、君たちのフットボールだのクリケットをするときにあるルールのようなもので、だれにとっても公正なゲームができるようにするための必要からあるのである。

それは行動するためのひとつの基準を与えるもので、上から押し付けられるものではない。スカウト運動にある規律はすべてスカウトの自由な発想から作られ、各人がそれぞれ味方に有利に「ゲームをする」という願いから発生している。そして、その運営は大部分、ローバースカウトそれ自身の手によってなされるものである。

② 目的

ローバーリングの目的は、兄弟仲間になること、そして他の人々に奉仕することにある。

ローバー訓育の目的は、青年たちが、幸福な、健康な、有能な市民に自分を伸ばすことに置く。そして自分のために有用な経歴を作る機会を、めいめいに与えることにある。

このことはまさに、大人の仲間入りをしようとする一生のうちでいちばん難しい時期に、青年を有効な影響の下に置くことをねらいとしている。

ローバーリングの原理はまさに、ここにあるといえる。日本においても、外国においても、青年の置かれる時代と環境は非常に大きく変わっていながら、この原理に変わることはない。要するに、ローバースカウトは、

- ① スカウトの仲間である。
- ② 楽しく活動し、他の人々に奉仕する。
- ③ 幸福な、健康な、有能な市民となる。
- ④ ローバー自身が行動し、運営をする組織である。
- ⑤ 自分のために有用な経歴を作る機会として、有効な影響下に置かれるよう指導者のアドバイスを受ける。
- ⑥ 組織の運営に規約を持つ必要はあるが、それは公正なゲームをするための規則であって、制約をするものではない。

この原理に則って、日本の青年は自己を啓発し、持てる潜在能力を最大限度に発揮できるように努め、社会人として自分にもっとも適した社会の分野で活躍するところに「人生の幸福」、つまり「成功」

はローバースカウト自身のものとなろう。

そのためには、ローバースカウト活動は、ローバースカウトたち自身が自分のおかれている時代と環境を見極めて、現代の要求に合致した方法により展開をしていくことが重要である。

ローバースカウト活動は、ローバースカウト自身の手託されており、参加するローバースカウト一人ひとりが自分の道を切り開いていくことが大切である。



3. ローバー年代とは

(ローバースカウト部門のスカウティングにおける位置づけ)

日本のローバースカウト活動はいかにあるべきか、進むべきかを明示するには、対象であるローバースカウト年代に対して、スカウト運動として、また社会全体から運動に参加しているローバースカウトにどのような期待がかけられているかを知ることが重要であろう。

(1) スカウトの完成の時期

ローバースカウト活動には、ボーイスカウト運動に小学校や中学校から始め、ずっと参加してきた青年もいるし、ローバースカウトになって初めてスカウティングに加入したものもいる。

ビーバースカウトから始まったスカウトの一貫教育の最終の仕上げの場としてこの部門をとらえるならば、ローバースカウトは、ボーイスカウト運動の4つの柱といわれる人格、健康、技能、奉仕のそれぞれが自らの努力と体験により、スカウト運動の理念にふさわしいように身につけていることが望まれる。

スカウト教育だからと限定しなくとも、特にローバースカウト年代では、社会人としての人格、健康、技能を十分身に備え、人の世話にならず人の世話ができることを条件とし、信頼される青年として、社会のためにも役に立つことができるようになってほしいものである。身体だけが大きく育ち、多少の技能が身についている程度

では完成とはいえない。青年としての自覚をもち、心身共に青年にふさわしい成長をしていなくてはならない。そしてローバースカウト年代では、今までのスカウティングの延長線に留まることなく、青年としての新しい分野においてスカウト教育を通じての完成がなされなければならない。

(2) 豊かな青春

青春は二度と帰ってこない。一生涯にたった一度の青春という時期をどう生きるかによって、その後の人生に大きな変化をもたらすものである。この大切な、しかも貴重な時期はローバースカウトとしても活躍の時期であり、いろいろな体験を通じて、健康で明るい青年らしい生き方をすることが望まれる。

人生の危機にもほほえみをもって乗り越えられる生き方、自分に何が欠けているか、自らを生かせるものは何か、良き友をもっているかなど自問自答しながら、自らの道を切り開き、将来への基礎作りをする時期が青春である。この青春を豊かに過ごせるのはやはり何か自ら寝食を忘れて打ち込めるものを持ち、これに生甲斐を感じ、積極的な生活を持っていることであろう。

ローバースカウトは、もう一度豊かな青春とは何かを考えるのも意義のあることであり、お互いに語り合ったり、多くの人々とのふれあいや、いろいろなことを考え、模索していくことを大切にして欲しい。

(3) 社会人となる前

社会人となった時から、学生の間にはなかったような新しい体験をすることになる。自分の生き方、考え方、自分の能力、性格、長所、短所を十分に知っておかないと思わぬところで挫折してしまうことも多い。

現代の日本では、社会・経済の変化と価値観の変化、倫理感の重要性の認識と共に、ボーイスカウトの教育目標、教育内容が広く社会で評価されるであろう。

ローバースカウトの年代は、まさに社会人になるための準備の時期である。これからの社会を洞察し、人格、健康、技能が身について“そなえよつねに”を心に留め、常に何事にも対応し、乗り越え、処理のできる青年として準備をすることが社会人になる前のローバースカウトの務めといえよう。

つまり自分の生活を確立すること、家族の者に負担をかけないこと、自分の健康を増進すること、さらに社会に貢献するという意識と共に、仕事に精力的に取り組む姿勢を養うことが大切である。

(4) 社会人になってから

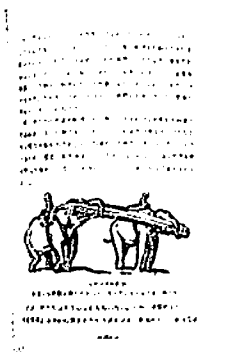
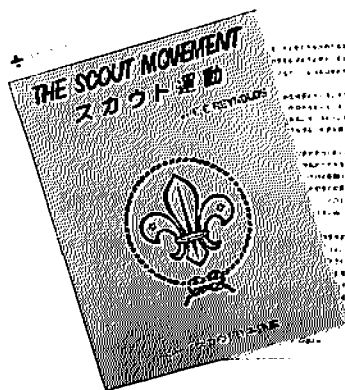
誰からも信頼される人柄、協調性と独創性をもっていること、周囲への気遣いができること、知識が豊富で様々な話題に関心を持つこと等々。社会人となった青年には、学生時代よりもずっと多くのことが期待される。

こうした期待に応えられる頼もしさをもった青年、本業に忠実な青年、努力をする青年、チャレンジ精神の旺盛な青年になることを

心掛け努力しなくてはならない。

B-Pがローバースカウトの指導者たちの会議に書き送った書面の中で、「粘り強さというものは、性格の一種で非常に貴重であり、たいへん役に立つものである。今日の青年にとってこのうえなく必要とされている性格である。これはローバーリングを通じて養うことができる」と述べているが（日本連盟訳、E. E. レイノルズ著「スカウト運動」259頁参照）、現代の青年にとってもこの忠告は的を得たものであり、社会人になって一番求められる性格でもある。

国や社会で役立つ技能や知識はどういうものであるかを考え、それらを身に付けるための行動に移すことを忘れてはならないのである。



スカウト運動

4. 青年は何を目指すか

(ローバー活動の教育目標)

(1) ローバースカウト教育

「ローバーリングは、目的のない放浪を意味するものではない」と創始者ベーデン・パウエルという言葉にあるように、青年たちにとって幅の広い、やりがいのある活動を通じて自らの生き方を見つける方法である。ローバーリングはスカウト運動の目的と原理を基盤として、青年がその自主的活動を通じて精神的、肉体的、知的、社会的に発達し、一人前の社会人となる手助けをすることを基本にしている。スカウティングの原理は神（仏）へのつとめ、社会の人々への奉仕と自己啓発を行うことであることは、ちかいとおきてに表現されている。スカウトとなるためにちかいをたてるのは、スカウト運動の原理に同意することを意味し、スカウト運動の理想に向けて行動に移すことを奨励している。

このようなスカウティングの原理を青年期の若者に適用し、有意義な人生を築くためにローバースカウト教育の目的（教育規定第515条A）が定められている。

第515条A ローバースカウト教育は、青年男女に、第4条のちかい及び第9条のおきてを、各自の生活により強力に具現する機会を与えるとともに、自ら有為の生涯を築き、社会に奉仕する精神と体力を養うことを目指すものである。

(2) ちかいとおきて

スカウトのちかい

私は、名誉にかけて、次の3条の実行をちかいます。

1. 神（仏）と国とに誠を尽くしおきてを守ります。
1. いつも、他の人々をたすけます。
1. からだを強くし、心をすこやかに、徳を養います。

スカウト運動の目的と原理を具体的に表現し、実行目標を定めたものがちかいとおきてである。

ちかいは心に定め、心の支えとして、それぞれの人格形成のための主要部分である。

おきては生活の尺度で各項目を一つひとつ努力して身につけ、実行に移すことが要求される。

ちかい、おきてを通じて、各々のローバースカウトは自らの人生観、世界観、宗教観を養うことが求められる。いずれも単なる題目に留まることなく、実践することにより自己を築き、社会へ奉仕ができる人、社会で自らの責務を果たせる人、良き市民となることである。ローバースカウト年代においてはちかいとおきてを十分理解し、この実践が実証されなくてはならない。

なお、ボーイスカウト運動では、原理の第一に神（仏）へのつとめが定められている。この運動の加盟員として、少なくとも感謝の念を基盤とした神、仏へのつとめを約束することが大切である。

ただし、宗教活動を押し進めることは避けねばならない。もし宗

教活動に主眼が置かれるならば、多くの活動的な青年はローバースカウト活動を心から満喫し、充実した体験に感謝をするよりも、活動そのものに失望し敬遠してしまうようになろう。

信仰への目覚めは人それぞれに異なり、頑固に信仰を拒絶する者も中にはいることであろう。このような一見、手に負えないように見える青年たちも、ローバースカウト活動の中で、自然と直面し、人々に奉仕することによって信仰への糸口は得られよう。

スカウトのおきて

1. スカウトは誠実である
2. スカウトは友情にあつい
3. スカウトは礼儀正しい
4. スカウトは親切である
5. スカウトは快活である
6. スカウトは質素である
7. スカウトは勇敢である
8. スカウトは感謝の心をもつ

(3) 自ら有為な生活を築く

「ローバーリングというものは、自ら有為な生活を送るための準備であると共に、有為な生活の追及である」とB-Pはローバースカウトの指導者たちへの書簡で述べている。

青年は常に自ら有為な生活とは何かを求めて考え、挑戦し、有為

な生活を手にしなくてはならない。ローバー自らの特性を認識し、有為な生活を築くための障害を一つひとつ取り除くことが大切である。

(4) 社会に奉仕する

「奉仕というものは、ローバースカウトの日常生活および仕事と無関係なものではないこと。彼の職業に一生懸命努めることも、公共社会への奉仕の一部であること」とB-Pはローバースカウトの指導者たちへの書簡に述べている。

ローバースカウトは、日常生活と仕事、職業に一生懸命努めるということは、政治、経済、社会にもっと関心を深めて、より良き社会を作るために積極的に考え働くことである。

ローバースカウトの年代では、自己の確立と指導者としてスカウト運動への奉仕と公共奉仕が求められているが、特に公共奉仕はローバースカウトたちが公民性を研究する決め手となるものであり、この最終段階において自分を良い公民（市民）にするといわれている。

日本のローバースカウトは、もっと社会に貢献できる奉仕は何かを考え、お互いに話し合うだけではなく、身近かなことから実践することである。社会福祉のために、自然保護のために、弱者や貧困者への援助のために、発展途上国の自助努力を励ますために、もっと日本のことや外国のことに関心を持ち、様々な問題への認識を広め、自分のできることから、その改善へ向けて積極的なかわりと協力をして地域社会や国際社会のために貢献することが大切である。

(5) 強い身体

人間はもって生まれた体質がある。生まれながらにアレルギーがあるとか、筋力が異常に弱いとか、あるいは心身に障害を持っている者もいる。体質や障害がどのようなものであれ、すべての者が人間として尊重され、社会の一員として受け入れられるためには、常に自分の身体を強くし、鍛えていくことである。持てる体力をより一層強めていくことが大切である。

社会においては、身体を鍛えることを怠ったり、不健康な生活をして病気になったりしたのでは、やりたいこともできない。強い精神力がなければ、粘り強く社会の荒波を乗り越えて生きて行くことは期待できない。他の人々に迷惑をかけることになる。常に自分の生活を律して、最大限に自分の持てる力が発揮できるようにすることである。

(6) 人生の幸せ

人生の幸せとは何かをローバースカウトは、じっくりと考えねばならない。飽食時代に育ち、物質的、金銭的富のみの社会価値観に支配された社会の中で人生の真の幸福とは何か、一人よがりの幸せにならないようにローバースカウトは何をなすべきかを考えねばならない。心の豊さや多くの価値観について考え、人間社会で求められる青年としての人生観を養うことが大切である。

ローバーリング・ツー・サクセスのいろいろな提言や「自分のカヌーは自分で漕げ」という創始者B-Pの言葉を十分に理解し、認識し、これを実行して行きたい。創始者の言葉は、自分が築き上げた

身体や知識・技能を社会に対して還元していく積極的な市民性を求めているのである。人々に対する愛，社会に対する奉仕が，実際の形で行われていく社会をわれわれは共に求めていくことである。



アンタックティックウォーク南極点探検隊へ参加した愛知連盟ローバー佐野哲也さん

5. 青年たちが行動する

(ローバー活動の目標)

ローバースカウト自身の活動の目標は、次のことにおくと教育規定に定められている。この文章の中で特に注目したいことは、“自身の活動の目標”ということである。

第515条B ローバースカウト自身の活動の目標は、次のことにおく。

- ・ 明確な信仰をもち、自己の所属する教宗派の行事に進んで参加する。
- ・ 高度の野外活動により、心身を鍛練し、スカウト技能を磨き奉仕能力を向上させる。
- ・ 自ら課題を設定し、調査、実験及び実習によって、これを研究し、自己の生活を更に開発する。
- ・ ビーバー隊、カブ隊、ボーイ隊、またはシニア一隊の訓練指導に協力し、奉仕する。
- ・ 地域社会への認識を深め、地域の向上に貢献する。
- ・ 国際社会の一員として、相互理解に努める。

一人ひとりの青年として、自己を築くために努力と行動をしていくことがローバースカウトの目標達成への大きな課題である。

(1) 明確な信仰を持って

ちかいとおきての実践を活動の基盤においているスカウト運動の中で、ローバースカウト年代では各自が明確な信仰を持つことが望まれている。そもそもスカウト運動の原理の中で、第1に神（仏）への努めが求められ、神（仏）と国とに誠をつくしとちかってスカウトになったからには神（仏）の存在を理解し、信じることが大切である。

ボーイスカウト運動は、宗教運動や布教活動をする場ではない。むしろ各自がスカウト運動を通じて神や仏の存在を信じ、各々明確な信仰が持てるようにする場、機会を得ることが目的である。

明確な信仰をもつために、まず各自が現在こうして生きていけること、生きるためにいろいろな恩恵を受けていることに對し感謝の念を持つことから始まる。自らの生命・運命・他人から受けた恩恵などを考え、感謝の念を持つと共に、それに報いるために何か一つでも良いことをして行こうという気持ちを持ち、スカウトのスローガンである“日目の善行”を重ねながら、自分の心と考えにあった宗教・宗派を求めていくことが明確な信仰への導きとなる。いずれしっかりした人生観・宗教観が養われ、明確な信仰の持ち主となり、自分の所属する教宗派の行事にも進んで参加できるローバースカウトとして目標を達成することができる。

(2) 高度の野外活動

高度の野外活動により、心身を鍛練しスカウト技能を磨き、奉仕能力を向上させることがローバースカウトには求められている目標

である。

ボーイスカウト部門においては長期固定野営、シニアスカウト部門での移動野営を基礎として、ローバースカウトではさらに高度の野営生活ができなくてはならない。体力的にも、精神的にも、技能的にも、かなり鍛えられてきた年代であるローバースカウトでは、サバイバル（生存）技術を会得し、いつでも、どこでも、どんな条件の中でも生きていける自信を持つべきである。いろいろな活動を行う中で、常にどのような状況の下でも生き抜いて行けるだけの技術を日頃から体験し会得してきたスカウト技能を生かしながら磨いていかななくてはならない。

大自然での経験を生かして体力・精神力・技能を養い、他人への奉仕ができる青年になることが大切である。自ら計画・行動し、自ら達成できる人になることがローバースカウトに課せられた目標である。

高度の野外活動が苦しみでなく、楽しみとしてできるくらいの体力・精神力・技能が身についた時にローバースカウトとしての目標が達成ができたといえる。

(3) 自ら課題を探す

ローバーでは自ら課題を設定し、調査・実験及び実習によってこれを研究し、自己の生活をさらにに開発することが活動の目標となっている。

他人からやらされるのではなく、自らやる、自ら探すことができなくてはならない。近年、出生率の低下により少子化が進み、親の

過保護・過干渉・過期待も多くなっているといわれている。こうした中で育ってきた青年には独立心が弱く、依存的で、自己中心的、忍耐力に欠け、自発性や積極性に乏しいなどの傾向が見受けられるようになってきたといわれている。このような環境を乗り越えて、自主性・積極性・忍耐力・協調性を養うことが大切である。

それぞれ自分の興味と関心・好奇心にしたがって政治・経済・社会・科学技術・福祉などの中で一番関心の強いもの、または自ら学習中のものの中から課題を選出し、より深く研究し、まとめあげることが、ローバースカウトに課せられた目標である。

(4) スカウト運動の指導者となる

B-Pは、ローバースカウトの第一の奉仕は、自己の確立のために自分自身に対して行われ、次にスカウト運動の中で奉仕を通じて自己研鑽し、最後に社会に対し自己の能力相応に奉仕するようにと述べている。

スカウト運動への奉仕とは、ビーバー隊・カブ隊・ボーイ隊またはシニア隊の指導者やインストラクターとして積極的に奉仕することである。

また、指導者やインストラクターとして奉仕するために、技能研究会や指導者講習会、ウッドバッジ研修所・実修所等に参加して研さんすることにより、さらに多くの課題を学ぶことと体験することができる。

ローバースカウトは、常に興味と関心、好奇心を持ち、人類愛、責任感、積極性を養うことが活動の目標である。

(5) 地域社会に貢献する

身体的・知的・社会的・精神的に成熟してきたローバースカウトの活動の一つに社会、特に地域社会への貢献がある。自分は地域社会のため何ができるか、何をなすべきかを考え、地域社会の向上のために行動をおこすことが大切である。

ローバースカウトが他人の世話、社会のための奉仕ができるようになるのには、まず汗を流して働くことができなくてはならない。この機会には、非常利団体・社会福祉団体・病院・老人ホーム・養護学校などの施設での奉仕や身体の不自由な人や経済的に恵まれない人々への思いやりを持って、自分の持っている経験や特技等を生かすことによって与えられる。

同時に地域社会のニーズや政治・経済・社会問題等についても関心を深め、あらゆる機会を通じて何か役に立つことを計画し実践することが大切である。

ローバースカウトは、野外活動と奉仕で結ばれた仲間であり、お互い“よき市民”になるための準備のために、社会の一員として、地域社会への奉仕を通じて目標の達成に努力することが大切である。

地域社会から遊離した活動にならないように心がけ、地域開発・地域環境整備・自然保護などの課題に積極的に取り組まなくてはならない。

(6) 国際社会の一員

世界的運動であるスカウト運動の中でのローバースカウトは、国際社会の一員であることを自覚し、もっと世界を知る必要がある。世界には経済的に豊かな国と貧しい国があり、それぞれ民族・宗教・言語・政治・経済の異なった国を形成している。経済的に豊かな国ばかりでなく、貧しい国も多いことを理解し、恵まれた国に生まれ育ったローバースカウトは発展途上にある国々のことを考え、それらの国に対してもスカウト精神と日頃の体験を生かしていく必要がある。

世界事務局が推奨しているツイニング・プロジェクト（提携プロジェクト）などをよく研究し、主旨を理解したうえで、発展途上国のために自己の知識・技能を生かし、参加することが良い。

自分の幸福や利益のみを追求することが幸福な人生であると考えようでは、あまりにも利己主義的である。世界を広く見渡し、自分だけの幸福に一喜一憂したり、日本の中だけの幸福感に留まることのないように心掛けたいものである。

真の幸福とは、B-Pの“最後のメッセージ”から考え、豊かなる幸福を求めながらも、その恩恵を受けられない国々の人々がいることを認識し、これらの人々に対する理解と、国際社会の一員として自分ができに真剣に取り組むことが望まれる。

6. 青年は仲間と共に

(ローバー隊の組織)

(1) ローバースカウトの仲間

ローバースカウト活動は、楽しさを、素晴らしい仲間を、そしてすべての青年に興味ある分野の活動を提供するものである。活動は青年同士が、男だけ、女だけという同性だけで行うこともあるが、男女混合でも行われる。この仲間のグループはローバー隊、あるいはカブスカウト、ボーイスカウト、シニアスカウト等の隊と構成や活動の進め方がおおいに異なることから、その違いを明確にするためローバークルーと呼ぶ。仲間として、お互いが深いつきあいと、いつまでも変わらぬ友情を築くことができる。青年は、自分自身であるいは友達と一緒にローバー隊の愉快的仲間に加わって、人生のもっとも大切な時期を有意義に過ごすことができる。

ローバースカウト活動では、ローバースカウトが小グループで活動したり、自身のリーダーシップの能力を試し、強めるチャンスを持つことができる。ローバースカウトたちは小グループの活動に積極的に参加することによって、グループでの共同生活や活動の価値を身体で覚え、物事を成し遂げるプロセスを学んだりすることもできる。

ローバースカウト活動はまた、世の中の多種多様な活動や種々の興味ある事柄、例えば、古いものや新しいもの、ビックリするようなものや今まで聞いたことのないようなものを発見する機会ともな

る。ローバースカウトとしては、まず参加してみて、その中から何かをつかみ取るようにすべきである。野外活動だけでなく、世界には至る所に様々な挑戦や冒険が待っている。自己の限界を乗り越え新しい能力や強い気力に目覚めることもある。不可能と思ったこともいったんやってみれば、案外と容易に解決できるということをことを知ることにしよう。

ローバースカウト活動は青年たちに、自発性、独立心、そして自信を築かせ、自分が誰であり、何をするのか、そしてどこへ行こうとするのかについて自己確立と人生の目標を定める機会を提供する。拘束されること、命令されること、押し付けられることなく、自由にわが道を選択することができる。

ローバースカウト活動によって、青年たちは奉仕を通して他の人々に役に立つことの喜びを体験し、人生の価値を発見する。奉仕するという気持ちは、安易な気紛れな着想からではなく、高い理想をもって初めて生まれ出るし、継続していけるのであり、実際的な奉仕活動をすることにより、とってつけたような慈善心を越え、心かたむけるものとなり、また多くの青年たちとの共同活動を通して人生のかけがえのない友人たちとの出会いの場となる。

ローバースカウトは奉仕することによって、個人的な満足を得るばかりでなく、どのように他の人々のニーズを理解し、それに対応した行動をとるかを知るきっかけを得る。また、地域の人々に貢献するチャンスができるのである。

ローバースカウト活動は、自身の居住する地域を主に活動の場とするが、同時に青年の幅広いニーズに応えるために広く多くの場所

に出向き、新しい体験を積む旅行をする機会もたくさんある。国内だけでなく、時には外国にも出掛け、世界の仲間とも交流し国際的な友愛を深めることも大切である。国内そして海外のローバースカウトと友達になることこそ、これからの世界に活躍しようとする青年に欠かせない要素である。

ローバースカウト部門は、スカウト運動の将来を託されている青年たちの活動の部門であり、青年にふさわしい活動やスカウティングを楽しむことができる。

ローバースカウト活動は、自分たちで作り上げるやり甲斐のある活動を通して知らず知らずのうちに人間的成長をとげることができる。ローバースカウトたちは、隊や他の仲間と討論をしたり、互いに助けあったり、協力しあってかけがえのない青年期を有意義に過ごすことができる。

このように多彩に青年たちの活動に影響を与えることができるローバースカウト活動に参加するには、どのようにしたらよいのか。ボーイスカウト運動は全ての人に門戸が開かれており、自発的に加入することが基本である。参加したからには、当然のことながら各自が自主的に、積極的に活動する責任があることをまずもって銘記すべきである。

(2) ローバースカウト隊

どのような青年もローバースカウト隊の一員になって、所定の課題を果たした後に、初めてローバースカウトになれる。ローバースカウト活動をする基本的な単位であるローバースカウト隊について、

まず知ることから始めよう。

第516条 ローバースカウト隊は、4名ないし6名よりなる班、2個以上をもって組織することを標準とし、1隊は30名を超えてはならない。

このように規定では、隊の編成を最低8名いることをローバースカウト隊の標準として定め、それが2班を編成することをうたっている。しかし、全てのローバースカウト隊がこのような要件を満たすことは難しいことから、次の定めがある。

第519条 県コミッショナーが認める止むを得ない事情により、団内にローバースカウト隊を組織することの困難な場合は、団委員長等の責任において適当な指導者を得て、暫定的に団内にローバースカウト班を設けることができる。

ローバースカウト隊は、この年代の青年の状況に応じて次のいずれかの単位で組織される。

① 地域団の中のローバースカウト隊

団内のシニアスカウトたちは、高校を卒業するか、19歳に達した後は、シニアスカウト隊からローバースカウト隊に上進する。このとき、ローバースカウト隊の隊長とローバースカウト仲間の承認を得れば登録することができる。

② 大学のクラブ活動としてのローバースカウト隊

スカウト経験の有無に拘らず、大学のキャンパスでローバースカウト活動をしたいということになれば、すでに大学にローバースカウト隊があるなら、その団委員長、ローバースカウト隊長、ローバースカウト仲間の承認を得て加入し登録することができる。ローバースカウト隊がなく団を新設するときには、仲間を集めて大学当局とも話しあって隊を発足する準備をすることになる。

③ 職域に設立されたローバースカウト隊

職場の仲間を集めて企業内に設立したローバースカウト隊である。これまでに、スカウト活動を行ってきた人たちが中心になって発足をすることが多いが、企業内のサークル活動として、また高校を卒業して就職した若者たちの訓育の一環として発足するなど、設立の経緯はさまざまである。

④ 地区（地区が育成団体となって）に編成されたローバースカウト隊

自分の所属する団内でローバースカウト隊を組織するだけのメンバーがいらない、アドバイザーが見つけれられない等の事情で、かつ同一地区内に同じようなローバー候補者がいるときには、地区が自ら育成団体となってローバースカウト隊を組織することができる。

大学や就職のために原隊を離れたローバースカウト年齢の加盟員たちは、自分の通う大学や勤め先にローバースカウト隊がなければ、スカウティングを継続することはできない。そのような若者たちが

ローバースカウト隊に加わりたいと思うときは、県連盟や地区の事務局に問い合わせ、住居の近くのローバースカウト隊を紹介してもらうか、友達が加わっているローバースカウト隊の活動を見学して、それらのいくつかの中から自分にふさわしいローバースカウト隊を選ぶことになる。

おそらく、大学や職域のローバースカウト隊にはそこに所属する学生か従業員でないと加わることができない規則があるから、通常の場合は、地域団か地区ローバースカウトに加入することになる。

第518条 地区は、地区内にローバースカウト隊を組織できない事情の団があるときは、自らが育成団体となって地区ローバースカウト隊を組織することができる。

(3) ローバースカウト隊のタイプ

活動のテーマや内容により、ローバースカウト隊のタイプは決まる。

イギリスのローバースカウティングから多くのアイディアを取り入れた隊では、ローバースカウト活動のプログラムの展開に、騎士道をテーマとして取り入れ、その用語やセレモニーを活動の中に広く使用し、それがローバースカウト隊の伝統となっていたり、あるいは欠かすこのできない要素の一部となっている。また別の隊では、野外活動を楽しむことに重点をおいて、過去の型式や伝統にとらわれることなく、青年の精神的、社会的ニーズに適応した活動を主体

とする開放的なプログラムを中心に展開しているところもある。また、別の隊では、指導者となった者が多くいることから、指導者としての研鑽を積んだり、若い指導者層の愉快的創造的な交流や社交の場となっているローバースカウト隊もある。

このようにさまざまな形態をとっているローバースカウト隊は、いずれも意義のある活動を行っているとしても、独自のきまりを定めて、自隊のアイデンティティを明確にし、目標をもって活動を展開していくことが重要である。このことから、各ローバースカウト隊は、自ら制定する憲章（自治規則）により、あるいは複合のタイプを選択する。

- ① 伝統的なローバースカウト活動をする型（伝統型）
- ② クラブ的で開放的な型（開放型）
- ③ スカウト運動に対する奉仕を主とする型（指導者型）
- ④ 専門技能、趣味を活動の中心とする型（専門技能型）

〈伝統型とは〉

ローバースカウト活動が、英国で開始されて以来、イギリスのローバースカウト隊では騎士道をテーマにプログラムが実施されていた。そのねらいは、中世の騎士たちを英雄として自分たちの目標におき、それに近づくために高度な「野外活動」による頑強な身体と強い意志を育て、近隣や広く社会に「奉仕活動」を行うことにより他の人々に尽くす心構えと人生に役立つ技能を身につけ、そして知的好奇心を満足させるために、プロジェクト法でさまざまな学問や一般社会の事象を常に自己探究するようにプログラムを組立て、

それによって各ローバースカウトたちの潜在能力を開発し、あわせて新しいこと、困難なことなど、何に対しても挑戦していく姿勢を忘れないように励まし、青年たちの意欲的な人生設計に大きな効果を生み出すことができた。

今日、海外のローバースカウト活動は、その国の実情に合わせて徐々に変わってきているが、いまだにこの形式のローバースカウト活動を継承している国もある。しかし、わが国では騎士道の歴史的、文化的な背景が異なり、各地のスカウト関係者、とくにローバースカウトや指導者に広く理解されるには至らなかったため、この形式でのローバースカウト活動は顕著な成果をあげることができなかった。しかし、騎士道への万国共通の魅力は捨て難い力となっている。

一方、このテーマの下では、これまでのローバースカウト活動は男子だけのメンバーの活動であり、女子の参加はまったくなかった。それが今や女子も正規のメンバーとして受け入れられるようになると、女子のメンバーにとっては、女人禁制の騎士道では不適な状況が生まれてくるのは当然であり、また伝統型のローバースカウト隊にあっては女子を受け入れるかどうかは大きな問題となろう。

これは、各ローバースカウト隊がその憲章に定めることによる。

ここでの活動は、ローバースカウト自らが実施する自己訓練と修養、ローバースカウト隊が行う種々のプログラム活動及び同一地域内のローバースカウトが共同して行う集合訓練等によって展開する。

〈開放型とは〉

大学のローバースカウト隊で既に多く見られるが、クラブ的な色彩をもつローバースカウト隊のことを開放型と称する。このタイプは大学が男女共学であっても、男子または女子だけでであっても、他の大学と合同または連携することにより、全員男子あるいは男女混合の選択を自由に行い、それを憲章に明確に打ち出すことである。

このタイプのねらいとするところは2つ挙げられる。まず第一は、積極的にローバースカウトの業務運営に参画してマネジメントを学ぶこと、第二は種々のプログラムの活動に指導的な役割を果たすことによって、グループプロセスを体験し、グループ活動での意思決定の在り方や進め方について学ぶことと、リーダシップの意義を知り、実際に身に付けることである。それと同時に、自隊だけの限られた範囲に留まらず、興味や挑戦目標を同じくする他のローバースカウト隊との合同プログラムを積極的に行い、社会のあらゆる場面を網羅する広範な活動や精神的、身体的、知的向上を図る集合訓練を行うことも奨励される。

〈指導者型とは〉

統計を持ち出すまでもなく、他部門の指導者あるいは準指導者として奉仕しているローバースカウトはたくさんいる。これらのローバースカウトたちは、指導者としての責務や仕事に追われ、なかなかローバースカウト活動に時間を割き、心ゆくまでそれを楽しむ余裕のないのが現状である。したがって、この年代（18歳～25歳）の若い男女指導者たちが、自分より年少のスカウトの指導に明け暮れ

するだけではなく、同年齢の同じような状況にある者たちが集まって、何らかの形でもっとローバースカウト活動を楽しみたいという要望に応えるのが、このローバースカウト隊のタイプである。

このローバースカウト隊のねらいは、友情を深め、スカウト運動への献身と、それを勇気づけ、励ますことにある。年少のスカウトに対して指導者の立場にあっても、社会的にはまだまだ未成熟な点が多くあり、社会一般から自分のスカウティングへの参加について誰からも好意的に受け入れられ、理解され、スカウトの保護者の信頼に応えるためにも、ローバースカウト自身が指導者としての不断の自己啓発や研修に励むことは大切である。何よりも魅力的な社会人、スカウトの指導者、仲間の信頼や友情を集められるローバースカウトとなるには、ローバースカウトの仲間と目的をもってプログラム活動を行い、それを実践するにあたっての企画・計画・実施・評価のプロセスを通して、自分の意見を十分に述べ、人の意見を聞き入れることのできる一層の人間的成長を図ることである。

このタイプのローバースカウト隊では、他部門への奉仕が主となることから、自分たちの集会は月1回位がせいぜいとなろう。短い時間、限られた機会であっても、互いに情報を交換したり、つきないスカウティングの話やプログラム、指導法、キャンプの方法と工夫等、色々な話題に花を咲かせることは生涯に忘れられない重要な一時となるであろう。

＜専門技能型とは＞

ローバースカウト年代の特徴の一つに、特技、興味、趣味、スポ

ーツ等の共通の関心事によってグループを作ることがある。そのような共通の目的や話題あるいは技能をグループの柱にすえて活発な活動を行うのが、このタイプのローバースカウト隊である。

登山、ロッククライミング、セーリング、ヨットイング、カヌーイング、ハンググライディング、スキューバダイビング、各種スポーツ、環境保護、音楽、演劇、自動車工学、宇宙工学、外国語、比較言語学、国際政治研究、平和研究、バイオテクノロジー、自然科学、伝統工芸等、ローバースカウト年代の青年のニーズを満たす活動を何でも含めることができる。

このように多くの専門分野での仲間作りをローバースカウト隊の活動として認め、隊員たちがより一層、技能や研究の程度を深めながら、同時に個々の社会人としての適性と能力の向上を図り、各人のもつ資質の開発を通して人を高め、スカウト運動と社会に奉仕することにねらいをおく。

当然に、このタイプのローバースカウト隊では男女が一緒に活動する余地が広いことから、女子の参加は大いに奨励される。

以上述べた4つの型のうち、どれを選ぶかはローバースカウト隊の憲章で定められた内容に従うが、ローバースカウト活動はボーイスカウト運動の一環であることから、「ちかい」と「おきて」を離れた活動は存在し得ない。

また、いずれのタイプであっても、そのプログラムを実施するに当たっては以下の事柄が強調されなければならない。

- ① 自らの精神的な感覚を深めるもの
- ② 人生の楽しみとなるもの

- ③ 自己のアイデンティティの意識、価値観、ライフスタイルを確立するもの
- ④ 自らの方向を決められる人間となり、社会に対する責任ある成人としての参加ができるようになること
- ⑤ 個人の自由もグループの責任の下には譲れること
- ⑥ 有意義かつ変わらぬ友情を築けるもの
- ⑦ 地域社会に対して有意義な奉仕を提供するもの
- ⑧ 注意深い野外活動により、自然環境の保護や適応、そして良好な状態に保つことができるような活動のあり方

(4) ローバースカウト隊の構成

ローバースカウト隊の組織は、どのような活動を展開するか、活動のタイプによって構成の仕方は変わってくる。従来、ボーイスカウト活動全体を見ると、隊の構成は、隊長、副長、隊付、班、といったように固定化されてきたが、少なくともローバースカウト隊に限っては、規定に示された考え方は基本原理として、あらゆるタイプに共通の標準と位置づけて、活動のタイプや隊員の人数によって機能的で柔軟で、かつ必要十分な組織作りをはかることが必要である。とくに、注意すべきことは、上から決められた組織、始めから「こうだ」と指示された組織ではなく、自分たちが築き上げた組織という意識をもって臨むことが大切である。

ここから憲章というものの必要性が生まれ、すべてのローバースカウト隊で憲章を設定することが求められるのである。

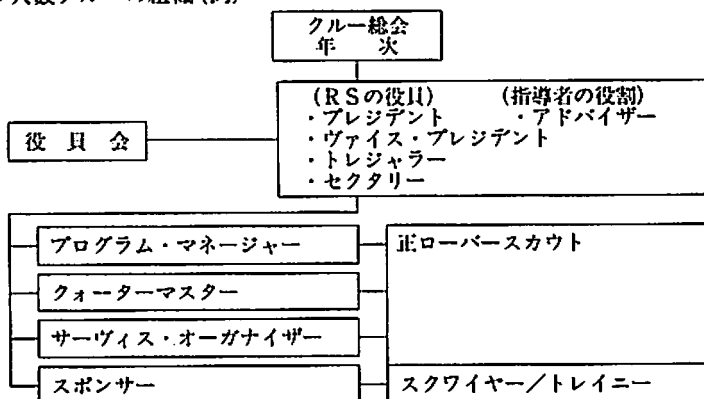
憲章については、項を改めて説明されるが、構成員の多寡や活動

の展開の仕方によって異なってくるし、それぞれ特色のある組織や内容となる。また、それに定められる役員の任務や呼称等も各ローバースカウト隊が独自にふさわしいものを考え出したり、これまでの例から選ぶことができる。

どのタイプのローバースカウト隊を選択するかにより、その組織が自ずと違ってくる場合でも、民主的な手続きにより、全員の合意を得て決めることが大切である。

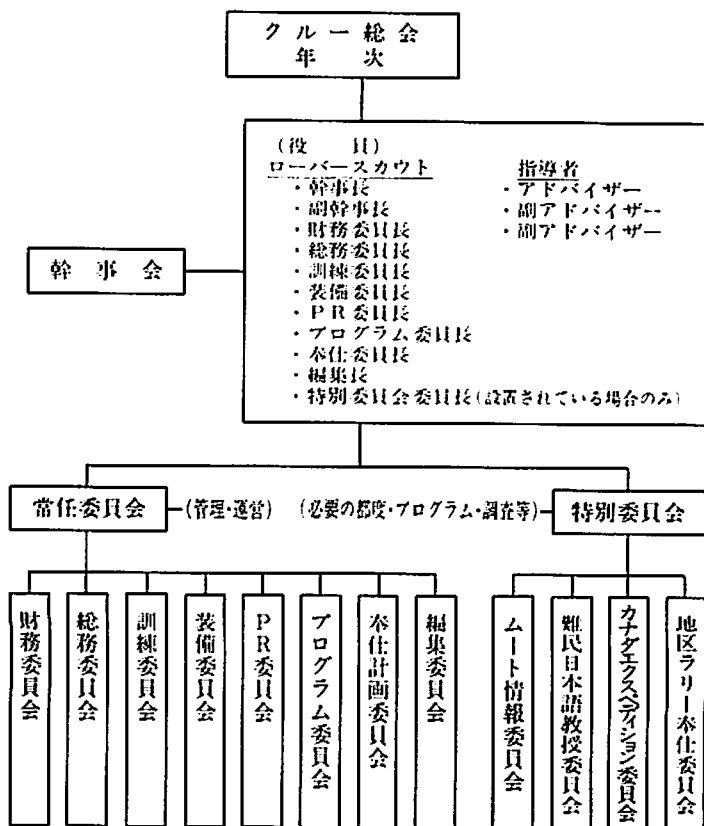
ここで一例として、少人数のローバースカウト隊と多人数のローバースカウト隊の場合、どのような名称の役務を決めるかを示すので参考にしていきたい。

(1)少人数クルーの組織 (例)



この例では、人数が10名内外の時、多くの活動を実施するにも一時に多くの担当者を置くことができないという実情から基本的な4項目、プログラム、施設用具、奉仕活動、新規参加者の訓練に絞って運営をすることになっている。人数が増加した時には、当然のことながら、管理運営と活動の分野での幅広い対応が必要となろうからそれに即した拡張が生まれてこよう。

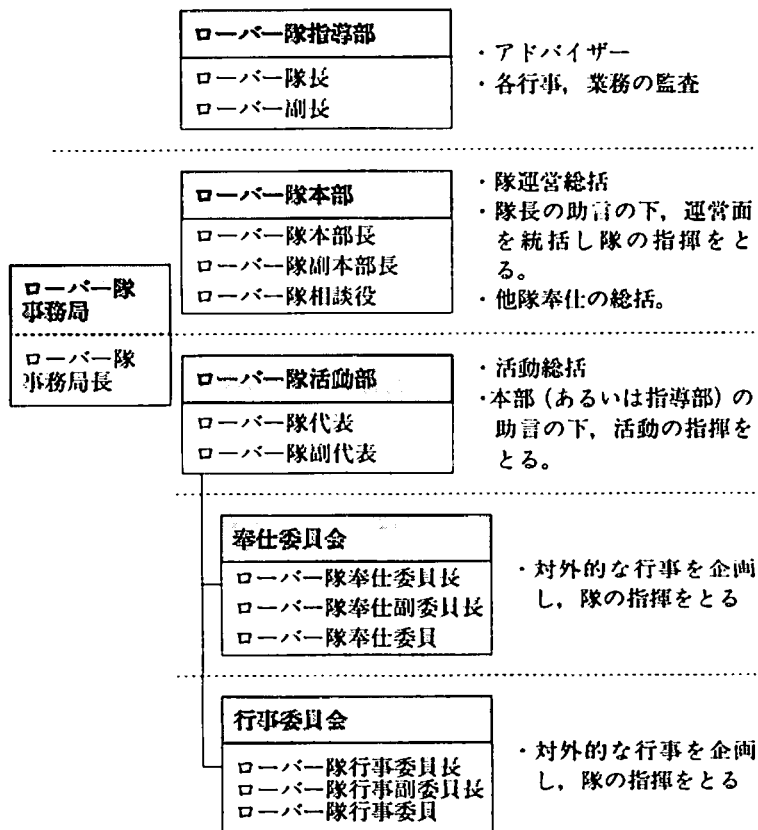
(2) 大人数クルーの組織（例）



この例では、大人数の隊を想定した組織とも言えるが、少人数であっても、メンバーが幾つもの委員会に関係して活動することによって採用できる形でもある。要は、メンバーが多くの体験を積み、企画し、計画を練り、実施していくことにより、社会人としての体験を幅広く積んでいくことを主眼とすべきである。

(3) 機能重視の組織の実例

スカウティング誌の1993年3月号の「ローバー通信」に掲載された大阪連盟高槻第4団ローバースカウト隊の組織が自主運営を主眼に構成されており、非常に興味深いので例示する。もちろん、組織の基本は、運営の根本的な理念によるものであるから、ぜひ同誌を併せてお読みいただきたい。



(5) メンバーの必要条件

ローバースカウト隊は、18歳以上の青年を加入の対象者としている。しかし、だれでも無制限にその仲間に加われるというわけではない。ローバースカウトはボーイスカウト日本連盟の組織に加盟し、世界のボーイスカウトの仲間に加加入するのであるから、当然のことながら規定の定めるところに従い一定の条件を満たさなければならない。

第524条A ローバースカウト活動は、18歳以上の青年男女を対象とする。

第524条B 前条の青年は、団委員長、ローバー隊長及び隊会議の承認を得て見習いローバースカウト(略称：見習いローバー)となり、登録することができる。

第525条 見習いローバーは、次の条件に適合する場合、スカウト歴を持たない者はちかいをたて、スカウト歴を有する者はちかいを再認してローバースカウトとなる。

- ① スカウト歴を持たない者は、この運動の目的、創始者ベーデン・パウエル の生涯と事績について大要を学び、第842条の1、基本のうち(2)、(3)、(4)ができること
- ② スカウト技能の修得と野外生活の追求に熱意を有し、ちかいとおきての意味を理解し、その実践につとめること、とくに明確な信仰を持つこと
- ③ 見習い期間中、ローバー隊長及び隊会議が必要と認め隊の活動に進んで参加すること

この規定から明らかなように、ローバースカウト隊に正式に迎え入れられるには加入希望者は、2段階の手続きを経ることになる。これは、仲間入りが受入側と加入する側との明確な理解と合意に基づくことを重視しているのである。とくに、スカウト運動は自発的に加入するのが基本であるから、それを確認し、責任をもって加入後は行動するところにこの手続きの意味がある。

中でも重要かつ厳格に求められることが、「ちかい」と「おきて」を遵守しスカウト運動の目的と基本方針に従うことである。これができなければ、ローバースカウト活動の門は閉じられることになる。

具体的には、新規に加入したいと思う青年も、シニアスカウト隊からの上進する者も1か月以上を観察試行の期間、つまり見習いローバースカウトとしてローバースカウト隊の活動に参加し、自分の興味に合致するか、前途は楽しそうか、一生懸命行うのにふさわしいかを考える。その上で、自分はこの生き方をすると決めたなら、新規加入者はちかいをたて、シニアスカウトからの上進者はちかいを再認することになる。

同時に、新しいメンバーは、正ローバーと認められる前にローバースカウト隊により設けられた課題をこなすか、隊で定めた基準に到達するかのいずれかが求められる。これは一種の試験段階であり、その目的とするところは、自らがローバースカウト活動を試してみること、そしてローバースカウト隊の掲げる活動の理想とするものが自分にふさわしいか、また基本方針を受容したり、その方針に従った活動をする機会を与えることであり、さらには、一定の技能水準に到達して、他のメンバーと共同して作業をできるかどうかを見

極めることである。

スカウティングはゲームである。ローバースカウトになる前の見習いローバースカウトが経過する試行期間でもゲームを楽しむように、それでいながら真摯に取り組まなければならない。規定を文章通りチェックするのではなく、楽しく取り組めるようにすべきである。加入の必要条件となる基準は、決して画一的なものではなく、加入したいと願う青年の能力を勘案して、柔軟性のあるものとして取り扱うことが大切である。

伝統型のローバースカウト隊では、この見習い期間の青年をスクワイヤー、その他のローバースカウト隊ではトレイニー（見習い）と呼ぶことができる。

(6) 上進者

シニアスカウト隊から上進してくるローバースカウト候補については、既にスカウティングの経験を有し、さらにローバースカウト活動というゲームを楽しみたいと思って上進してくるが、単に年齢的に上進の時期に至ったという理由ではローバースカウト隊に上進することはできない。

以下の2点については、注意深い確認が必要である。

- ① シニアスカウト隊長と、ローバースカウトの隊長であるアドバイザーの評価、検討により、スカウティングの方法がその候補者に適しているかの判断を受ける
- ② 本当にローバースカウト活動をしたいと熱望しているのかいったん加入したら、「ちかい」と「おきて」に基づいた行動をとる

ことが必須要件であるから、これを判断の基準に据え、入隊希望者の平常の行動を観察し、基本的なスカウティングへの考え方や世界観を含め結論を出すことである。

上進者の受け入れに当たって、次のような例を参考にステップを踏ませることも大切である。

(i)オリエンテーションキャンプ（1泊2日、野営）を開催して導入教育を行う。（内容の例示）

- ・「ちかい」と「おきて」について
- ・「信仰」について
- ・結索（基本ノット、ラッシング）
- ・地図とコンパス
- ・オリエンテーリング
- ・救急法
- ・ローバースカウト活動の概要

(ii)このオリエンテーションキャンプが終了した時点で、スクワイヤーまたはトレイニーとなり、上進式にのぞむことになる。

(iii)ローバースカウト隊の指定した他の部門への奉仕を1か月継続する。

オリエンテーション・キャンプの終了後、ローバースカウト隊はシニアスカウト隊と合同で候補者に対し上進式を執行する。

- ・この上進式において候補者は、「ちかい」と「おきて」の再認の後、スクワイヤーまたはトレイニーとなる。

- ・ローバースカウト隊独自のネッカチーフがあれば、ここで授与され、着用が認められることになる。

上進式後、スクワイヤーまたはトレイニーとしての必要条件を満たすための挑戦をスポンサー（訓育担当者）のアドバイスにより開始することになる。

(7) スカウト経験のない者

新規に加入したいと思う青年は、スカウティングについてよく知らないから、一種の導入教育が必要となる。そのねらいとするところは、スクワイヤーまたはトレイニーとしての試行期間を納得して参加することである。

※ スカウト経験のない青年は、試行期間が終了するまで、「ちかい」をたてることを留保する。

ただし、必ず正ローバーに叙任する前に「ちかい」をたてることが要求される。このことは十分な熟考期間の後で、成人としての理解により「ちかい」をたてるための猶予を持たせるためである。

伝統型ローバースカウト隊の加入必要条件（スクワイヤー訓練）

（例）

- ① ローバースカウト隊の実施する社交活動、野外活動、奉仕活動、訓練に積極的に参加する
- ② スクワイヤーは、ボーイスカウト運動の目的、原理及び組立について知るために次の項目のうちのいずれかを行うこと

- (a) 現行のビーバー、カブ、ボーイ、シニア及びローバー関係の出版図書を読み、理解する
 - (b) 以下の集会に出席すること
 - ビーバースカウト隊の集会
 - カブスカウト隊の集会
 - ボーイスカウト隊の集会
 - シニアスカウト隊の集会
 - 団会議
 - (c) ボーイスカウト指導者講習会に参加し修了すること
 - (d) 指示されたテーマにつきローバースカウト隊の集会で討論を行う
- ③ 2級課目の全内容についてボーイスカウトに指導できること
(※第524条の内容とは異なるが、伝統型ではこの程度は必要である)
- ④ スクワイヤー自らが計画し、次の項目の一つを実施する
- (a) 40km以上の週末ハイクを行い、一泊し、ハイキングに必要な技能及び軽量キャンプについて知る
 - (b) ロッククライミングを体験し、ロッククライミングに必要な技能と基本について知る
 - (c) ケーヴィングを体験し、ケーヴィングに必要な技能と基本について知る
 - (d) 週末を利用した2日間の山岳縦走を行い、縦走に必要な技能について知る
 - (e) 80km以上の週末サイクリングを行い、一泊し、サイクリン

グに必要な交通ルール、走行マナー及び軽量キャンプについて知る

(f) オートバイによる週末ツーリングを行い、300km以上走行し、一泊し、交通ルール、走行マナー、修理、及び軽量キャンプについて知る

(g) 日赤の開催する救急法講習会に参加し、適任者証を取得する

(h) 16時間以上の奉仕活動

⑤ 「ちかい」と「おきて」を理解し、次のうちのいずれかをスポンサー、幹事長、アドバイザーのうち一人と討議する

(a) 「ローバーリング・ツウ・サクセス」を読み、自分の生き方についての討議を行う

(b) 「ちかい」と「おきて」を基礎として人生指針について討議する

(c) 生きる力としての「信仰」について討議する

⑥ 服を着たまま50m泳ぐこと

※ このスクワイヤーの訓練（到達）期間は6か月を越えないこと
3～4か月で終了することが望ましい。これらの条件を満たしたときは叙任式を行い、正ローバースカウトとなる。

伝統型以外のローバースカウト隊入隊の必要条件(トレイニー訓練)
(例)

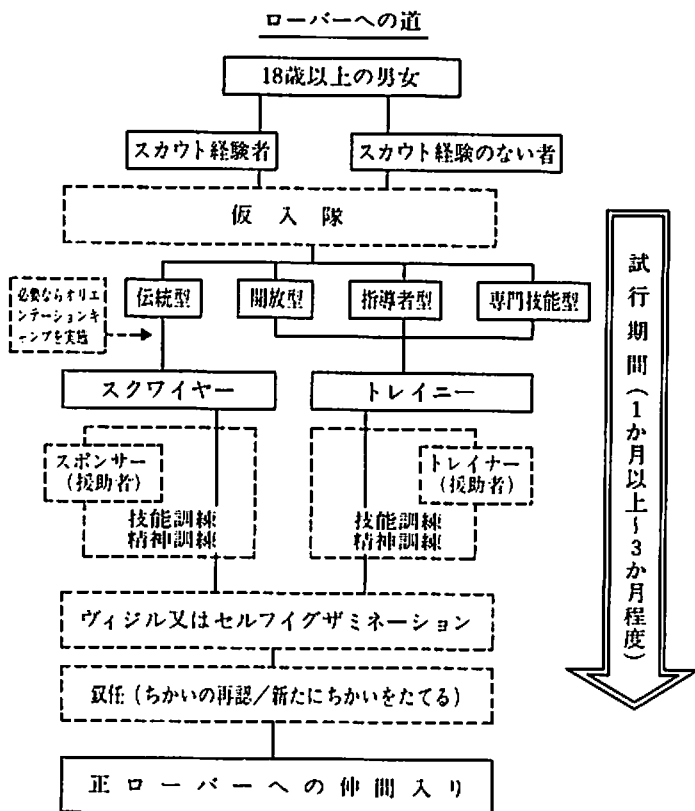
① 年齢が18歳以上25歳未満であること

② 最低4週間をローバースカウト隊のゲストとして過ごす

- ③ アドバイザーが指名した正ローバーがスポンサーとなり、ローバースカウト隊とスカウティングについてのオリエンテーションを受ける
- ④ 「ちかい」をたて、スカウト運動の目的と基本方針に従い、かつローバースカウト隊の憲章を受け入れる
- ⑤ ローバースカウト隊の自主運営・民主運営に参加する

スポンサーとは

アドバイザーの指名により、正ローバーがスクワイヤーまたはトレイニーの試行期間中の挑戦項目について達成できるよう支援し、助言する役割を持つ者のことをスポンサーという。



※ ヴィジル(VIGIL) とセルフイグザミネーション(SELF-EXAMINATION) について

ヴィジルもセルフイグザミネーションも基本的には同じであるが、ともに自己を見つめ、今後どういう生き方をしようかと自問することである。実施にあたっては、以下の点に留意しなければならない。

<ヴィジルのねらいとするところは>

- ・自分は人生において何をしようとするのか
- ・成人として「ちかい」の意味を十分に理解したか、そして叙任されるのに十分な準備が整ったかを考えるためである。

<セルフイグザミネーションのねらいとするところは>

- ・自分の過ごしかたを振り返り、将来の可能性を考え、神への奉仕を無言のうちに言い、仲間に尽くすことを確認することである。

<ヴィジル（セルフイグザミネーション）の場所>

- ・他人にさまたげられない静かな所
(キャンプ場、集会場の個室、教会、寺社、誰もいない森、その他一人になれる場所で本人の希望するところ)

＜ヴィジルの内容＞　－自分自身への問い合わせ－

- ・ものみな成長するごとく、時は、刻一刻と迅速にすぎ去る。いうならば、一生は短く、たちまちにして終わる。

（自省の項目例）

- ① 私は、自分の生命を、最善に、そして有効に使っているだろうか？
- ② 私は、何ら、ためになることをしないで、時間を無駄に過ごしてないだろうか？
- ③ 私は、人々に対して、まちがったことをしていないだろうか？
- ④ 私は、他の人々の力になろうとしないで、自分のためだけを考えて行動していないだろうか？
- ⑤ 私は、日々、だれかを傷つけてはいないだろうか？ それを、償うことをしただろうか？
- ⑥ 私は、これまでに、だれかに助けられたことはないか？ 私が助けてあげた人が1人でもあったらどうか？

スカウト運動の、ローバースカウト部門は「奉仕の仲間」だといわれている。

奉仕は、閑時にだけするものではない。奉仕は生き方の態度であって、いかなる時も、奉仕の機会をつかむよう常時、待ち構えていなければならない。

(自省の項目例)

- ① 私は、単なる興味本位でローバー部門に加入しようとしてはいいか？
- ② 私は、本気で自己を奉仕のために犠牲にするという覚悟をしているか？
- ③ 私は、奉仕ということをどういう意味に考えているか？
- ④ 私は、自分の計画や実行において、自分のことよりも他人のことを、より多く思っているだろうか？
- ⑤ 私は、どういう種類の奉仕にいちばん適しているだろうか？

われわれの奉仕が成功するかしないかは、われわれの人格いかに左右されることが大きい。他の人々に良い影響を与えるよう、そのために、自分自身を訓練せねばならない。

(自省の項目例)

- ① 私は過去に身につけた悪い習慣をすてようと思うか？
- ② 私の性格上、何が自分の弱点なのか？
- ③ 私は絶対的に恥を知り、名誉を重んじ、誠実であって、信頼に値するだろうか？
- ④ 私は、神（仏）と国と家族、そして上司、目下の者たち、およびスカウト運動、友人、そして自分自身にも忠誠だろうか？
- ⑤ 私は明朗だろうか、他の人々に対して快活で親切だろうか？
- ⑥ 私は清潔な生活をし、清潔な談話をしているか、どうか？
- ⑦ 物事が順調にゆかず意に反する場合、私は勇気をもってよくそれに耐えて意志を貫徹するかどうか？

- ⑧ 私は他人の説得によって自分の意思を曲げるか、それとも自分の意思をもちつづけるか？
- ⑨ 私は、賭けごと、飲酒——誘惑に打ち勝つだけの強い意志をもっているか？
- ⑩ 私がもし、そのような誘惑に弱いならば、それを改め、うちすることができるだろうか？

(8) 女子の参加

18歳以上の女子は伝統型のローバースカウト隊のうち、特にローバースカウト隊の憲章によって女子の参加を認めていないものを除き、基本的にどのタイプのローバースカウト隊にも加わることができる。

ローバースカウト隊内での役割分担、プログラム参加、野外活動等は、ローバースカウト隊の一員としてすべて平等に行われるし、試行期間の必要条件も男子ローバースカウトとまったく同じ内容である。

女子の加入によって、野外活動の質、挑戦度が低下してはならない。レベルを落とさず、励まし、助け合いながら一定の水準を保つように心掛けなければならない。

反面、長期の野営等においては、特に衛生面等、女性特有のものに対する配慮は必要である。

また、女子を受け入れたローバースカウト隊では、原則的に女性アドバイザーを選任し、女子ローバースカウトの相談役、生活面でのアドバイス等の役割を担ってもらうことが必須の要件となる。

(9) 隊を発足させる方法

ローバースカウト隊を発足させるには、以下の5つのステップが必要となる。

- ・ 8名以上のメンバーを集めること。
- ・ 集まったメンバーにより協議し、自治規則とでもいうべき憲章を作成し、ローバースカウト隊の性格、役員、メンバーシップ、スクワイヤー（またはトレイニー）訓練、スポンサーの責任、ローバースカウト訓練（含む集合訓練・個人プロジェクト等）、会費と財務、登録、ユニフォーム、会議体、提案方法、係、幹事、記録と保管、追記等の項目を決定する。
- ・ 単にボーイスカウト関係者という狭い枠にとらわれず、広い視野と十分な社会的体験、専門的知識をもった人にアドバイザーになってくれるよう依頼し承諾をとり、団委員会の承認をとりつける。
- ・ 年間プログラムを作成する。
- ・ 以上ができた時点で登録申請する。

(10) 憲章

クルーには4つのタイプがあり、どれを選択するか、また、どのように活動するかはクルーのメンバーの意思による。

全国には地方性というか、それぞれ独特の文化や歴史的背景がある。また、都市部と地方では集まるメンバーの人数の違い、興味や関心の違い、在学校の違い、職場の違い等がある。その活動内容を画一的で固定化してしまうと融通の利かないものとなり、活発な活

動は自ずと姿を消すことになる。そこで、あらゆる状況に適合でき、柔軟で、ローバーのニーズを反映し、具体的にどのように活動するのか、そのための管理はどうするのかを決めることが必要となる。いわば、自分たちの意思を具体化し、その目的や運営ルールを定める必要が生ずる。

すなわち、ローバー活動の自治規則とでも呼ぶべき「憲章」の制定が必要となる。憲章ができて、初めてローバークルーは団によって認知されるといっても過言ではない。憲章は、当該ローバー隊の目的、女子の加入、見習いローバーの取り扱い、活動原則、訓練、登録、運営規則、役員、会計原則などを盛り込み、メンバーが共通に理解し、それぞれ自分に課せられた役割を分担し、楽しいローバー活動を積極的に行うためのものである。

以下に例を示す。

—例 1. (伝統型のローバースカウト隊にふさわしいもの)—

クルー憲章

第 1 章 名称

クルーの名称は日本ボーイスカウト横浜第79団ローバークルーと称する

第 2 章 目的

クルーの目的は以下の通りとする

1. クルーのメンバー訓練の手法により、互いに励まし合い、自信をもった責任ある公民となるよう育成する

2. クルーの最上の能力にふさわしい奉仕を公衆に対して行う
3. クルーのメンバーに対し愉快で仲間に共感できる活動を提供する
4. スカウト運動の構成員としての青年を魅きつけ、継続し、自己修養にあたらせる
5. 伝統型のクルーによるローバーリングを行う青年のために横浜市港北区太尾町2-0000に所在するローバーデンを施設として供与する

第3章 憲章

1. クルーは以下の者に開放する
 - ① 正ローバー
 - ② スクワイヤー
 - ③ 男子青年で成人にふさわしい肉体的・精神的開発を行いたいと思う者18歳以上25歳未満の青年とする
2. クルーの構成は以下の通り
 - ① クルーリーダー
 - ② ローバーアドバイザー（正アドバイザーは30歳以上60歳未満とし、副アドバイザーは26歳以上40歳未満とする）
 - ③ 正ローバー
 - ④ クルーでの試行を認めたスクワイヤー

第4章 クルーメンバーの区分

クルーメンバーは以下の通り 2 段階に区分する

第 1 段階 試行期間 スクワイヤー

第 2 段階 訓練期間 叙任を受けた正ローバー

クルーにおける構成は以下の通りとする

- ① スクワイヤーにスカウトクラフト及び公民としての一定の基準を習得させ叙任式に備えさせる
- ② 正ローバーのために活動のプログラムを提供する

第 5 章 構成員の条件

クルーの構成員になりたいと思う者は以下の条件に適合すること

- ① クルーの承認を得ること
- ② シニア一隊からの上進者は、立派なシニアスカウトとしてシニア隊長からの推薦を得ること
- ③ スカウト経験のない者は実際的なスカウティングを学びたい、オープンエアライフ(野外生活)を満喫したい、ちかいとおきてを生き方としたいと強く願う者であること
- ④ 加入申込書が受理されても、必要な試行期間のプログラムを消化しない限り正ローバーには叙任されない
- ⑤ 加入申込書が受理されたものは、アドバイザーが指名した正ローバーにより、生活面、スカウ

ト活動の両面に於て援助を受けつつ、試行期間
のプログラムを消化する

- ⑥ スクワイヤーとして認定される以前に最低1ヵ
月間クルーの活動にゲストとして参加する

第6章 スクワイヤー訓練

- ① クルーの定める条件を全て完了し、スポンサー
及びクルーを満足させること
- ② 試行期間終了後、叙任式の前にヴィジルを行う
こと

第7章 ローバー訓練

- ① 「ちかい」「おきて」、モットー、スローガンの
理解を深め日常生活の中で反映すること
- ② 実際訓練（野外活動によるウッドクラフト、個
人プロジェクト、他に対する奉仕としての訓練、
等）
- ③ 集合訓練（世界ムート、国際大会、日連・県連
主催のムートへの参加、難民支援のための日本
語指導法、文化的催し、地域社会への奉仕のた
めの訓練、等）
- ④ 自己修養プログラムの完遂
- ⑤ その他クルーで定めるもの

第8章 資金と会計

- ① 構成員は年間36,000円を活動費として支払う
（事情ある者は4月と10月に各々50%の18,000

円を2回に分納することができる)

- ② アドバイザーからは活動費は徴収しない(寄付は歓迎する)
- ③ クルーは〇〇銀行、大倉山支店に口座を開設し、必ずクルーリーダーの承認を得た上で会計が金銭の預貯金を行う
- ④ 構成員が正当な理由なくして3か月活動費の支払いを怠った時は、構成員としての資格を喪失する
- ⑤ 休隊、または特別の理由により活動が出来ない時でも登録を継続する時は活動費は支払わなければならない。但しクルーにより特別認定を受けた時は半額とする

第9章 登録

- ① 登録を望む者は締切日の1か月前までに文書により書記に届け出る
- ② 25歳の誕生日を迎えた者は脱退しなければならない
- ③ 以下の事をなした者はクルーの構成員としての資格を一時停止する
 - ・憲章、運営規則、その他の取り決めに違反した者
 - ・クルーの決定に違反する者、または拒む者
 - ・クルーの名誉を傷つけた者

第10章 クルーの象徴

- ① クルー旗はパルテノンホワイト色とする
- ② ネッカチーフはパルテノンホワイト地に黒色のバイアスを取りつける
ネッカチーフのデザインはクルーで定めたものを使用する

第11章 会議体

- ① 全体会 年1回開催し、次年度の計画策定と基本方針を決める
- ② 緊急会 クルーの意思決定を要する緊急案件について必要の都度開催する
- ③ 幹事会 毎月の1日に開催する議事はデンに掲示する
- ④ 委員会 毎月1回開催する
常任委員会の決定はデンに掲示する
特別委員会の議事内容及び承認を受ける内容については幹事会に文書で提出する
- ⑤ その他 プログラムの進行、準備状況により、必要の都度開催する

第12章 クルーの役員

当クルーは下記の役員を置く

- ① クルーリーダー
- ② アドバイザー

- ③ 副クルーリーダー
- ④ 書記
- ⑤ 会計
- ⑥ その他（クルーの構成員が15名を越えたときは
幹事会の決定により必要な職掌を指定し
て係を任命する）
 - ・任期は1年とし再任も可
 - ・任務は別に定める
 - ・役員への選任は全体会の多数決による

第13章 幹事会

第12章に規定の役員をもって幹事会を構成する
幹事会では、以下の事項について議決する

- ① クルー運営の基本事項の決定
- ② 周知すべき事項の決定と通達
- ③ プログラムの承認
- ④ 金銭収支の承認
- ⑤ 対外折衝の責任部署の決定
- ⑥ クルーの名誉に関することの取扱い

※ 幹事会の構成員は2つ以上の役職を兼務しない

第14章 憲章の修正

ここに定めのない事柄または改正を要する内容については、事由の生じた時点ごとに修正案を幹事会が作成し、
構成員の2／3以上の賛成をもって決定する

- ① 決定された内容についてはデンに掲示すると共

に各人にコピーを配布する

- * 憲章を制定したときは、ローバー隊長は団委員会に対し報告し了承を得ることが必要である。

第15章 次の資料は役員の指示に従って定められた所に保管する

- ① クルーリーダーによる個人記録
- ② 書記により記録された議事録
- ③ 会計により記帳された出納簿
- ④ 活動日誌
- ⑤ 備品リスト



野営場の整備を行う地区のローバー



スイスのカンデルスティ
ッヒ国際スカウトセン
ターへエクスペディショ
ンを企画実施した東京連
盟大多摩地区ローバー



ニュージーランド ローバームートサービス
プロジェクトの準備にあたる



野営開拓作業

7. 自主運営と指導者の助言

(ローバー隊の運営)

(1) 自治の仲間たち

ローバースカウト隊運営の原則は、隊を構成するローバースカウト一人ひとりのニーズを満たすこと、個人および集団による種々のプログラム活動によって構成員であるローバースカウトに人間的成長が見られるような機会を与えることを念頭に進めなければならない。

したがって組織としては、一つのプログラムの企画と実施に当たって、各人のもつ能力、責任を自在に発揮させ、組織の機能が有効に働くよう調整することが大切である。

また、実際の運営に当たっては、隊プログラムを明確に設定することはもちろんであるが、同時に時間の経過と共に変わっていく各人のニーズにうまく対処していくことが大切である。

組織の運営を最も効率的に進めるには、一つの事業をチームで行うとき、任務の分担を能力のある少ない人数に過不足なく分配し、仕事の量も、費やす時間も、支出する金額も少なくし、ローバースカウト隊の望む目標に到達することである。それは言うは易く行うは難いことであり、一朝一夕には実現できないとしても、継続的に行うことによって、毎回少しでも実現できるようにすべきである。ただ組織には、それぞれ長短があるから、こうでなくてはならないという強い思いこみで組織を作るのではなく、最も自分たちのニー

ズに適する組織を考えるべきである。

組織の特徴を例示すると

① 形式にこだわる型（機能優先型）

ものごとの処理、組織体も全てキチッと決まっていて、それなりの成果をあげるが、反面、構成員にフラストレーションがたまったり、指示に従うだけとなる傾向がある。

② 形式ばらない型（人間優先型）

構成員に自由裁量権を大幅に与えるため、個人の行動の自由は拡大するが、組織として向かっている方向が分からなくなる傾向がある。

③ 柔軟に対応する型

各人のもつ能力に依存し、参加の機会を与えるため創造的な仕事ができるようになる。またお互いが支え合って人間関係もスムーズになる。

等があげられるが、ローバースカウト隊では、一人ひとりに参画の機会を増やすことによってローバースカウト隊の運営はスムーズに行われるし、ローバースカウト隊への貢献度、満足度、参加度は自ら良好なものとなる。

また、ローバースカウト隊の運営には、二つの面があることを承知しておかなければならない。

一つはローバースカウト隊内部の業務に関する面で、これには業務運営規則のようなものを設けることにより、円滑な運営をするようにしなければならない。そして、そこでは記録と通信、会計と備品管理、プログラム計画等の業務がある。

二つ目は外部に関する面で、対団委員会、地区、官庁、関係機関、その他プログラム活動に関わって折衝する所や、加入希望者に対する情報の提供等、責任ある対応が必要となる。そのためには、ローバースカウト隊内で、それぞれが担当する業務の内容明細書を作成し、権限、報告書の送付先等を明確にしておくことが大切である。いずれにせよ、ローバースカウト活動の基本は自治であるから、自治が崩壊したり、団委員会から苦情が出たり、社会的に糾弾されたりするようになっては何のためのローバースカウト活動かが分からなくなってしまう。「自治の組織はローバースカウト隊の生命」ということを肝に銘じて、運営に当たってもらいたいものである。

(2) ローバースカウト仲間の中の指導者

〈幹事長〉

ローバースカウト活動は自治が原則であるから、活動や運営も全てローバースカウトたちが率先して意欲的に行うべきである。したがって、ローバースカウト隊の運営の実際的な責任者は、幹事長(クルーリーダー、会長、議長、キャプテン等、その名称はクルー毎に決めることができる)で、その任務は

- ・全体の総理
- ・それぞれの会議に対する議題の準備
- ・アドバイザー、他の役員と協同しながら活動の調整
- ・クルー外に対してクルーを代表する

〈副幹事長〉

幹事長を補佐するのが、副幹事長(クルーリーダー代理、副会長、

その名称はクルー毎に決める) で、その任務は、

- ・活動に対する責任
- ・基本活動と構成員の訓練
- ・役員、委員長等に事故あったとき、交代要員の確保
- ・委員長等の議事録作成の助力
- ・幹事長事故あるときの代理

クルーの会議体

- ・全体会 (年次総会及び緊急事案のため全員の意見を聞くとき)
- ・幹事会 (クルー運営のため定期的に行う)
- ・委員会 (常任、特別を問わず、業務遂行に必要な都度)
- ・その他 (クルーの必要に応じて)

(3) 役務の分担と管理

〈幹事会〉

- ・クルー全体のプログラムプロセス管理と意思決定
- ・責任を分担するが、クルーの業務に関する処理
- ・役員の主要な業務はプログラム活動、奉仕計画、クルー記録の保管、通信文書の保管、資金管理、及び自己訓練

〈幹事会役員〉

- ・選挙により選任されクルーの業務に当たる
- ・資産管理、資金管理、プログラム進捗管理の責任
- ・業務分担規定によるそれぞれの役割と権限、期間等の明確化
- ・訓練の責任

〈幹事長〉 既述

〈副幹事長〉 既述

〈書記（秘書，記録係等，名称は各クルーで決定）〉

- ・クルー及び幹事会のすべての記録を残し，次回のミーティングに議事録を準備し，配布
- ・クルーのすべての通信文書の取扱い責任
- ・会合の通知発送
- ・クルーのすべての活動記録の保管
- ・最新の構成員の個人記録（住所，電話番号，保護者名，在籍学校（職場），加入クラブ，趣味等）の保管

〈会計（財務，勘定方等，名称は各クルーで決定）〉

- ・収支管理
- ・クルー会計帳簿の保管
- ・会計報告書を四半期毎に報告
- ・外部の監査役（団委員等）に対し毎年1回帳簿と手持現金を提出

〈委員長（常任及び特別委員長）〉

- ・幹事会役員とクルーに対し，責任をもつ（計画達成の）
- ・召集がかかったときは幹事会に出席
- ・委員会の活動内容の報告（幹事会に対し）
- ・業務が終了したときは金銭報告を含めて活動報告を幹事会に提出

(4) ローバースカウト隊の指導者

① 指導者の役割

他の部門と異なり、指導者（隊長）が直接に指導したり、訓練したり、指示的な物の言い方をしたりするのはローバースカウト活動本来の在り方ではない。ローバースカウト部門における成人指導者の性格は、助言者、顧問という立場であり、その名称もアドバイザーとするのが適当である。

しかしながら、ローバースカウト隊が成功するかどうか、活発な展開ができるかどうかは、ひとえにアドバイザー役の隊長にかかっている。有能なアドバイザーは、より多くの事を成し遂げたり、能力を伸ばしたり、できないと思っていたことを実現したりする手助けをしてくれるのもである。

アドバイザーとして隊長は通常、次のような事をする。

- ・助言したり、疑問に答えたり、問題点を指摘したり、思いつかない点を示唆したりする。
- ・あまりに緊張が高まり過ぎたような場面では、ローバースカウトたちをリラックスさせるために、ジョークを言ってみたり、気分転換をはかったりする。
- ・豊富な人脈を活用して、プログラム活動にふさわしいインストラクターをローバースカウトたちに紹介したり、専門家に個人プロジェクトの達成のために、助言をもらえるように依頼したり、裏方として役立つ。
- ・いろいろな活動の協力者、協賛者を見付けてくれたりする。
- ・状況により、必要があれば、方向づけたり、示唆したり、沈黙をまもる。
- ・「自らの行動に責任をとる」ことが自分自身の成長に重要である

- ことを身をもって示し、ローバースカウト隊に指針をあたえる。
- ・「行うことによって学ぶ」ことを「興味の追求」という言葉に置き換えて、あらゆる面に積極的に挑戦し、新しい局面を切り開くよう励ます。
 - ・感性を豊に、ヒューマニズムを育むことを励ます。
 - ・何かに挑戦することを示唆する。
 - ・考え方について、別の視点をさりげなく提示し、気付かせる。
 - ・そして必要なときには、直接の支援も行う。

② 標準的な指導者の編成

ローバースカウト隊は、ビーバー、カブ、ボーイ、シニア隊と同様、標準団の組織の一つとして、団委員会、団会議に隊指導者が出席して団の方針を良く理解し、その決定に従うのはもちろんのことである。

したがって、その構成は正規の指導者を任命の上、隊としての標準的な組織を設置し、教育規定に従い、次の指導者を団委員会によって任命してもらうことである。

508条 ローバー隊の隊長（略称：ローバー隊長）及び副長は、団委員会が第523条の隊会議の賛同を得て任命する。

② 男女のローバースカウトで構成される隊、班については、原則として男女の指導者を任命しなければならない。

509条 ローバー隊長は、青年を指導するに足る品性と経歴を有し、ウッドバッジ研修所ローバースカウト課程を修了した者、あるいは県連盟がこれと同等の資質と経験を有すると認めた者。

② ローバー副長は、青年を指導するに足る品性と経歴を有し、ボーイスカウト指導者講習会を修了した者。

510条 ローバー隊長及び副長の年齢は、25歳以上とする。ただし、隊長は30歳以上が望ましい。

511条 ローバー隊長及び副長は、各種の必要な指導者訓練に参加し、その課程を修了するよう努力しなければならない。

512条 ローバー隊長は、副長の協力を得て隊活動全般を指導する責任を有する。ただし、隊内の訓練及び運営に関する事項は、できるだけ隊会議にゆだねるべきである。

この中に示されているように、ローバースカウト隊の指導者には、青年の指導に適した社会的経験の豊かな、しかも円熟した人格が求められ、その任務を果たす上からは、ローバースカウト自身が常にイニシアティブをとるよう隊会議を中心に指導していくことが期待されている。繰り返すまでもなく、各ローバースカウト隊はそれぞれ憲章を定め、隊指導者の呼称も役割も明確にされているから教育規定にある指導という用語も、また隊会議という意思決定機関の名称も憲章に即して読み替える必要がある。

指導者の訓練にあっては、平成3年から研修所のローバースカウト課程が開始され、実修所においても近い将来に実施されることになっており、これら定型訓練においてはこのローバースカウト・ハンドブックにより指導者の知識・技能・心構えが訓練されている。まだ研修所が開設されて年数があまり経っていないので、すべてのローバースカウト隊長、副長にまで研修所での訓練が及んではないな

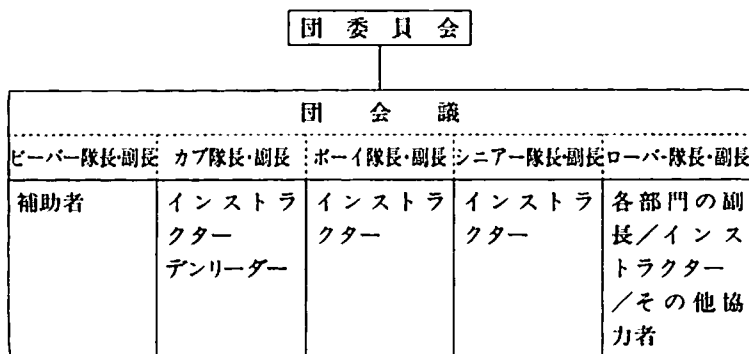
いが、ローバースカウトの自主運営により活発なローバースカウト活動が展開されるよう指導者の努力と研鑽が切に望まれる。

(5) 団内の他の組織との関係

ローバー隊は、自治組織ではあるが、団内の一つの部門であるので、隊長（アドバイザー）は団委員会や団会議等に出席し、必要な報告を定期的に行う必要があり、エクスペディション等の大がかりなプログラムや危険を伴うときは、実施前に承認を得るとともに、必要な助言を求めることが必要である。

また、シニア隊などの他の部門に対し、インストラクターの派遣、プログラム活動への助言など、積極的にローバー活動の一環として奉仕を展開することが必要である。

ローバースカウト隊のタイプによって、団委員会や団会議との係わり方は変わってこようが、ある意味ではビーバー、カブ、ボーイ、シニアが縦割りの組織構造の中で、同じ隊という呼称の組織であ



りながらローバースカウト隊は団会議や団委員会と同じく、横割りの組織構造として位置付けることができる。

ローバースカウトは、常に団内のすべての隊の活動をお互いの情報交換や交流により知り得る立場にあるから、団の総体的な充実発展に貢献する多大な役割を負っているといえる。



8. 隊活動の計画と展開

(隊活動のプログラム展開)

(1) 活動計画とプログラム

ローバースカウト隊の活動は、ローバースカウト年代にふさわしい知性と体力に裏打ちされ、かつ精神的な面でも幅広い活動によって、ローバースカウト自らが人間的な成長をはかり、持っている力を実際の活動に役立てることが目標である。それにはローバースカウト自身が互いに話し合い、隊長や他の指導者または先輩、年長者等のアドバイスを得て、有意義で実施可能なプログラムをリストアップし選択して年間活動計画を立て、それにしたがって隊として、個人として実施する具体的な活動プログラムを立案・実行して行くことになる。

ローバースカウト活動には「進級課目」や技能章課目のように進歩を測定する課目が明確に定められていないから、すべて自分たちの手で個人としてグループとしての進歩はいかにあるべきかを研究してプログラムを作り上げていくことが必要である。これは、それぞれのローバースカウト自身が置かれている状況によって異なるものであるが、実際にどのような活動プログラムを企画・立案するかは「ローバースカウト活動の目標」に示されている。

6つの項目にしたがって自分たちのニーズをまとめ、社会が青年に求めているものは何かを把握し、全員のアイデアを結集してプログラムを作り上げるのである。すなわちプログラムは現代社会の

中で自分たちが求めているものを、自分たちに最も適したものに自分たちが作りあげて行くものである。

そのローバースカウト隊プログラムの在り方を要約すれば次の3つになる。

- ① 自分たちの進歩成長に役立つもの。
- ② ローバースカウトとして楽しく魅力あるもの。
- ③ スカウト運動として社会地域から世界にまでに貢献するもの。

この3つに照らし合わせて立案して行くのであるが、さらに次のような点をチェックしてみるとよいだろう。

- ① 全員の意見が反映されているか。
- ② 実施可能なプログラムか（人的・物的・資金的な面から無理や危険はないか）
- ③ 単なる娯楽プログラムに終始していないか。

さらにプログラムの中にローバースカウトの3要件が満たされているかということが大きな立案の指針となる。すなわち、「ローバースカウトは、①野外活動と、②奉仕活動をする、③兄弟仲間である」という基本理念が隊活動プログラムの中に欠かせない要素として貫かれていることである。

「野外活動」についても「奉仕活動」についても「ローバースカウト活動の目標」の6つの項目の中に明記されているが、③の「兄弟仲間である」とは、どんな意味を持つものであろうか。

ローバースカウト年代は個人差はもちろんあるが、自分の個性がはっきりしてきて、将来の自分が進むべき方向を明確に決定する年代である。また、趣味や興味の分野においても自分に適したものを、

情熱を傾けられるもの、友達関係で性格の合うもの、合わないものが自分でも分かってくるという年代である。

したがって、活動プログラムもまず個人プログラムや自己修養等、自分の個性やニーズを自分なりのプログラムを作って実施することからまずスタートして行くことになる。しかし、個々のローバースカウトが実施する個人プログラムとしての野外活動や奉仕活動を、もっとダイナミックに効果的に実施するには、どうしても仲間とチームを組んで取り組んで行かなければならない。そして、その仲間の中でスカウトの志を同じくするローバースカウト同士の仲間意識が生まれ、クルーの中で切磋琢磨しながら一人ひとりのローバースカウトが人間的に成長していくことになる。

「同じ釜の飯を食った仲間」という言葉があるが、ローバースカウト活動の中で汗を流し合い、苦楽を共にしたローバースカウト仲間の友情は、生涯忘れることのできない思い出と、友情の絆を結ぶものとなるだろう。

(2) プログラム立案の過程

① 個々のローバースカウトのニーズを集約する

隊活動の中で、何と何を年間プログラムの中で取り上げるかは、先に述べたように、それぞれのローバースカウトがニーズを出し合うところから始まる。

ニーズ集約の手法については、KJ法やブレインストーミング等の話し合いによって決定されることになるが、伝統的に実施している活動プログラムと、新しいアイディアに基づいて取り入れるプロ

グラムとをどのように調整させるかが、プログラムの立案の妙味である。クルー全員のニーズを引き出して年間プログラムを作りあげることが、実施結果の成功・不成功につながるので大変重要なところである。

② プログラムの順位づけと年間割り付け（緊急のプログラムも随時組み込む）

集約されたニーズは、ローバープログラムの要件に照らし合わせ、また、実施可能なものから順位を付けてローバースカウト隊の年間プログラムが組まれる。

活動プログラムは可能な限り、多彩で数多くのことができればよいが、ローバースカウト年代ともなればそれぞれ個人的に忙しくなるので、時間的にみて隊活動はかなり制約されてしまうことが多い。あまり無理をしないで、実施可能で有意義なプログラムを適度に組み入れたい。

また、社会的な奉仕分野では、災害時の緊急奉仕等その時々の子会の出来事に常時注意していて、もしローバースカウト隊ができる奉仕の分野があれば、積極的に臨時のプログラムを設けて出動できるよう、常日頃からある程度の態勢を整えておくことと、社会に対してアンテナを張り、奉仕のタイミングを失わないように注意して感覚を磨いておく必要がある。

③ 年間プログラムの例

それぞれのローバースカウト隊が選択することによって決めるローバースカウト隊の4つの型それぞれで隊プログラムは大きく変わるが、伝統型ローバースカウト隊を例にとって年間プログラムの一

例を挙げてみよう。

開放型ローバー隊、指導者型ローバー隊、専門技能型ローバー隊においても、年間プログラムの立案はその隊の規模にもよるが、個人個人のニーズを基礎にしてローバー隊の活動目標を達成するようなプログラムを作り出して実施して行くことに変わりはない。

年間プログラム例

	定例集会テーマ	自己訓練プログラム	隊プログラム	地区・県連等	予算
9月	隊運営全般	自己訓練成果発表	野営技能向上キャンプ(3泊4日)	日連カントリー大作戦奉仕	
10月	ローバームート派遣について		世界難民救済キャンペーン実施		
11月	年末年始の隊プログラム		地区カブラリー奉仕	地区カブラリー	
12月		次年度各自のテーマ発表。全員で討論	合同クリスマス会		
1月	地域社会への奉仕について		初詣で・交通整理奉仕		
2月				B-P祭奉仕	
3月	新ローバーの受け入れ上進・入隊式について	自己訓練の実施			
4月	スクワイヤー訓練について		上進・入隊式挙行	県連総会奉仕	
5月	夏季行事の準備について		新入ローバー歓迎キャンプ・スクワイヤー訓練月間	研修所奉仕	
6月	次年度プログラム		隊資金獲得全員アルバイト実施		
7月	県キャンボリー奉仕について	自己訓練の実施	自然保護キャンプ研究月間		
8月	隊野営についてクルー総会		身体障害者登山支援	県キャンボリー奉仕	

(3) 活動プログラムの進め方

隊の年間計画は他の重要な運営事項と共に、年次総会において正式決定されるが、個々のプログラムはそのプログラムの大小や特殊性によって、特別委員会が組織されて実施計画立案へと移行される。

実施計画がどのような組織で立案されるかは、各隊の憲章が定め
て実行するのであるが、活動プログラムの実施には少なくとも次の
ような項目が検討され、準備されていなければならない。

・必要経費（隊、グループ、個人）

② 実行委員会の編成と活動単位

その活動プログラムを実施するのに、どんな実行組織の編成と役務分担が必要なのか、また、各隊の組織づくりを憲章はどう定めているのかによって、そのプログラムの実行役務分担が決定される。

そして、活動の単位はそのプログラムの規模や参加人数によって決定される。特別グループ、隊全体が単位となるもの、または個々のローバースカウトが活動単位として動くことが考えられる。

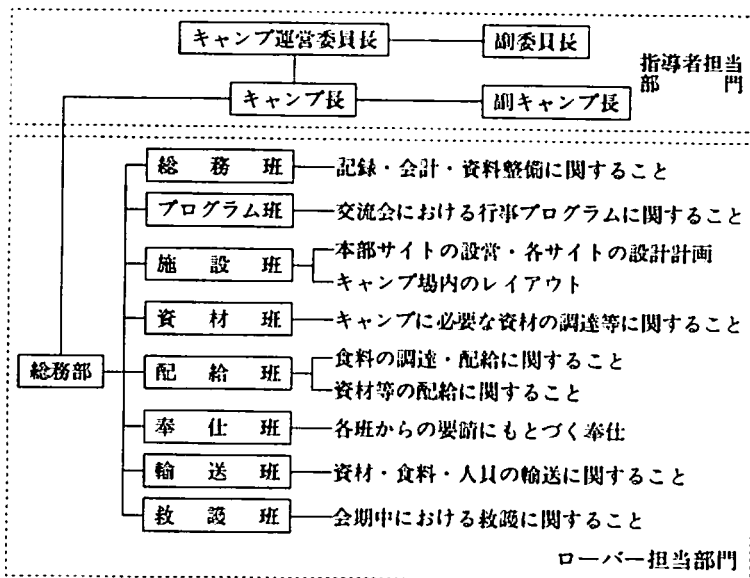
ある地区内のローバースカウト隊が合同で実施した身体障害児のためのキャンプ交歓会奉仕を例にとって、ローバースカウト隊が受け持った運営組織の一例を紹介しよう。

いろいろの組織が合同で実施する行事やプログラムでは、ローバースカウト隊がどの分野で奉仕をするのか、また、指示系統はどうかということを明確にしておく必要がある。

ローバー手作りのボーイスカウトフェスタを企画・実施したローバーたち



キャンプ交歓会運営委員会（例）



アメリカ連盟キャンプ場でスタッフとして奉仕する
ローバースカウト

③ 資源の活用

活動プログラムを進めるとき、事前の予備調査から実施までのスケジュールの作成、実施の段階までには活用することによってプログラムを成功に導く、数々の資源が存在する。さまざまな資源について研究して有効に活用していこう。

- (i) 参考書、パンフレット、解説書等の印刷物や書籍類から得られる情報
- (ii) 資材や用具・装備の有効利用
- (iii) 視聴覚器材等教育用品の研究
- (iv) 集会場や舎営施設・野営場の活用
- (v) スカウト関係の役員や外部のインストラクター等周囲の人的資源に援助を依頼する

(4) それぞれの型でのプログラム展開

① 伝統型ローバー隊でのプログラム展開

(i) 目指すところ

伝統型ローバー隊にあっては、ローバーリングの3要件、

野外生活をする

奉仕活動をする

兄弟仲間である

を徹底的に追及する、という厳しい態度が望まれていることを銘記しよう。そして、ボーイスカウト隊やシニアースカウト隊で培った基礎の上に立って、スカウティングの4本の柱をさらに発展させて、

性格と知能　手技と熟技　健康と体力　他の人々への奉仕と市民性について自己を高めていく努力をするのである。

(iii) 野外生活と奉仕活動

「野外生活をする」とは、単に「野外で活動する」というだけの意味ではない。

大自然の中に身をおいて、その驚異にふれ、美しさを味わい、自然の教訓を探究することによって創造主である神（仏）の存在を実感し、崇敬するところまで行きつくような活動でなければならない。

「奉仕活動」は、神（仏）を崇敬し、信仰の結果としてわれわれの心の中に神（仏）より受けた愛や慈悲の心の展開としての奉仕活動である。

(iii) どのように仲間づくりをするか

ローバーリングにおいては、他の部門よりもさらに自発活動が重視される。また、ローバースカウト活動の目標を達成するためにも、自ら進んで活動に参加し、仲間になっていく姿勢が求められる。伝統型ローバースカウト隊においては、見習いローバー（スクワイヤー）の期間にスカウト運動への理解を深め、ローバースカウトとなつてからはスカウト運動と社会に対する奉仕活動を進める決意が必要となる。

スカウト歴を持つ者も、持たない者も、この見習いローバー（スクワイヤー）を経て正式にローバースカウトの仲間となるのである。

(iv) 訓練の2段階

伝統型ローバースカウト隊にあっては、見習いローバー（スクワイヤー）の訓練と正式ローバースカウトの訓練は、別個に行われる。

B-Pはローバースカウト隊の組み立ての上に、中世の騎士道復興の意図があつて、中世のナイト（騎士）の修業制度を模してローバースクワイヤー（ROVER SQUIRE—準ローバー）とローバースカウト（ROVER SCOUT—正式ローバー）の2段階に分けた。現代のナイトとしての正スカウトつまりローバースカウトの仲間入りをするためには、準ナイトあるいは「従騎士」の課程を修了しなければならないとしたのである。

伝統型ローバースカウト隊としてのプログラム展開は、見習いローバーの課程を終え、ローバースカウトとしての決意を持ったローバースカウトの仲間が、戸外活動と奉仕活動を中心とした活動を展開していくことになる。

見習いローバーの履修課程は、教育規定の525条「入隊」に記載されている。

第525条—入隊 見習いローバーは、次の条件に適合する場合、スカウト歴を持たない者はちかいをたて、スカウト歴を有する者はちかいを再認してローバースカウトとなる。

- (1) スカウト歴を持たない者は、この運動の目的、創始者ベデン・パウエル生涯と事績について大要を学び、第842条の1、基本の(2)、(3)、(4)ができること
- (2) スカウト技能の修得と野外生活の追及に熱意を有し、ちか

いとおきての意味を理解し、その実践につとめること。特に、明確な信仰を持つこと

- (3) 見習い期間中、ローバー隊及び隊会議が必要と認めた隊の活動に進んで参加すること

以上の規定を基礎にして、それぞれの隊に適した条件を自隊の憲章によって定め、スクワイヤー訓練を実施する。(スクワイヤー訓練の例は、54頁を参照) 見習いローバーにスクワイヤー訓練を実施するローバースカウトには「スポンサー」という名称をつけておくが、この名称に拘らず見習いローバーの「世話役」、「後見」等の名称を隊独自で定めてもよい。その後見役のローバースカウト(スポンサー)は先輩スカウトとしてスクワイヤーを励まし、アドバイスして一人前のローバースカウトに育て上げるのである。

(v) 組織と運営

ローバースカウト隊においては、すでにどのような活動をするときも、仲間と一緒に活動するという年代ではない。それぞれの活動プログラムに応じて、特別のチームや作業委員会を編成し、活発に自在に活動を展開するという方法をとる。そのときは、その活動や作業にもっとも適したローバースカウトがリーダーシップをとるようにし、グループの編成やリーダーの決定はクルー総会、または役員会で行うとよいであろう。

伝統型ローバースカウト隊にあっては、スカウト運動と社会への奉仕が強く求められることから、その訓練も自己訓練と個人プロジェクトを厳しく追及するプログラムがまず優先される。

すべてのローバースカウトは常に1級スカウト以上の技能的実力を有することが望ましく、その野外生活の技能を駆使して、ローバースカウト活動の目標の達成を目指して集合訓練や奉仕活動に役立てていくのである。

隊や班が行う集合訓練や奉仕活動、社交活動等の隊プログラムは、一人ひとりのローバースカウトが行う自己訓練との関連を重視した上で、隊会議が決定するが、少人数隊においては、指導者とローバースカウト全員の集会において企画、実施していくことになる。

② 開放型ローバー隊におけるプログラム展開

(i) 目指すところ

開放型ローバースカウト隊においても、ローバースカウト活動の目標を達成することによって自ら有為の生涯を築き、社会に奉仕する精神と体力を養成することを目指すことに変わりはない。しかし、このタイプのローバースカウト隊での活動プログラムは集合訓練と社交活動を主として行い、青年の生活を全面的にカバーする広い範囲の活動に参加するが、特に地域社会への1の奉仕と、国際社会の理解を重視した活動に重点がおかれる。

(ii) 開放型ローバースカウト隊の採用と構成員

このタイプのローバースカウト隊は、都市部における大学生の中でスカウト活動やさまざまな野外活動に興味を持つ人たちが大学へ入ってからスカウト運動を志し、クラブ活動の一環としてローバースカウト隊を結成、参加する人が多いと考えられ

る。構成員の中には、スカウト経験を積んだローバースカウトもちろんいるであろうが、スカウト歴を持たない者がかなり多いと思われる。したがって見習いローバー期間中のスカウト運動への理解は特に重要なものとなる。

(iii) 組織と運営

開放型ローバースカウト隊にあっても、その活動ごとに特別のグループを編成して実施することは、伝統型ローバースカウト隊のやり方と同様である。

隊のマネージメント（事務処理・管理・経営・広報等）には全員が参加し、自分たちが選出した議長を中心に委員会を設置して、社交活動や奉仕活動を含むプログラムを計画していく。プログラム企画には全員の意志を反映させることが重要であるが、展開については特別のチームを編成して実施する方法が多く採用される。

③ 指導者型ローバー隊におけるプログラム展開

- (i) このタイプのローバースカウト隊では、少人数隊の場合が多いことが考えられ、活動プログラムは後輩スカウトの指導と奉仕を主体とした個人プロジェクトと自己研修が中心となる。すなわち、ビーバー、ボーイ、シニア等の後輩スカウトに対する奉仕、またはスカウト活動の中で行われるさまざまな行事や活動への奉仕活動が主体となる。指導者型ローバースカウト隊にあっては、ローバースカウト隊の基本である伝統型ローバースカウト隊と同様の目標を持ち、見習いローバー訓練において所

定の課程を修了した後に正式ローバースカウトとしての、スカウト運動と社会に対する奉仕への決意を培うことに変わりはない。

(ii) プログラム

個人プロジェクトでは、まずボーイスカウト指導者講習会を受講し、ウッドバッジ研修所へ入所して研修を積んだあと、地区・県連盟・日本連盟が主催する行事や各種指導者訓練コースへ積極的に奉仕することなどが主要なプログラムとなる。さらに、指導者訓練コースへの参加や奉仕によって高められた知識や技能や経験、とくに指導力を後輩スカウトの指導という形で活動プログラムの中で発揮していくことが期待される。具体的には所属する団（ローバースカウト隊だけの団の場合は隣接の団）の各隊において副長・副長補・デンリーダー・デンコーチまたはインストラクター等として1か年以上の奉仕をするという課題が考えられる。

ローバースカウト隊として各種の行事や指導者訓練コースに奉仕する場合は、集合訓練の組織性と計画性を持つての奉仕活動となる。すなわち、隊として奉仕する分野を明確にした上に、どのような奉仕作業を受け持ち、いつ、誰が、どこで、どんな仕事をすれば成功に導けるか、という計画と組織作りが必要となる。

隊プログラムの一環として、後輩スカウト指導のための研究会開催、各種スカウト技能向上のための研修会開催、指導のための資料整備作業等、指導者型ローバースカウト隊として実施し

なければならない活動プログラムは多い。

④ 専門技能型ローバー隊におけるプログラム展開

集合訓練でのプログラムが、その隊独自の特技や興味を中心にして組み立てられるローバースカウト隊の型である。

このタイプのローバースカウト隊にあっても、伝統型ローバースカウト隊と同様の目標を持ち、見習いローバー訓練においてやがて正ローバーとして叙任された後のスカウト運動と社会に対する奉仕の決意を培うことに変わりはない。

専門技能型ローバースカウト隊では独自の技能や興味の選択によって、様々な隊の呼称をつけることができる。例えば、

- ☆ 登山を主な活動とする隊：山岳ローバーまたはアルペンローバー
- ☆ 海洋活動を主とする隊：海洋ローバーまたはシーローバー
- ☆ 飛行機や航空を主とする隊：航空ローバーまたはエアーローバー
- ☆ 音楽に関することを主とする隊：鼓隊ローバー・ブラスバンドローバーまたはコーラスローバー等
- ☆ 洞窟探検を主な活動とする隊：ケービングローバー
- ☆ 演劇研究を主とする隊：演劇ローバー
- ☆ ヨットを主な活動とする隊：セイリングローバー
- ☆ ロッククライミングを主とする隊：ロックチャレンジローバー、等など。

専門技能型ローバー隊にあっても、クルーの規模や活動方法に適した組織と運営方法を定めた憲章によって活動を進めていくが、自

分たちの専門技能を伸ばしながら、どのように奉仕活動を展開していくかがポイントとなろう。

⑤ 地元を離れてのローバースカウト活動

高校生時代にシニアスカウトとしての活動を続けた後、就職や大学進学等のため、生まれ育った地元の町を離れて、青年期を他の都市や町で過ごすことになるローバースカウトも多い。

このような場合、登録はシニアスカウトから上進したローバースカウトとして、今までの団（以後、原団と呼ぶ）で登録したまま移転先の都市や町（以後、転出先と呼ぶ）で下宿やアパート、あるいは寮で生活するといったケースとなる。そして正月や夏休み等に帰省したときには、以前の仲間と会って語り合ったり、事情が許せば団や隊の後輩スカウトのために野営や行事の手伝いをするが、ローバースカウト隊としての計画に基づいた日常活動はないのが通例である。大学や就職が大都市に集中している現在、このようなローバースカウトが多いと思われる。このような場合、どのようにして活気のあるローバースカウト活動を実施して行ったらよいであろうか。自分のおかれた環境や状況を考えて、最も自分に適した活動方式を見い出して行くのであるが、ここには一つのアイデアを示しておこう。

- (i) まず、地元での原団と転出先の地でもローバースカウト隊に所属して、両方でローバースカウト活動を行うことを考えよう。転出地では原団とはちがった環境や人間関係があってスカウト活動のやり方も少しずつ異なっているので、いろいろと勉強に

なる。よい点を吸収して、それを原団に持ち帰って応用することもできる。

- (ii) 地元の原団でまず、ローバースカウトとしての登録を行い、隊の置かれた状況や、仲間とも協議して、どの型のローバースカウト隊で活動して行くかを決定する。ローバースカウト隊のメンバー数にもよるが、このような状況のローバースカウト隊では伝統型もしくは指導者型が選択されることが多いのではなかろうか。

- (iii) 転出先の地での活動にも、いろいろの選択肢が考えられるが、ローバースカウト隊としての軌道に乗った活動を展開するには、ここでも正式な登録をすることが肝要である。現在は、教育規定第55条Bにより、地区ローバースカウト隊と大学ローバースカウト隊に所属する場合、団委員長承認をうけて重複登録をすることができるが、ローバースカウト隊の場合は、この枠を拡大していく必要があろう。

このときは重複登録をするのであるが、転出先の地にどのようなスカウト団があってローバースカウトの仲間がいるのか。大学ローバースカウト・職域ローバースカウトも存在するだろうし、その地にあるスカウト団の中でローバースカウト活動が行なわれているところももちろんあるにちがいない。

もし既成のローバースカウト隊が見つからなかったとすれば、ローバースカウト自身が呼び掛けて仲間を集め、ローバースカウト隊を作るとよい。先輩や上司の方の協力を得て新団を結成するということも考えてよい。ローバースカウト隊結成につい

ては第6章(3) ローバースカウト隊のタイプ、(4) ローバースカウト隊の構成、(9) 隊を発足させる方法、(10) 憲章等の項目を参照して欲しい。

(iv) 転出先でのスカウト団の状況は、ボーイスカウト日本連盟を通じて、その地の都道府県連盟に問い合わせれば、情報の提供が受けられる。どのような団があって、ローバースカウト隊はどの型を選択して活動しているのか。自分が希望する活動を実施できるのは、どのようなローバースカウト隊かを決定して、そのローバースカウト隊に参加することである。

(v) 転出先でのローバースカウト隊に所属することを決定したら、その団でローバースカウトとしての重複登録を行い、その隊のメンバーとして地元の原団のスカウト活動とはまた一味ちがったローバースカウト活動を展開していこう。

要は、いかに自分から求めて、自分に適したローバースカウト活動ができる状況を作りだしていくか。そして勇気をだして活動に飛び込んでいくかである。





東京の大学ローバーが中心となって企画実施した100kmハイク。
今でも東京連盟恒例の行事としてひきつがれている。

9. 個人プロジェクトと自己訓練

訓練の分野-第516条A ローバー隊の訓練は、ローバー自らが実施する自己訓練と、隊、または班が行う奉仕活動、社交活動及びその他の集合訓練とによって行う。

どのような型のローバースカウト隊に所属しようとも、見習いローバーの段階を終わって正式ローバースカウトになってからは、「ローバースカウト活動の目標」達成のために自らのプログラムを打ち立てて実践していく態度が望まれる。

それは、自分が「ローバースカウト活動で何をしていくのか」という基本方針を持つことから始まる。まず、目標を設定した上で、長期計画を立て、これに基づいた実行計画によって実施展開する。そして、自分がどのように進歩成長したかを評価・反省しながら、次の段階へと進むのである。

自らが求め、計画し、実施していくこと、そしてその成果を評価して、次の一段と高いステップへ進歩を図るのが個人プロジェクトである。

(1) プロジェクト法とは

これは、キルパトリックの提唱した授業形態で、問題解決学習法の一つである。生徒の計画、主体的活動によって問題を解決するという基本的性格をもち、その授業過程の方式は、①目的設定、②計

画，③実行，④評価である。(小学館，大日本百科事典による)今では，学術研究の他，諸活動を展開するときにも利用されている。なお，問題解決学習には，もう一つ「問題解決法」があり，主として社会生活の中の現実の問題について展開され，①問題の明確化→②仮説の設定→③仮説の検証→④仮説の肯定＝問題解決，という段階で，人間が問題場面に遭遇したときの問題解決のための一つの方法として行われている。

プロジェクト法は，以上のように自らが目標を設定して計画をたて，実行していき，評価することによって問題を解決しながら自己の進歩を促進させるという学習法なので，スカウト活動にも広く取りあげられ応用されている。

特に，「ローバースカウト活動の目標」の3番目にあげられている「自ら課題を設定し，調査・実験・実習によってこれを研究し，自己の生活をさらに開発する」という項目は，プロジェクト法による自己実現を目指すものといつてよいであろう。

(2) 自己訓練

ローバースカウトとしての技能を磨き，後輩スカウトやスカウト運動のため，さらには社会に奉仕できる能力を身に付けるために，ローバースカウトは自分で目標を立てて自らを訓練していく。

これは「ローバースカウト活動の目標」の2番目に「高度の野外活動により，心身を鍛練し，スカウト技能を磨き奉仕能力を向上させる。」としてあげられていることに注目しよう。

自己訓練は，まず野外活動を自ら行うことから始められる。自分

で時間を作りだして野外にでかけよう。身近にある自然から、足を伸ばして山や森、川や海、自分が費やせる日時によって実施できる野外活動にもさまざまな種類がある。また何をテーマにした野外活動を行うかによっても実施方法や行く先が違ってくる。

自己訓練のための野外活動は、奉仕能力を向上させるためにスカウト技能を磨くことが主目的であるから、これに沿った計画を自分で立案し、準備して実行するものである。

例えば、連休に移動野営を計画して、装備の研究、野草料理の実習、ビバークの仕方、コンパス使用法、読図法等を訓練するのもよいであろう。

また、固定野営を行って、大型テントの研究、縛材法の実習、野営工作物の作製、野外料理の研究、営火のまき組みの研究等を訓練することも考えられる。さらに冬期であれば、雪洞作製、夏季であれば野宿の実施等の訓練もある。宿泊が不可能な日程ならば、ハイキングの実施によってもさまざまな訓練が可能である。未知の場所へ出掛けての読図実習、携帯コンロ使用訓練、夜間ハイクでの方位発見、読図、等々、工夫すれば自分一人でも時間のとり方や場所の選定によっていろいろの訓練プログラムが実施可能となる。野外活動のプログラムのヒントは、ボーイスカウト隊やシニアスカウト隊の進級課目や技能章課目から得られるので参考にしてほしい。

そして、これらの野外活動を実施することによって、ローバースカウトは次第に粘り強い性格を自然のうちに身につけていくのである。

(3) 自己研修

明確な信仰をもって地域社会に貢献し、国際社会の一員となっていくには、さらに広くて深い研修を自ら行っていく必要がある。自己研修の目標として、例えば次のような標準を定めて、仲間の友情と協力を得て達成しよう。

〈例〉

① 基本

- (i) ローバースカウトとして、「ちかい」「おきて」の実践に努力する。
- (ii) 所属する教宗派の行事に参加奉仕し、明確な信仰を深める。
- (iii) ローバーリング・ツー・サクセスを読み、創始者が青年に対して何を期待していたかを理解し、仲間と話し合う。

② 自己研修

ボーイスカウトの指導者として、あるいは社会人として必要な知識と技能を身につけるため、次のような研修を積極的に行う。

- (i) ボーイスカウト指導者講習会を受講し、ウッドバッジ研修所課程のうち、1課程修了の研修を積む。
- (ii) 何らかの国家試験に挑戦し、能力・知識・技能に関する資格を取得できるよう努力する。

また、ボーイスカウトの組織以外において、自己の指導力、教養あるいは人格を高める研修コースに、通算80時間以上参加する。

説 明

「国家試験」は、国家による職業資格制度に基づいて行われており、

- ・ 経営，経理，労務
- ・ 医療，社会福祉
- ・ 鉱工業，化学，技能
- ・ スポーツ
- ・ 技能検定，技能審査
- ・ 航空，船舶，通信
- ・ 土木，建築，農業，畜産，水産

等に関する職業資格を付与する試験をいう。

「各種研修コース」は，この場合地方自治体，公共企業体，法人組織の協会団体

・ 各宗教団体などが主催する指導者養成に関する講座，各種教養講座等を指す。

③ 奉仕

- (i) 所属する団（ローバー隊だけの団の場合は隣接の団）の各隊において副長，副長補，またはインストラクターとして1か年以上奉仕する。
- (ii) 地区，県連盟，日本連盟が主催する行事または指導者訓練コースに奉仕する。
- (iii) 地域社会に役立つ継続的な奉仕活動を，個人またはグループにより年間を通じて行う。

④ 国際協力

国際人たるべく次の中からいずれかを選んで実施し，自隊およびその他の機会に報告する。

- (i) 個人、グループ、地区、県連盟または日本連盟が企画した海外交流計画（ワークキャンプ、提携プロジェクト等の奉仕活動を含む）を実施する。
- (ii) 地方自治体、ボーイスカウト各組織の何れかが主催する海外からの受入れ事業に積極的に参画し、2回以上奉仕する。

以上は自己研修のいくつかの例であるが、このほかにもいろいろの研修内容が考えられる。目標によっては、プロジェクト法を実施して、課題を達成させるようにすることである。

(4) 課題遂行の評価

プロジェクト達成度の評価は、ボーイスカウト内や社会への奉仕によって自分が確認したり、隊や社会から認められ励まされることを原則とする。とくに、人格・健康・技能・奉仕の4つの分野に自らの成長と社会への奉仕を計画的に進めることが重要であり、そのためには各人が強く関心を持つ課題を設定し、自己の能力と環境に適した期間に完結させるよう隊で話し合い、仲間の協力や励ましを受けるようにする。

個人プロジェクトであれ、グループプロジェクトであれ、実施段階が終了した時には、アイディアから出発したそのプロジェクトを振り返って評価と反省を加え、結果の首尾を味わった上で、次のステップへの足掛かりとするという大切な作業がある。

報告書には、①着想の段階から ②構想を練る段階 ③計画の段階 ④実施の段階と順を追って、どのように進められたかを記入するが、評価としては、たとえば次のような表にしてまとめてみると

	良かった点	悪かった点	改善点
着 想 の 段 階 構 想 の 段 階 計 画 の 段 階 準 備 作 業 外 部 と の 折 衝 経 費 の 調 査 仲 間 と の 協 力 安 全 対 策 実 施 の 段 階			

よいであろう。

これらの評価項目としては、そのプロジェクトに適したものをあげ、まず自分個人としてはどのように考えるかを記入する。次に、仲間に評価してもらうことも大切である。自分は良かったと思ったが、他の仲間は良いとは考えていないかも知れない。または自分が悪かったと思った点も、友だちは良かったと評価するかも知れない。

自分では全く気づかなかった点に、仲間の誰かは注意を向けていることもある。そして、この個人プロジェクト実施によって自分がどのように進歩、成長したかを把握してくれるのは、アドバイザーとしてのローバー隊長であることを銘記しよう。

隊長は、ローバースカウトの個人プロジェクトを着想の段階から見守ってくれていて、初めからいろいろとアドバイスをしてくれたであろうが、評価の段階では経験者としてローバースカウトが個人

プロジェクトを達成した結果、どのように成長したか、留意すべき事項は何であったか、今後どのような個人プロジェクトに取り組めばよいかなどについてアドバイスを与えてくれるに違いない。それはアドバイスということで終わるのではなく、ローバースカウトの個人プロジェクト達成の認定とともに、将来へ向けての励ましという意味からも大切なものなのである。

なぜなら、ローバー隊長は人生やスカウト活動の先輩として、スカウト運動や一般社会の基本的な考え方をローバースカウトに示し、彼がどんなふうに社会的に成長していくのかを常に見守っていてくれる人であり、個人プロジェクトの達成がローバースカウトの人生にとって、どんな価値のあることかを判断してくれるからである。このようなステップを経て、ローバースカウトは次第に一人前の成人としての自信を得て、責任ある社会人に成長していくのである。



10. 集合訓練

第516条B ローバースカウトは、隊が行う奉仕活動、社交活動及びその他の集合訓練に進んで参加し、各自の教養を高め、見識を広め、有為の人間として、自己の生活を築き上げる努力をせねばならない。

自らが計画して実行する個人プロジェクトである自己訓練と同様、ローバースカウトにとって大切なものが集合訓練である。集合訓練は、仲間と協同して実施するプログラムであり、グループプロジェクトの中でとくに訓練的要素が色濃いものと考えてよいであろう。

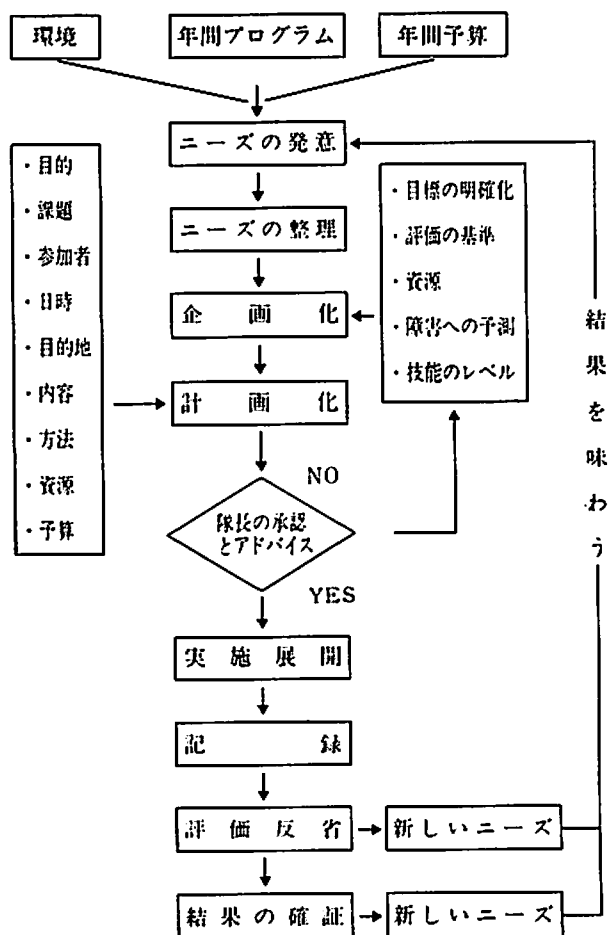
(1) グループプロジェクト

ローバースカウト年代は、人生の中でも最も波瀾に満ちた時であり、自分の人生の方向を左右する重要な時期にもあたり、さまざまな経験を積み重ねなければならない年代でもある。言い換えれば集合訓練は、個人プロジェクトと別個に計画されるものではなく、自分の将来設計や個人プロジェクトと、グループとしてのプロジェクトをどのように調整させて計画を立てていくかということが、大きな問題となる。

個人のニーズをどのように汲み上げて、ローバースカウト隊としての年間計画を立案し、具体案を練って実施展開して評価反省をし

た後、次のプロジェクトに結び付けて行くのか。下表グループプロジェクトのプロセスを参考に多くの体験を積むことによって、ダイナミックで楽しいプログラムが生まれてくるであろう。

プログラム(プロジェクト)のプロセス



(2) 活動プログラムの例

ローバースカウト隊がどのような型を選択して活動するかにもよるが、集合訓練の活動プログラムとしては、次のような内容のものが考えられる。

① 試練と躍動的活動の例

- ・ 野外活動に必要な専門的技能の習熟
- ・ ワークキャンプを含む長期
- ・ 短期のキャンピング
- ・ ロッククライミング
- ・ ボート、カヌー、ヨット等による水辺活動
- ・ 海外旅行などのビッグプロジェクト
- ・ 伝統芸能の探究
- ・ 芸術、文化活動
- ・ 他の青少年団体との交流活動
- ・ 洞窟探検
- ・ 航空活動
- ・ その他

② 能力啓発活動

- ・ 各種職業技能の訓練
- ・ 指導者としての研修
- ・ 市町村行政の研究
- ・ その他

③ 奉仕活動

- ・ スカウト行事への支援

- ・ ビーバー、カブ、ボーイ、シニア各隊への長期、短期の奉仕
- ・ 地区、県連盟、日本連盟での奉仕
- ・ 各種技能章指導員、技能章考査員としての活動
- ・ 地域社会における奉仕
- ・ 障害者へのお手伝い
- ・ 自然保護活動
- ・ その他

④ 国際協力活動

- ・ 海外スカウトとの交流
- ・ 他国スカウト連盟との提携プロジェクト
- ・ ローバームート参加
- ・ 海外エクスペディション
- ・ その他

以上は活動の一例であるが、これをヒントにしてさまざまなグループプロジェクトを計画し、実施展開してゆく。その活動を通じてまたすばらしい仲間ができ、新しい活動が生まれてゆくのである。

(3) ローバースカウト活動での安全対策

ローバースカウト活動においては、集合訓練やプロジェクトの実施にあたって、自分たちのニーズにあわせたダイナミックなプログラムやイベントを企画することがしばしばある。それは海外へのエクスペディションであったり、空や海・山での危険を伴うプログラムで、長期間に渡って体力や精神力を必要とするものであるかも知れない。どのようにみんなの気持ちが一致して、やる気が盛り上が

ったとしても、健康や安全に対する配慮に少しでも不十分な点があれば、もう一度プロジェクトの出発点に立ち戻って、完全な安全対策を立てるか、それができなければそのプログラムを中止しなければならない。

安全対策は第一に考えられなければならないのである。

ここで、ローバー隊の活動においてとくに注意しなければならない「安全」について考えておこう。

ボーイスカウトライブラリー『安全入門』には、安全な野外活動をするための条件として次の3つをあげている。

① 先取・優先の原則

「安全はつねに先取りされ、すべてに優先する」ということである。そのプログラムを実施するうえで予測する危険をすべて列挙し、その危険に対する予防策と、万が一起こってしまったときの対処の方法を検討して、全員に周知徹底させておくことである。

このためには、季節・気候、場所、人や物の存在・動き方等、周囲の状況を十分に把握した実施計画を立てておく必要がある。

「安全が優先する」ということは、あるプログラムを企画したとき、またはすでに進行中であったとしても、安全に不安があればただそれだけのことで、一度出発点に戻るか、そのプログラムを中止するか、2つに1つの選択をしなければならないほどの厳しいものである。

② 自主の原則

「自分の安全は自分が守る」ことが原則であるが、そのためには安全に対する「能力」と「態度」が身につけている必要がある。

(i) 「安全能力」の3つの要素

知的・知識的要素

身体・運動的要素

情緒・性格的要素

ローバースカウトの場合、経験からいっても年齢的にみても、これらの要素は不十分ながら、かなり身につけていると思われる。しかし「安全入門」に目を通して、自分の安全能力はどの程度かをチェックしておくことをすすめたい。

(ii) 「安全能力」は「危険予知能力」と「事故対処能力」の2つに分けられる。「危険予知能力」とは、いろいろな危険に遭遇する前に、その可能性を察知する能力であり、これは経験や訓練によって能力を高めることができるといわれている。

「事故対処能力」とは、安全に留意していても万が一事故が発生してしまったとき、被害が出ないようにするか、損害を最小限に食い止める能力のことで、安全の守りが破れて、最悪に近い状態のときも「生命だけは守る」というぎりぎりの行為である。このためには事故にあったとき、とっさの行動がとれるように危険に対する抵抗力や、耐える力（耐性）のあることが必要であり、常日頃から事故や災害を想定して、それなりの準備ができていて動揺がないということであり、スカウトのモットーである「そなえよつねに」が日常に生かされていなければならない。

iii) 「安全態度」で行動する。

これは日常生活でも同じであるが、特にプログラムやイベント実施の場合には、努めて危険を回避し、余裕をもった行動をとることと、あせる気持ちや、はやる衝動、楽をしたい欲望などをぐっと抑え、がまんする態度が事故防止に役立つということである。

③ 規範・道徳の原則

「規範・道徳の原則」とは、社会人として社会的ルールや社会道徳を守ることが、安全で身を守ることにつながる、ということである。

いくら立派な安全対策の定めを作り上げても、そのルールを守ることができなければ安全対策は絵に描いた餅に過ぎない。

国の法律も一つのルールであり、交通法規や交通道徳を守るとは自分の身の安全を守ることだけでなく、みんなのスムーズな交通の流れのためにも大切なことなのである。キャンピングやハイキングで基本的なルールを守ること、安全を確保するうえから大切である。例えば、自分たちが定めた消灯時間を守ることや、テント内で裸火を使わないこと、生ごみ・不燃物等をルールどおりに処理することなど、すべてルールを守る態度が安全につながっているのである。

・「安全の限界点」に挑戦する

「安全、安全と言っていては冒険的なプログラムはできない」とか「多少の危険は覚悟しないとおもしろいプログラムはできない」

という意見もある。しかし、それは「安全」という言葉の意味を正しく理解していない。

いままでにみてきたように、「安全な状態」とは危険を予測したり事故に対処する能力（安全能力）や、ルールを守ったり安全に行動しようとする態度（安全態度）によって支えられている。つまり安全能力や安全態度のレベルが低ければ「安全なプログラムの範囲は狭まり」、そのレベルが高ければ「安全の範囲は広まる」。

「安全な状態」は、メンバーを訓練したり、経験を重ねたり、士気を高めることによって、その範囲を広げることができるのである。

「冒険とは安全の限界に挑戦すること」だといわれている。しかし、決して「安全の限界を侵す」ものであってはならない。ローバースカウトが目指す高度の野外活動やエクスペディションでは、自らの安全能力と安全態度を極限まで高め、その限界に挑戦するようなプログラムを展開すべきであるが、一方でその限界点を正確に見極め、安全を最優先する態度を軽視してはならない。

・「安全対策」について

以上のことから、安全対策を立てるにあたっては、次のことを考えて作業を進めなければならない。

- (i) 一つのイベントや作業が開始から完了に至るまでの安全をすべて先取りしたもので、取り残しや盲点があってはならない。
- (ii) 関係者全員が困難なく守れる内容と条項であること。
- (iii) その内容・条項を明示することができ、文書で周知徹底されなくてはならない。

- (iv) その内容は、他の何よりも優先する。そしてこのことが全員に了解されていることが必要だ。
- (v) この対策が成功するか否かは、関係する人々の「安全態度」いかんによる。すなわち定められたルールは絶対に守るという態度がなくてはならない。
- (vi) 対内対策があり、対外対策が策定されていること。
これは不測の事態が発生した時の緊急対応と組織が内外に確立されていることや、万が一に備えて障害保険に加入しておく点等である。

(4) リーダーシップとメンバーシップ

グループが一つのチームとして活動するとき、皆がこれから始まる活動に対して「よしやってやろう」というまとまった気持ちで仕事に取り掛かるためには、その活動ごとにリーダーシップをとるものと、チームの一員となって仕事を遂行してゆくものが、よいチームワークをもってスタートして仕事を進めてゆくことが必要である。

ローバー隊においては、活動や奉仕の「仕事」を通じて団結が生まれ、立派なクルーとして成長してゆくのであるが、士気の高いクルーになればなるほど、他のメンバーを仲間として意識するようになる。そして自分をその仲間の重要な一員として自覚し、チームとしての活動に喜びを感じるようになってゆくのである。

① リーダーとメンバーは互いに依存しあう関係

リーダーはメンバーよりも多くの権限と責任をもっている。しか

し、その権限と責任も、メンバーに仕事を分担し全員で成し遂げなければならないということで、リーダーもメンバーに依存している。というのはチームの進む方向や方針は、たとえリーダーが案を示したものであっても、全員が協議して決定し役割が分担された後、皆の協力で成し遂げるものだからである。そしてリーダーが主導権をもって決定し、進行している仕事であっても、メンバーが納得し喜んで仕事をするようであれば、チームは良い方向へは進まないしチームの士気は上がらない。

また、リーダーはいつどんな場合でもリーダーであるわけではなく、ある時はメンバーとなって従い、ある時はメンバーもリーダーとして活動するというように、ときには交代しながら活動を進めていく。従ってローバー隊にあってはリーダーとメンバーは常に協力し合ってやってゆけるようにトレーニングしゆかなければならない。

② リーダーとしての4つの行動

(i) 目標を設定する

チームの活動への意欲（やる気）を起こさせるために、全員参加のもとで目標をつくる。目標はチームの共同目標と、それに向かう個人個人の目標に分けるが、メンバーには各自に自分の目標を立てるようにアドバイスをする。

仕事の目標は高ければ高いほど良いが、それは到達できるものでなければ意味がない。そして遠い目標と同時に必ず近い目標（中間目標）を設定して、段階的に達成感を味わえるようにすることが大切である。

(ii) メンバーへのアドバイスと激励

目標に従って仕事を割り振り、指示やアドバイス、刺激や励ましなど、目標を達成するためにリーダーが行う主要な任務である。この任務の中には、全体を見通して仕事の進み具合をチェックすることから、メンバーに仕事のやり方を実際に示すというような仕事も含まれる。

(iii) 人間関係への配慮

メンバー同士やリーダーとメンバーとの間により人間関係をつくるように配慮する任務である。

リーダーはチームの仕事を進めることと同時に、常にメンバーの苦情や不満に耳を傾け、温かい目でメンバーを見守っていることが大切である。このためには、メンバー一人ひとりの性格や能力を知るように心掛け、日頃からよい人間関係を作りあげている必要がある。

(iv) 決断を下すこと

リーダーの大切な役目の中に「決断を下す」ということがある。目標を定めるときも、また日程に従って活動を進めているときにも意見が分かれたり状況の変化や突発事態の発生等によって、急に決断をせまられる場合がある。このような場合、リーダーはどのようにして決断を下したらよいのだろうか。

決断を下すには合理的な読み（仕事に対するチームやメンバー個々の実力を総合的に判断すること等）と、情報処理（障害の程度、財政面の限界等）の結果なされるべきものといわれている。

決断を下す時期はその事態によって異なってくる。結論を急がず、再検討してチームに決定させる時間的な余裕がある場合はよいが、瞬時に決断を下さなければならないときは、勇気と公平な態度を必要とする。そして決定の後には、必ずメンバーに説明して合意を求め、後のフォローに配慮すべきであろう。

(5) 実行資金の確保

(i) 団の年間予算を確保する

ローバー隊としての年間予算は当然年度当初に計上されなければならないが、団の予算配分はその団の事情や配分の方法もあるので、ローバー隊の年間計画を団内でよく理解してもらっておくことが大切である。

(ii) 自助努力で

ビッグプロジェクトの実施には、それなりの大きな予算が必要となる。食費、交通費、宿泊費、備品購入費、記録費、雑費、ローバームート等への参加なら参加費等に分けて予算案を立てて収入の方策を練るのであるが、まずは自分たちの資金獲得への努力を第一に考えよう。

それには皆でアルバイトをして資金を稼ぐ方法、ローバー隊が主催してバザーを開く方法、等が考えられるが、いずれにしても自分たちの努力で得たものを少しずつでも隊の会計に貯金していくようにする。

(iii) 特別の寄付をお願いする

ローバー隊の年間通常予算や自助努力のみでは、どうしても予

算が不足するプロジェクトを実施しなければならない時に限っては、団委員長など団関係者を通して団の内外から特別寄付を受けることも考えられる。

しかし、このときも実施するグループプロジェクトがローバー隊にとって意義あるものであると同時に、団や社会的に見ても実施意義が十分あることを資料や要請文で示していくことが大切である。

(6) 集合訓練実施上の地区・県連盟・全国組織の構成

ローバースカウトが自分の隊だけの規模でなく、もっと大きな集合訓練を実施しようとしたり、相互に連絡を取り合って情報交換をするためには、それぞれのレベルに組織が必要である。

たとえば、地区内ローバースカウト全員が集まって、その地域内での奉仕活動や集合訓練を企画実施したり、県キャンポリー支援のために県連盟全ローバースカウト隊が参加して何らかの奉仕活動を担当するとか、または全国規模のローバーシンポジウムやローバームートを開催するには全国的な組織が必要となる。それぞれのレベルでの組織は、次のようにして構成したらどうであろうか。

(i) 地区ローバー代表者会議

それぞれのローバースカウト隊（クルー・班）から1～2名の代表者が参加して、定期的にあるいは必要に応じて代表者会議を開催する。調整は地区コミッショナーまたはローバー担当地区副コミッショナーにお願いする。

実施主体はあくまでも各隊のローバースカウトであり、毎年、議長と必要な役務を決定する。

(ii) 県連盟ローバー代表者会議

地区ローバー代表者会議の議長が参加して、県連盟ローバー代表者会議を構成する。調整は県コミッショナーまたはローバー担当副コミッショナーにお願いするが、代表者会議が構成されてからの運営は、全て議長以下のローバースカウトの手で行われる。

県連盟ローバー代表者会議は年に1～2回または必要に応じて開催され、県連盟内のローバースカウト活動の推進・連絡調整・集合訓練実施等について協議し、その結果に基づいて実行委員会等の組織を設ける。

(iii) ローバースカウト全国代表者会議

各都道府県連盟ローバースカウトの代表が参加して、またはブロック毎に代表ローバースカウトを選出して、ローバースカウト全国代表者会議を構成する。

ローバースカウト全国代表者会議は、「ローバース会議」によっておおむね年1回開催され、各県のローバースカウト活動の情報交換やローバームート、ローバーシンポジウム等の全国的プログラムあるいは全国的なローバースカウト活動の推進について協議を行い、方針を提案する。

(iv) ローバース会議の設置

ローバースカウト全国代表者会議を開催して、各地のローバースカウト活動の活性化をはかったり、ローバースカウト活動の

あり方・活動方針などについて検討して、プログラム委員会への提案や調整を行うために、平成5年度より「ローバース会議」を日本連盟プログラム委員会の下に設置した。

ローバース会議は10名前後の構成で年3回程度開催され、上記の任務を行う他、日本連盟がローバースカウトの全国大会を開催する場合等、要請に応じて企画・運営への協力をする。



FROM ROVER ISLAND



カンデルスティッヒ国際スカウトセンターへ奉仕した各国のローバーたち



楽しいローバームート

11. 奉 仕 活 動

奉仕活動はスカウティング、特にローバースカウト活動にとって重要な意味あいをもつものであるが、当然のことながら奉仕は自発活動の現れとして実践するものであって、奉仕活動を行うことによってローバースカウトがちかい・おきての実践の意味を体験、理解していくものでなければならない。

奉仕はスカウト運動の根本主題である。ヒーバー、カブ、ボーイ、シニアの段階を通じて、次のことを学んでいるはずである。

カブスカウトは、「カブスカウトはすすんでよいことをします。」
ボーイスカウト・シニアスカウトは、「いつも他の人々をたすけます」

ローバースカウトの場合は、6項目の活動目標にもあるように、「高度の野外活動により、心身を鍛練し、スカウト技能を磨き、奉仕能力を向上させる。」ことを主眼とする。すなわち、カブ、ボーイ、シニアスカウトで培ってきた能力をさらに向上させて、ローバースカウトの精神的発育・体力・技能・能力に応じた奉仕活動を実践していくのである。

(1) スカウト運動への奉仕

自分の能力に応じた奉仕活動を実施していくことは原則であるが、その「奉仕」は同時に自分自身の訓練であり、「奉仕」を通じて自己修養を積む機会が与えられるという謙虚な態度を持ち続けることが

大切である。従って、スカウト運動の内部での様々な奉仕を実施することによって、ときには過ちも許してもらいながら、スカウト技能や人間関係の技能に磨きをかけていくのである。

ここでは、ローバースカウトの活動目標の4番目にある「ビーバー隊、カブ隊、ボーイ隊、またはシニア隊の訓練や指導に協力し、奉仕する。」を実践するのであるが、具体的には、インストラクター、デンコーチ、デンリーダー、技能章指導員、各隊の隊付等としての奉仕のほか、ジャンボリー、キャンボリー等の各種大会やイベントへの奉仕、協力等がある。

(2) 社会への奉仕

奉仕の実力を身につけたローバースカウトは、いよいよその能力に応じた奉仕を社会に出て実践するのであるが、社会に対して行う奉仕にはいくつか注意点があるので列挙しておこう。

① 奉仕の技能を持っているか

その奉仕活動を行う技能を身につけていることによって奉仕の効果があげられる。日頃からの救急、災害救助、危険からの脱出、環境保護等、有用で他人の手助けとなるあらゆる技能訓練が重要である。

② 奉仕の意欲と完遂の意志

奉仕には応々にして自己犠牲を伴うことであり、自分の楽しみや自分の時間を奉仕活動に費やさねばならないこともままある。このときこそ「奉仕」についての自分の基本的考えを確立し、スカウティングにとってなぜ奉仕が重要な意味を持つものかを考え、精神的

な成長を図るよい機会ではなかろうか。

ジェスチャーや義務感だけでなく、奉仕活動を積極的なプログラムとして実施したい。

③ その奉仕が要求されているか

奉仕の価値を決定する基準は、行う者の考えではなく、奉仕を受ける者の気持ちである。奉仕の押しつけや、世間の評価を得るための奉仕であってはならない。この点を見極めることもローバーにとって大切な観察・感覚の訓練である。

ここではローバースカウトの活動目標の5番目「地域社会への認識を深め、地域の向上に積極的に貢献する。」を実践する。

具体的には地域社会が抱えている様々な問題を拾い出し、分析する作業から始めなければならない。自然保護の問題、公害を無くす運動、交通災害や自然災害の問題、献血運動、障害者に対する援助の問題等、地域社会が持ついろいろな問題の中から自分たちのローバー隊としてやらなければならない仕事は何か、今どんなことができるのかを協議して実施計画を立てるのである。

奉仕活動によっては、緊急を要するものやタイミングを逸すると無意味になってしまうものがあるので、ローバー隊として常に社会の動きや緊急事態に対応して瞬時に動きがとれる体制を整えておくことが必要である。

計画を立てた奉仕活動をどのように実施して行くか。奉仕の相手先、関係官庁、報道機関への連絡、他の組織への協力依頼等、その奉仕活動の目的が十分達成されるように事前の調整を綿密にしてお

くことも大切なことである。

奉仕活動こそスカウティングの最終段階にあるローバースカウトにとって、極めて重要なプログラムなのである。

(3) 奉仕活動プログラム展開例

① 海外での民間援助ワークキャンプへの参加

世界各地には、衛生的に問題のある地域も多く、トイレのない家に住んでいる人たちもたくさんいる。また、水道施設もなく井戸掘りの技術によって水を確保することを願っている地域もある。さらに、難民救済の物資援助には、それを仕分けしたり、トラックに積み込んで運んだりしなければならない人手が不足することもある。

そのような世界各地での生活向上や救済活動には、政府機関や民間のボランティア団体からの情報提供や呼び掛けに日頃から注意していれば、自分たちにできる奉仕活動やワークキャンプの機会が時折訪れていることがある。

ある学生グループがフィリピンのスラムにトイレづくりをするワークキャンプに参加した例を紹介すると、次のようなものである。

フィリピン・マニラ郊外のスラム「バゴン・シラン」の生活向上に取り組んでいるNGO（民間奉仕団体）と「バグアーライ・ナン・ブソ（タガログ語で心の提供）基金＝PPF」が募っていた「PPFトイレ作りワークキャンプ」に日本の若者12人が応募し、夏休みを利用して8日間現地に入り公共トイレの建設作業をし、住民との交流を図った。（1991年9月朝日新聞掲載）

参加者は大学生8人とPPFの会員1人。男女別では男性3人、

女性6人。バゴン・シランの人たちと寝起きを共にし、汗を流して働き語り合う。バゴン・シランはゴミ捨て場と墓地、海に囲まれた約450家族3,000人の住民が住んでいる。貧しい農村からマニラへ出てきたものの、人々は定職には恵まれていない。トイレのある家は数軒で、衛生的にも問題を抱えている。メンバーは現地の状況やフィリピンの歴史・経済・文化・スラムの現状などについて学習会を続けた。

資金的には、郵政省の国際ボランティア貯金から公共トイレ設置と、手に職をつけるためのミシンを使った縫製トレーニングに、490万円の寄付金が出て、資金難で難行していたトイレプロジェクトも動き出したという。

この他に、貧困に苦しむ世界各地域に、日本の伝統的技術による井戸掘りなどを広めたり、そのためのワークキャンプに参加しているグループもある。

② イランでの難民救援奉仕活動に参加の例

1991年8月1日より15日間、栃木県足利第1団の指導者3名が日本国際救援行動委員会（JIRAC）の派遣隊の一員としてイラン回教共和国に渡り、クルド人難民キャンプ施設において奉仕活動を行った。

湾岸戦争の後遺症としてクルド人の難民が多数イラク・イランの国境を越えてイラン側に難民としてキャンプし、衣食住に不自由する生活を続けていた。JIRACは8月に学生を中心とした約40人規模の救援隊を難民キャンプに派遣する計画を進めたが、足利第1団の青年指導者はこの救援隊に応募して参加したのであった。任務は先

遣隊として本隊より先にイランへ行き、現地政府や州政府、国連難民高等弁務官事務所などとの交渉を行い、具体的な活動内容を決めて実際に作業を開始し、後から来る本隊に引き継ぐ役割であった。

その結果、仕事は難民が元の居住地に帰還できるための食料パッケージングと配布作業を行うことであった。この作業を6日間行い後からきた18名の大学生を中心とする救援隊本部に引き継ぎ、15日間に渡る海外奉仕活動を終わって、無事に帰国している。（「スカウティング誌1991年10月号掲載」）

③ 障害児・者の富士登山支援

日頃家にひきこもりがちな心身障害児を、一生の思い出に日本一高い富士山頂に立たせてあげようと、「障害児富士山を支援する会」がボーイスカウトの指導者を中心に昭和61年から結成されている。

平成3年の8月には、第3回目の障害児富士登山が実施され、東京都内の8歳～17歳の男女合わせて10人と付き添いの家族や韓国の養護学校教師も含めた総勢100人が富士山頂を目指した。1人の障害児は支援者3人が交替で背負いながら登り、さらに付き添いの保護者も加わって5～6人で1班を形成。入念な健康チェックや訓練を積んで実施を迎えた。この支援隊の中に、何人かのローバースカウトが参加したのであった。

以上3つの海外と国内の奉仕活動の例を挙げた。日本国内や世界の情勢、社会問題に注意していればローバーとして奉仕できる分野の活動はたくさんあるはずである。これまでに得たあらゆる知識や技能・訓練の成果を総合的に実践するのがローバーとしての奉仕分野である。君や君の隊が可能な奉仕の企画を立案し、実行して行っ

て欲しい。



雲仙普賢岳災害復旧にかけつけた神奈川連盟横須賀地区のローパー、シニアスカウト



フィージー連盟との提携プロジェクトで野営場の造成に奉任するローパー

ロシア極東地域救援物資配送活動へ奉任するローバースカウト



ローバームート
'93 北海道



カンデルローバームートで楽しむ

12. セレモニーとスカウトタウン

(1) セレモニーについて

入隊式、進級式、上進式、叙任式、任命式、授与式、伝達式、表彰式、入所式、開所式、閉所式、などの式典や儀式、国旗儀礼、集会時の開会儀礼、閉会儀礼などの種々の儀礼。スカウト活動の中には様々なセレモニーが教育プログラムとして取り上げられており、ものごとに区切りをつけて決意を表明したり、周囲の人たちから認めってもらう機会を得て、次の段階へ進むための出発点となるものである。

セレモニーをプログラムとして考えると、次のような要点があげられる。

- ・一生の思い出となるような感銘深いもの
- ・短く、簡潔で、心をこめたもの
- ・原則としてそれぞれの部門だけのもので、その特徴があるもの
- ・スカウト主体のもの（見世物であったり大人のためのものではない）
- ・それぞれの教育段階に応じて漸進的であること
- ・十分に準備すること
- ・スマートネスとよい秩序、規律を身につけ自分勝手なことをしないという自制力の訓練であること

(2) ローバー部門のセレモニー

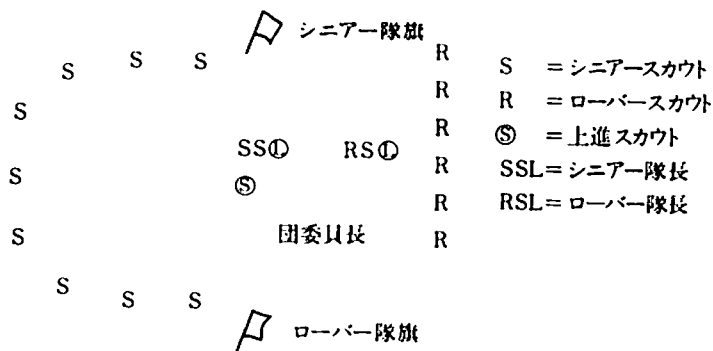
創始者B-Pが考えたローバーリングは、原則的にカトリック的信仰と、騎士道精神を基調として組み立てられていたため、その方法としてのセレモニーもその原理に結び付いて展開されており、セレモニーは重要な意味を持っていた。

もちろんそれぞれの国はB-Pの考えたローバーのセレモニーとは別のやり方でセレモニーを行ってよいのであるが、わが国におけるローバーリングは、必ずしもキリスト教の信仰と騎士道の精神を土台としているわけではないので、(1)であげた要点を踏まえて、ローバースカウトらしいセレモニーを造り出して実施してほしい。

(3) ローバー隊におけるセレモニーの例

① 上進式（シニアから見習いローバーへの上進の場合）

- (i) シニア隊はU字型に整列し、その中心にシニア隊長が立ちローバー隊長はシニア隊長の後に立ってシニア隊の方を向く。ローバー隊はローバー隊長の後に横隊に整列する。(図参照)



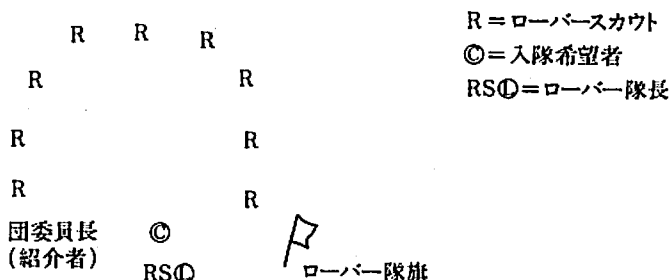
(式次第)

- (iii) シニア隊長は上進するシニアスカウトをローバー隊長に引き渡す。
- (iii) シニア隊長「この鈴木太郎は3年間シニアスカウトとして活動を続けて来ましたが、〇月よりローバー年齢に達します。私は鈴木君をローバースカウトの候補者として推薦します。ローバー隊が鈴木君を見習いローバーとして受け入れて下さるようお願いします。」
- (iv) ローバー隊長から上進スカウトへ
「ローバー隊へ入って、スカウト活動を続けたいというのは、君の自発意思によるものですか？」
- (v) 上進候補者「はい」
- (iv) ローバー隊長「では、ローバー隊は喜んで君を仲間の一人として受け入れます」
- (iv) 団委員長から上進候補者に
「団の全員が君の前進をどんなに喜んでいるか、そしてローバースカウティングにおいて君が幸福で成功することを、みんながどんなに望んでいるかを君に伝えたいと思います」(激励)
- (iv) ローバー隊長「私は、この見習いローバーバッジを君に与えます。君はローバー隊のメンバーとしてスカウト精神を実行するという決意を、今この場で胸に銘記してください」
- (ix) 見習いローバーの上進者は回れ右をし、シニアスカウトに向かって敬礼する。シニアたちは上進スカウトに敬礼し、祝声またはシニア隊エールを送る。

② ローバー隊歓迎式（新規にスカウト運動に入ってくる者，他の団から入ってくる者，地区ローバー隊に入る者への歓迎式）

(i) ローバー隊はU字型に整列している。入隊希望者は紹介者に誘導されて入場し，ローバー隊長に対面する。

もし，入隊希望者が他団からの者であれば，その団のシニア隊長または団委員長がそのスカウトの紹介者となり，新規の入隊希望者の場合は団委員長が紹介者となる。（図参照）



(ii) 紹介者（ローバー隊長に対して）

「私は，山田二郎君をローバー隊見習いスカウトとして，あなたにご紹介しますので受け入れて下さるようお願いします。」

ローバー隊長（紹介者に対して）

「あなたは，この山田君が日日の善行を含むスカウトの義務を尽くすよう努力しつつあること，そしてこのローバー隊のメンバーになる値打ちがあることを確信されていますか？」

(iii) 紹介者「そのように信じています」

(iv) ローバー隊長から入隊希望者に

「ローバーリングとは，戸外生活と奉仕活動の仲間ということですから。この仲間に入るには，スカウティングの実技についての知

識を深くし、戸外生活を追及しなければなりません、君にはその覚悟がありますか？」

(vi) 入隊希望者「はい、あります」

(vii) ローバー隊長「では、ローバー隊は喜んで君を仲間の一人として受入れます」

(viii) 団委員長から入隊希望者に

「団の全員が君を仲間として迎えることをどんなに喜んでいるか、そしてローバースカウト活動において君が成功することをみんながどんなに希望しているかを、君に伝えたいと思います」

(ix) ローバー隊長「私は、この見習いローバーバッジを君に与えます。君はローバー隊のメンバーとしてスカウト精神を実行するという決意を、今ここで胸に銘記してください」

(x) 入隊希望者「はい、そのようにいたします」

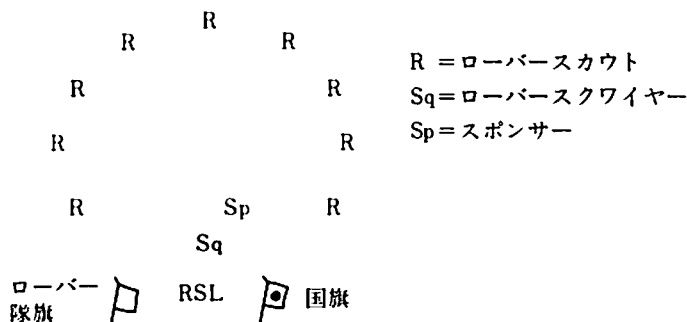
(xi) ローバー隊全員は、歓迎のエールまたは祝声を送る

③ 叙任式（見習いローバーから正ローバーへの入隊式）

B-Pは見習いスカウトから正ローバーになるときは、カブもボーイもシニアもローバーもすべて「叙任する」(INVESTITURE: 位を授ける)という言葉を用いた。「叙任式」は日本ではなじみが少ない言葉であるが、ローバースカウト部門、特に伝統型ローバー隊では、正ローバーとしての位を授かる式という意味から「叙任式」という言葉を用いる。

「正ローバー」としてローバー隊長が叙任するという形をとり、セレモニーは厳粛な雰囲気の中で執り行われる。

(i) 式次第 (図参照)



- ・ 叙任を受けるスカウトはクルーの前にスポンサーによって導かれる。
 - ・ クルーの全員は制服着用。
 - ・ 正面には国旗と隊旗を直立して掲げる。
 - ・ 隊長はその国旗の前に立ち、一同に面して候補者の氏名を呼びあげる。
- (ii) ローバー隊長「君は、世界中に仲間を持つこのローバー隊の一員になりたくてここにやってきたのですか？」
- (iii) 候補者「はい。そうです。」
- (iv) ローバー隊長「君はこれまでいろいろな困難を経験してきました。そして今、ローバーとしてのちかいを新たにして、自分と他の人びとへの奉仕に最善を尽くす決意でここにきたのですが、それを実行する覚悟はできていますか？」
- (v) 候補者「はい。その決意です。」
- (vi) ローバー隊長「君は、奉仕というものは、どんなときでも、誰

に対してもやさしくなされなければならないことを、また他の人々を助けるとき、たとえそれが自分にとって都合が悪くても、愉快なものでなくても、最善を尽くしてするものだという意味をよく理解してほしい。そのうえに奉仕をしたことに対して報いを求めてはならない、ということが分かっていますか？」

(vii) 候補者「はい。よく分かっています。」

(viii) ローバー隊長「君は、ローバースカウトになることによって、われわれの仲間に入ることになりますが、その仲間とは、君がこれから実行しようとしている理想の実現を助けてあげようとする仲間であること、また、他の人びとに奉仕するという我々の目標を実現することを、ルールに従って君にもお願いする仲間なのだということが、分かっていますか？」

(ix) 候補者「はい。わかっています。」

(x) ローバー隊長「よろしい。すべて了解しました。ではスカウトのちかいを再認してください。(スカウト歴のない者の場合は、ここでちかいを立てる。)

そのちかいは、少年としての立場ではなく、ローバーとしての解釈をもってするように期待されていることを心にとめてほしい。」

・候補者は前に進み出る。それと同時に旗手のローバーは隊旗をさげ、ローバー隊長と候補者の間に旗を下げる。

・候補者は左手で旗をつかみ、右手でスカウトサインをする。

(xi) 候補者「私は、名譽にかけて次の3条の実行をちかいます。・・・・・・」

(xii) ローバー隊長「よろしい。私は、君が名誉にかけてちかいを守ることを信じます。」

・言い終わるとローバー隊長はこの新ローバースカウトの肩に付ける肩章と、ローバーバッジを与えて、次の言葉を言う。

(xiii) ローバー隊長「この肩章は、我々兄弟仲間を表わすものであります。(スカウト歴のなかった者に対しては、一その兄弟仲間は今君を迎え入れたのですよーと付け加える。)そして、それは君が年下の弟たちに対する務めを持っていること、ローバースカウトとしてそういう責任を持っているということ、またそれゆえに君はいつも最善を尽くして、弟たちに良い模範を示すように心に銘じてほしいためのしるしなのです。」

・ローバー全員は、この新しいローバースカウトのまわりにやって来て、歓迎の握手をしてセレモニーを終わる。

(4) その他のセレモニー

正ローバースカウトになってからも、いろいろのセレモニーが考えられる。たとえば、何かを達成したときのお祝いの儀式とか、指導者研修コース修了時の修了証伝達式などがそれである。また、ローバースカウトとしての活動を終わって、ローバー隊を離れるローバーにも心に残る送別記念のセレモニーを行って送り出したいものである。

それぞれのセレモニーの意味合いをよく考えて、セレモニーを企画して実行したいものである。

(5) スカウツオウン

Scouts' Own は、直訳すれば「スカウト自身の」ということであるが、この言葉の後に、Service という語が省略されており、ローバースカウトたち自らが司会して行う礼拝のことである。とくに、ローバースカウトの場合は、「活動の目標」にもあるように、「明確な信仰をもつことに励み、自己の所属する教宗派の行事に進んで参加すること」を実践する場として、またローバースカウトとしての精神的な高さを求めるものとして重要な意味を持つ。

教育規定にもあるように、スカウツ・オウンは各自の信仰心を高め、ちかいとおきての実践をより深めるためのものであって、純然としたスカウト活動なのである。また、オウンとあるように教導職（僧侶や司祭等）でなくローバースカウト自身が司会し、ローバースカウトたち自身で聖句や聖歌を選択して礼拝を実施することによって信仰を深め、神（仏）に誠を尽くし、人格を築くものである。

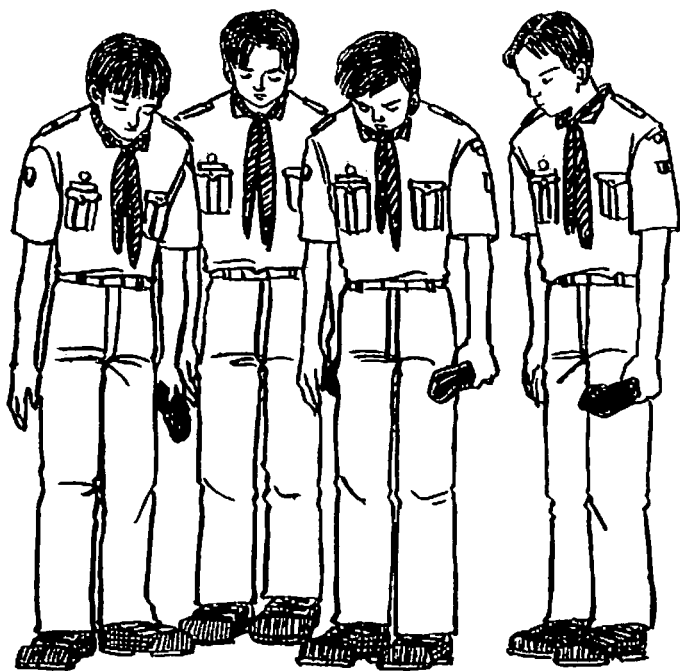
スカウツ・オウンはいつ行ってもよく、どんな集会やキャンプ中でも、いずれの場所で行ってもよい。それは信仰を高めることによって、ちかい・おきての実践をさらに深めてゆく、ローバースカウトによるローバースカウトのための活動である。

スカウツ・オウンの実施にあたっては、それぞれの宗教・宗派によってプログラムや方法が異なるので、自分たちが信じる教宗派の実施方法を研究したうえ、その場、そのときにマッチしたプログラムで実施するように準備をする。

ここでは、いろいろの教宗派に属するローバースカウトたちが集まっているときに行うスカウツ・オウンの一例について考えてみよ

う。

- ① 全員は司会者を中心に円形（U字型）に集合する。
- ② 歌「名誉にかけて」
- ③ ヤーン「大自然への感謝」
- ④ 黙禱（黙想）



13. 制服と記章類

(1) ローバースカウトの服装

ローバースカウトの正装は次の通りである。

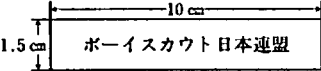
- ① 正 帽 緑色のベレー帽
左目の上部に位置するように帽章をつける。
- ② 副 帽 スカウトハットまたは紺色のベレー帽
副帽の使用は、その隊の意向による。
- ③ ネッカチーフ ネッカチーフは隊で統一して定めた色の三角とネクタイ形または正方形の布ネクタイは緑色とする。
- ④ 上 着 カーキー色系統でふたつきポケットが胸の左右にある肩布付カラー襟のシャツ
- ⑤ ズ ボ ン カーキー色系統の長ズボン
- ⑥ 防 寒 着 カーキー色系統の襟付きセーター
- ⑦ ベ ル ト 制服と同色の布製又は革製で、スカウトバックル付き同一の隊ではできるだけ同色・同型の服装をする。

正装は公式行事の式典、隊活動やその他の行事でセレモニーで着用するが、各種の活動はその活動に応じて適当な服装をする。活動着や作業衣をそのようなときには利用する。

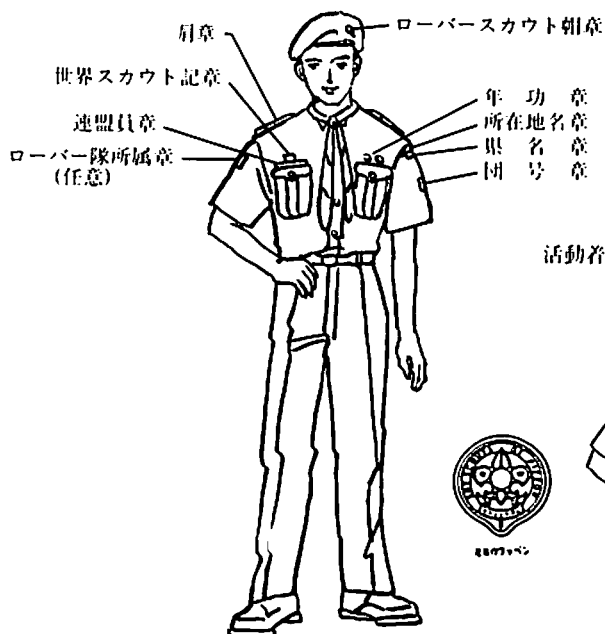
正装および活動着は、後出の通り教育規定に定められている。

(2) ローバースカウトの記章

ローバースカウトの記章は次の通りであるが、肩章とローバー隊の4つ型を示す右腕の識別章制定を考えている。

区分	様式図柄	寸法	地色	着用部位その他
(1) 帽章	一重目ロープ つきスカウト章	3.3×3 cm	金色	ベレー帽の左目の上部 につける スカウトハットの場合 は正面につける
(2) 年功章	☆☆☆☆ 1年章、2年章、3年章、 4年章はボーイスカウトと 同じ 台座一赤色		1年章 2年章 3年章 4年章は、 ボーイスカ ウトと同じ 5年所は、 金色	左胸ポケットの上ふち に接してつける
(3) 略章	 緑色の枠とり、スカウト章 のうち、花卉と鏡の部分	4×4 cm 菱形	ボーイスカ ウト制服の 地色と同じ	略帽（正帽以外の帽 子）、略装、その他につ ける
(4) 標略章	 スカウト章のうち、花卉と 鏡の部分（金色）	1.2×1.2 cm	金 色	制服以外の服装の左襟 につける
(5) 世界スカウト記章	 1.5 cm		紫 色	連盟員章の中央上部に 接して縫いつける
(6) 連盟員章	 カーキ色の台地にえんじ系の文字			上着の右ポケット上部 の中央に接して縫いつ ける

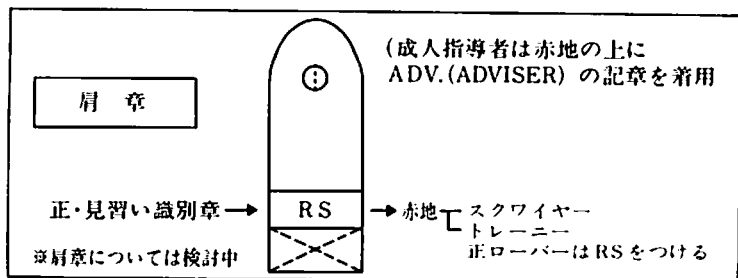
ローバースカウトの正装



活動着(ネッカチーフの着用は自由。)



(長袖、ネクタイも着用することができる)



参 考 資 料

社会に貢献するスカウティング

世界の多くの国々にスカウトの仲間がいます。また、スカウト運動を始めようと動いている国もさまざまあります。

それぞれのスカウト連盟では、国の実情にあったスカウティングを展開しています。地域社会開発のプログラムや環境教育、環境保全活動を推進したり、世界に目を向けて、開発途上国を支援するスカウト連盟もあります。

開発教育

スカウティングと地域社会開発

世界スカウト機構発行

今日スカウト運動は150の国と地域に1,600万人の仲間がいる。

彼らのうち1,000万人は開発途上国に住んでいる。

世界のスカウトたちは生活水準の向上のために大きな働きをしている。ここではスカウトたちが開発途上国で起こしたアクションを詳細に紹介する。

- 読み書きを普及するスカウティング150
- 健康維持に貢献するスカウティング151
- 仕事へつくことを手助けするスカウティング156
- 食糧の安定供給に努めるスカウティング158
- 環境を考え、行動するスカウティング164
- 住環境の保全に努力するスカウティング166

読み書きを普及するスカウティング

多くの発展途上国では、70%の人々が文盲で、30%の子供は学校へも行けない。学校へ行っている子供の半数も中学へ上がらずして中途退学を余儀なくされている。読み書きを修得した子供の多くも、やがて読むものが無いために文盲に戻ってしまう。



■ インドのスカウトとガイド、読み書き教室に挑戦

インドのスカウトとガイドが、もっと多くの人々の生活水準向上のために力を貸そうと、読み書き教室を始めた。

10日間の研究会で読み書き教室の開催方法や参加者募集の方法を学び、スタート。他の地域からの講師協力を仰ぐための基金作りや、教材提供、パンフレット作りなどを実施して教室を開いた。

教室では、参加者たちに自分自身の夢や希望について、そして生活上の問題などについて語らせた。車引きたちは、人力車購入のための月賦申込の用紙に記入できないことが問題だし、若い母親たちは自分たちの子供の健康についての知識を本から得られないことが不安だった。

これらを基に実用的な読み書き教室のプログラムのヒントを得ていき、また参加者たちが必要としている知識や情報についても他から学ぶなどして授業を成功させたのである。

■ アジアでは、地域の図書館が読書欲を刺激

ネパール、バングラデシュ、インドネシア等のアジアの国々で、新しく読み書きができるようになった人々のために、スカウトたちが多くの地域に小さな図書館を作った。(コミュニティーセンターの一部を貸してもらったり、古バスを改造した移動図書館を作ったり)

ポスターを作って図書館を紹介し、また、不要になった本や雑誌、新聞などを図書館に寄付してもらえよう呼び掛けた。この活動は、新しい教科書を買うことができない子供たちのためにも大いに役立った。

健康維持に貢献するスカウティング

世界では毎日4万人近くの幼い子供たちが、基本的な健康管理知識がないために、死んだり、重度の障害を負ったりしている。

世界の半分の人々は、安全で十分な水を得ることができずにいる。そしてそれよりも多くの人々は、適切な衛生設備（特に下水）を持たずにいる。このことが病気や困難の大きな原因となっている。



■ イエメンのスカウト、水を濾過

イエメンを含む開発途上国の多くの地域で水は欠乏しており、そしてまれに水を得られる場合も、その多くは汚染されている。

スカウトたちは汚れた水がさまざまな病気の原因になっていることを知り、石や炭、そして石油缶などを使った簡易濾過装置の作り方を学んだ。

スカウトたちは清潔な水の重要性を地域の人々に教え、そして濾過装置の設置を手伝い、それを使ってもらうようにした。

■ ペルーのスカウト、地方で健康教育

ペルーでは、訓練を受けたスカウトリーダーが、地域の健康教育プログラムを支援した。

地域の学校での無料血圧測定で病気の早期発見を助け、そこが地域の健康相談会の場となるようになった。

これと同じ活動が他の中南米の国々でも行われた。



■ ハイチのスカウト、子供の健康全国キャンペーン

子供の全国健康キャンペーンの一環として、ハイチのスカウトは訪問健康診断を実施。

経口補水塩は街角の売店で手に入る。若い母親たちに子供の健康管理についての生命に関わる点を教えた。

また、読み書き教室も健康教育に協力し、スカウトたちは国中を駆け回った。

■ ウガンダのスカウト、免疫で命を守る（イタリアのスカウトがこれを応援）

ウガンダのスカウトとガイドは数年に渡って子供の健康増進のために、健康機関と協力して働いている。免疫についての榮譽を讃えるバッジまである。

この活動が広がるにつれ、輸送機関の不足という大きな問題にぶつかった。

このピンチに、イタリアのスカウトとガイドがこれを支援するための基金キャンペーンを実施して早々に協力。34台のモベット（小型バイク）を贈り、ウガンダのスカウト・ガイドたちの活動を支援した。

■ インドのスカウト、らい病との闘い

インドの医療機関は確立された対らい病プログラムを持っており、医学的に問題はない。

ただ、インドでは多くの人々が病気は“のろい”であると考えていて、治療に行くことを恥じていることが問題なのである。そこで「らい病は“のろい”ではない」というメッセージで、インドのスカウトとガイドがキャンペーンを行った。

病気の概要や初期兆候についての簡単な説明を載せたポスターやパンフレットがスカウトとガイドの手により配布され、家庭訪問も行われた。スカウトとガイドは近くの保健機関に診療や治療に行く親のために子供の世話の奉仕を行った。



■ エジプトで、スカウトが全ての人に健康を唱えるキャラバン

長い休みを利用して、スカウトとガイドのチームが医療の専門家と共に国中のあらゆる村をバスや医療車で訪れた。

参加したのは、医療のプロを目指している18～24歳のスカウトとガイド。外国からきたスカウトとガイドたちもこの活動に加わった。参加者たちは、医療の専門家（その多くはスカウトリーダーでもあった）に指導を受けながら、実際の医療を経験する絶好の機会を得た。

キャラバンが村に到着すると、医療機関にでかけて治療の手伝いをするグループ、学校にでかけて子供の健康診断をするグループ、家庭訪問検診グループなどの小グループに分かれて行動した。

また、村の青年たちの健康についても、ポスターコンペ、スポーツ大会、映画上映などを盛り込みながら、喫煙、飲酒、麻薬の害についての講習を行い、また青年たちからの妊娠や性病、エイズ等についての質問にも答えた。

病気についての基礎知識を強調したことでこのキャラバンは成功を納めた。



■ ネパールのスカウト、麻薬に「NO」

青年たちに麻薬の害についての教育を行うことは、各国のスカウト連盟にとって年々重要な課題となってきた。

ネパールのスカウト連盟では、若い人々が麻薬に「NO」と言うように支援する活動が行われている。スカウトたちは麻薬による害について学び、仲間からの誘いへの対処法や、仲間を麻薬から救うための方法を学ぶ。

ネパールの他にも、カリブや南アメリカでの成人指導者のためのセミナーや、エジプトでのポスターコンペなどの活動があった。

仕事につくことを手助けするスカウティング

開発途上国では、若者達の多くが初等教育を少ししか受けられなかったり、全く受けられなかったりしている。職能や経験を得られないまま、彼らは都市に移住し、仕事を探さざるを得ない。仕事に就ける者はほとんどいない。

職業訓練の機会の欠乏が、若い人々に必要なノウハウを得て成人としての生活に備えることを妨げている。



■ ルワンダのスカウト、子供たちを路上生活から救う

ルワンダでは、十分な職能訓練を受ける機会を得られない十代前半の若者たちが、彼らの弟や妹を養うために職を探さなければならず、都市に出る。しかしその大多数は職に就くことができず、貧困から犯罪や麻薬への誘惑に負けてしまったりする。

ルワンダの連盟はこれらの問題を解決すべく、世界スカウト機構や他国の連盟からの援助を得て、ルワンダ国内の3か所に職能訓練センターを持ち、訓練コースを運営している。

参加者の多くは孤児だったり、両親がいても貧しくて面倒を見てもらえなかったりする若者たちで、物乞いやこそ泥をはたらくなどして糧を得ていた場合が多い。

しかし、スカウティングを通じて彼らは必要な自尊心を得て、友達を作り、そしてより豊かな生活のための職能を身に付ける。このコースには、常時500人以上の若者たちが参加している。完全なコースは3年間のプログラムだが、より短いプログラムも用意されている。

コースでは指導力、積極性、責任感を養うプログラムの一環として、作物管理、動物の飼育、養蜂、養鶏、溶接、裁縫、パン焼技術、濾過器づくり、省燃料ストーブづくり、家具づくりなどが教えられている。

これらを修得した若者たちは、生まれ育った村に帰り、新しい小さなビジネスを始めようと決心する。

食糧の安定供給に努めるスカウティング

世界中の人々が十分食べられる量の食糧が世界で生産されているにも拘らず、毎年100万人もの人々が栄養失調に関連した原因で死亡している。そして10億人もの人々が食糧不足で苦しんでいる。

流通・食糧管理の改良、栄養についての知識、そして高い収入は、より多くの人々に多くの食糧をいき渡らせる。



■ セネガルで、スカウト旱魃（かんばつ）に対処

^{かんばつ}旱魃で野菜の収穫がすっかりだめになってしまった年、セネガルのスカウトたちは、農場の近くに自分たちで井戸を掘ることを計画。政府に土地を借り、井戸水を灌漑用水として利用したモデル農園を作った。

これを参考に村人たちはさっそく自分たちの農園に井戸水を利用した。これが成功し、今では村が市場を持つほどの生産力を持ち、経済的にも、村が潤った。

■ 村のおたのしみ—食べ物についての劇

開発途上国に広がる栄養失調は、知識の不足が一つの原因である。

バングラデシュ他アジアの国々では、栄養についての知識を楽しく知ってもらうための方法として、野菜に扮したスカウトたちが繰り広げるミュージカルが演じられている。

■ ケニアで障害者たちとの農作業

野菜や果物の栽培は見た目よりも厳しく、特に障害者たちにとっては、農作業は大変難しいことでもある。

ケニアでは、障害児たちにスカウトと同じ活動をさせようという運動がある。この国のスカウトにとっては、この活動が農作業の基本を学ぶことでもある。

どのような土にはどんな植物が一番適しているか、この植物には日光を当てた方が良いのか、市場や農園での小動物や鼠の掠奪からの作物の守り方など農業の基本を、障害児たちといっしょに実際に農作業を行いながら、スカウトたちは学ぶ。

■ エジプトで食料乾燥で腐敗を防ぐ

冷蔵庫の普及していない地域では、肉や魚や野菜はすぐに腐ってしまう。多くの農民の作物保存の悩みを解消すべく、エジプトや他の国のスカウトは、ガラスの蓋をもった木箱を使った簡単な天日乾燥技術を紹介してまわった。

この箱を使うと、肉なら数時間で腐らず乾燥し、そして味が良くなる。これを知った農民たちは農作物の半分を捨てなくて済むようになった。

■ 村の共同農場の設立法を学ぶ

アフリカ、アジア、南アメリカの多くの地域で、モデル農場を使って小さな共同農場の運営について教えるプログラムが行われている。

スカウトたちは経営訓練に加え、基本的な獣医学を修得し、自分の地域に帰って家族や友達とともに共同農場を始める。こうすると、都市のボランティア団体等に加わらなくても、スカウトたちはそれぞれの地元で、彼らの技能を他に人々に役立てることができる。

この一例として、ペルーのスカウトのグループはアンゴラ兎の飼養を開始した。アンゴラ兎の肉は食用になり、皮は毛糸の材料になる。

■ インドネシアのスカウトは水の必要性に注目

インドネシアでは、地域とともに特定の開発プロジェクトに取り組み、そして同時にそれを楽しむという、地域奉仕キャンプが行われている。

ある地域は主要農産物確保のための灌漑設備に取り組み、またある地域は安全な水の確保と下水設備に取り組んだ。

通常は専門家やその技能にたけたスカウトリーダーやスカウトがその地域を訪れてさまざまな相談に乗りながら、プロジェクトの方針決定を支援する。プロジェクトのための訓練コースの中で、スカウトたちはさまざまな開発問題について学び、また彼らの将来の職探しや自分達の家を建てる際に役立つさまざまな建築・測量技術を身に付ける。

プロジェクトにともに参加している村人たちや農民たちに、彼らは訓練コースで修得した技術を一緒に行いながら教えていく。つまり、建設プロジェクトが終了すれば、それぞれの地域で建築物や灌漑設備を作り、そして維持していくことができるようになるのである。

■ エジプト：海岸の村のためのノーベル賞ものの養殖技術

エジプトのスカウトは、高価な船を使わずに行える魚の養殖法について紹介している。

これはポリエステルの浮きと、それに取り付けられた木の板を使う技術である。スカウトたちは浮きに取付けられた網の中の小魚たちに上から餌を与えたり、観察したりすることができる。そして第二の網は小魚たちが大きな魚に食べられないように守っている。



■ ベナンのスカウトは牛を健康的に育てている

ベナンのスカウトたちは、一般的な動物の病気について学び、健康な牛を育てている。

スカウト連盟の所有する土地に牧場を作ったスカウトたちを、元獣医のスカウトリーダーが支援している。始めに20頭の牛を購入し、以後育てた牛の売り上げはこのプロジェクトに関わる再投資に使われた。今日ではこの牧場は自立経営しており、スカウトたちは山羊や羊や鶏の飼育も始めた。

周りの地域からスカウトたちや村人たちがやってきて、獣医の基礎や牧場経営について習っていた。彼らはそれぞれの地元でそれらの知識を仲間や他の人々に伝えていった。



環境を考え、行動するスカウティング

世界の森林は減少し、砂漠が広がっている。

これには森林火災や過剰放牧、^{かんばつ}旱魃などを含め多くの原因がある。

建築物に木材を利用したり、料理や暖房の燃料として木しかないような地域も多く、人間もこの問題の悪化に一役買っている。



■ ブルキナファソ：サヘルに緑を

ブルキナファソはサハラ砂漠の侵入で大きな被害を受けているアフリカのサヘル地帯の国々の一つである。人々は木を料理の燃料に刈り取り、砂漠の進攻は進むばかり。

スカウトたちはより多くの木を育てることと、人々により効率的な資源エネルギーの利用法を教えることの2つの方法でこの問題に取り組んだ。

ブルキナファソのスカウトは、伝統的に行っていた植樹の活動を、国中へ向けてのキャンペーンとし、さまざまな地域で年間1万本を越える木々を植えている。多くの木を育てることは木の不足に対する一つの回答ではあるが、しかしもっと簡単に実施できる方法としては、より効率的に木を使っていくことがある。

木の不足に悩む多くの地域のスカウトリーダーたちのためのセミナーが開催された。参加者たちは、太陽熱利用の作物乾燥法や

温水法、動植物利用の堆肥から発生する有機ガスでの調理や機械運転への利用方法などを2週間に渡って教わった。

■ ヨルダンの太陽熱温水器

砂漠地域や赤道地方でも、晩から早朝にかけては冷え込む。電力のない地域ではもっぱら不足気味の木を燃料として水を暖めている。

ヨルダンで開催された研究会によって、スカウトリーダーたちは石油缶やどこでも手に入るような材料だけを使った太陽熱温水器を各地に紹介していけるようになった。技術は簡単なもので、注意点はガラスの蓋を割らないようにすることくらいである。

■ アフリカのサヘル（サハラ砂漠の南縁）の国々での省燃費調理法

普通の裸火を用いた調理法では、木の燃料から得られる熱の50～70%を無駄にしていることになる。また、アフリカのサヘルの国々では、その日の料理に必要な燃料の木の枝を手にいれるために、毎日何マイルも女の人たちが歩き回って探さなければならない。

ずっと効率が良くて製作費もかからない、土を使ったカマドの作り方をスカウトリーダーたちが研究会で修得し、そしてさまざまな地域の人々に伝えた。

研究会の後数か月で、420以上の新しいカマドが作られた。

住環境の保全に努力するスカウティング

世界の人口増加が続き、多くの人々が設備も整っていない不適當な環境の住居に住んでいる。

住居の問題は家屋のことだけに留まらず、社会的、教育的、文科的側面を含めた総合的な住環境の問題である。



■ 住居：世界のスカウトたちの挑戦

世界のスカウトたちは、彼らの地域の住環境の改善のために積極的な活動を行っている。

1987年、国連の「ホームレスの人々に宿を、の世界年」以来、多くの国のスカウトたちはこの年を成功させようと熱心にこの運動に関わり始めた。

この活動に特に積極的に継続してスカウトたちが関わっている国にはアルゼンチン、バングラデシュ、ブルキナファソ、コスタリカ、エルサルバドル、インド、ケニア、ペルー、スイス、タイ、トリニダードトバゴ、そしてウガンダ等がある。

これに関わる研究会では、スカウトたちは飲み水の浄化、下水、廃物処理、身近な材料を用いた簡易建築技術、等の分野で活躍した。

こうした協力活動を続けるうち、住環境の不適切さが産む他の問題にスカウトたちは出会った。その中でスカウトたちの大きな課題となったのは、麻薬の乱用や若年妊娠などの問題を多く抱える年代である、青少年のための活動であった。

■ 南米のスカウトたちは排水に的を絞った

水の衛生の維持、家庭の衛生向上、そして正しいゴミ処理方法の普及などから、地域の衛生基準は進歩していく。

ペルーのスカウトたちは町の行政と連絡をとり、街角にゴミ捨て箱を設置し、それをいつもきれいにしておくようにする計画をたてた。

ペルーのある村の農民が、どうも灌漑設備がうまく働いておらず、作物が不出来であるようだとスカウトたちに話した。スカウトたちが発見した原因は、家庭排水が灌漑用水に流れ込んでいたということであった。スカウトたちはより健全な排水について説明し、この敷設を支援した。スカウトたち、農民たち、そして地域の他の人々が協力して、いままで汚れていた灌漑設備をきれいにした。

ボリビアとコロンビアのスカウトたちは同様の活動をいつも行っている。

■ ケニアのスカウト、テントより建物

ケニアでは、スカウトたちはどんな場所でも手に入るような限られた材料を使った建築方法について人々に伝えた。

このアイデアは元々、アイルランドのスカウト連盟がモルタル金網建築法をケニアのスカウトたちの活動にと紹介したことから始まった。

板の上に金網（鶏小屋に使うもの）をあて、モルタルで補強する技術で、これを使った壁は15年前のものでも未だにピンピンし

ているという頑丈さ。普通の建物の半分以上のコストでできるし、工期も普通3か月のところが2週間。技術修得も短い期間で可能である。

ケニアのスカウトリーダーたちがこれを修得し、スカウトたちにモルタル塗りを担当させて、多くの地域にこれを広めた。

遠くの地域からもこれを聞き付けた学校の先生・生徒や農夫、村人らがやってきて、技術を教わり、地元に戻って教室や農場の建物、薬局などを建てた。そして彼らがさらにその技術を他の人々に伝えた。

これらの建物はケニアで建てられ続けるだろう。

ウガンダやタンザニアを含む他のアフリカの国々のスカウトリーダーたちは、ケニアの指導者訓練コースに参加すると必ずこの技術を身につけて地元に戻った。

■ 自然災害：スカウトは再建を支援

自然災害は避けられないが、有事への備えは被害を最小限にくい止めることができる。

台風や洪水、地震の後にはスカウトの救急法が命を救う。最初の混乱が収束すると、スカウトは他の技能を再建のために役立てることができる。

スカウトたちは土地をきれいにし、レンガを作り、シェルターを建て、テントを立て、飲料水確保のための設備を作り、子供たちのための活動を組み、読み書き教室を開き、果物や野菜を育て、そして燃料効率の良いカマドを作ることができる。



用 語 解 説

〔ア行〕

アイデンティティ (Identity) 英語：(心理学用語) 主体性、本人であること。社会生活の中である個人が変化・成長しながらも基本的には同一で連続しているという感覚、すなわち自分は自分であり真の自分は不変であるとする感覚。一般に「帰属意識」と訳されている。

アウトドア (Outdoor) 英語：戸外、野外。日本では「アウトドアスポーツ」とか、「アウトドア用品」のように名詞につけ修飾語として複合的に使われることが一般的である。

アドバイザー (Adviser, Advisor) 英語：助言者、相談相手、顧問。このハンドブックではローバースカウト隊長のこと。ローバースカウト隊では、隊長の役割が他の部門の隊長とは明確に異なることから、それを明確に表すため、ローバースカウト隊の隊長にこの名称を用いることにした。

アワード (Award) 英語：判定、賞与、賞。ボーイスカウト用語としては、修得を目標にして努力してとる必修的な記章(進級記章、技能章、特修章、その他)と対比して、努力目標として設定はされるとしても、他人から成就したことに対し認定されて与えられる賞としてアワードの語が使われている。日本では、シニアスカウトやローバースカウトは、段階的な進歩制度ではなく(これを進級制度という)、活動をしたことを認める行き方からアワード・シス

テム(表彰)の検討が行われている。

インストラクター(Instructor) 英語：教える人、教授者、(米国の大学などの)専任講師。日本では「技能や専門的なことを指示的に教える人」に対してよく使われる。ボーイスカウト用語では、人格を含めた総合的な指導に当たる隊長や副長と区別して技能等の限定的な指導を託された指導者の名称として限定的または一般的に使われている。

イベント(Event) 英語：出来事、事件、(競技)種目。

ボーイスカウト用語では「行事」「催し物」の意味に使われ、キャンプ等の訓練に係わりの深い活動とは区別している(各種大会、協議会、会合、ジャンボリー等)。

イエール(Yell) 英語：叫び声、応援など励ましの掛け声。ボーイスカウト用語としては、祝声や励ましの声援として、公式にきまった言葉がある。例えば、日本では「いやさか」がこれにあたる。外国では、公式のものではなく、さまざまなイエールが使われるのが一般的である。エールと同じ。

ウッドバッジ(Woodbadge) 英語：(ボーイスカウト用語) 直訳すると木製記章となる。創始者ベーデン-パウエル卿が1919年にボーイスカウト活動の指導者訓練をイギリスのギルウエルパークという名称の訓練センターで開始したとき訓練修了者にアフリカの部族から贈られた木製の数珠の首飾りから、数珠2個ずつを革紐で通して贈った。このことから以後、この指導者訓練はウッドバッジ訓練という名称で世界に広まり、今日に至っている。

現在は、創始者の当時とは訓練対象や内容が多様になり、大きく

変化し、国によっても展開や状況は異なっている。日本では、隊長訓練にこの用語が用いられ、隊長訓練上級コースの修了者にウッドバッジが授与されている。

ウッドバッジ訓練修了者には、証明書、特別なネッカチーフ、ネッカチーフ留め(ウォグルという)、それにウッドバッジ(正確には、ウッドバッジ・ビーズ Woodbadge Beads という)が与えられる。

エクスペディション(Expedition) 英語：探検旅行、遠征。ボーイスカウト教育では、年齢による部門に係わりなく、各種の活動を多彩な用語を使うことによって参加するスカウトたちの興味を盛り上げ、活動の参加目的をイメージさせている。エクスペディションを年少のカブスカウトで使っている国もあるが、日本では概ねベンチャーやローバースカウト部門の高度な探検または冒険旅行に用いている。

なお、日本では遠征の語は、征伐を目的にした歴史上の事件を想起させ国際友情を重んずる運動の趣旨にそぐわないことからこの用語は使わない指導がなされている。

オープンエアライフ(Open-air Life) 英語：戸外生活(Outdoor Life)と同意であるが、もっと広々としたイメージを伴った用語ともいえる。広大な野外での生活という語感が適する。

オリエンテーション(Orientation) 英語：方向付け。初心者に今後の進め方を示すこと、また一般的に会合などで始めて参加する人に、日程や生活運営方針等を説明する時間帯のプログラム名として使われることが多い。

オリエンテーリング(Orienteering) 英語：標識によって道のない
原野を走破し目的地に到着するクロスカンントリーレース。

【力行】

カブスカウト(Cub Scout) 英語：(ボーイスカウト用語)日本では小学校2年9月から5年生までの年齢のスカウトのこと。Cubは、狼の仔など動物の仔の意味で、創始者がこの部門のプログラムを草案したときイギリスの小説家キプリングの「ジャングル・ブック」の物語を使って展開したことから始まる。略してカブという。

カヌーイング(Canoeing) 英語：カヌーにのること、カヌーを使っ
ての活動。

カンドルステッヒ(Kandersteg) 独語：(地名)スイスにある国際
スカウトセンターのこと。正式名称は、Kandersteg International
Scout Centre で、イタリアとの国境シェブロン・トンネルを掘る
ときにでた岩石で谷を埋め立ててできた土地である。創始者がよ
く釣りにきて発見し、スイスの富豪の厚意でスカウト運動の所有
となり、ヨーロッパ地域が管理をしている。毎夏冬に山岳活動と
キャンプが国際的なスタッフによって運営され、日本からも1名
程度が採用されて参加している。

スタッフ参加希望者は、日本連盟事務局奉仕部国際課に照会する
こと。

教育規定 ボーイスカウト日本連盟のボーイスカウト教育の目的、
原理、方法を基本、組織、プログラム、指導者訓練、服装と記章、

等にわたって規定したもの。これは、教育規定集として1冊にまとめられボーイスカウト日本連盟から発行されている。

キャンパス(Campus) 米語：(大学の)校庭，構内，学園。転じて，大学生活を総合的に意味することがある。

キャンプ(Camp) 英語：野営による生活，その場所。キャンプ生活や活動を意味することもあるが，それを強く明示するときは「キャンピング」の語が使われる。

クラブ(Club) 英語：同好の士の集まり，グループ。日本の大学では，サークル活動またはクラブ活動により，同好の士が集まって活動しているが，ローバースカウトもその形態で活動していることが多い。

クォーターマスター(Quartermaster) 英語：(軍隊用語)補給係将校(宿舎割り当て，糧食，被服，燃料，運輸などを司る将校)。ボーイスカウト用語では，食糧，備品，資材を調達する役のスタッフのこと。日本語では「備品係」と訳され，またQMと略記したりする。

クリケット(Cricket) 英語：英国国技といわれ11人ずつ2組で行う戸外球技。

クルー(Crew) 英語：(船や航空機の)乗組員を集散的に意味する。ボーイスカウト用語としては，外国では各部門毎に隊の名称が異なるようにしてあるので，ローバースカウト部門の隊のこと。これは，各部門で隊の運営の仕方が違うことからそれを明確に示すために行われていることであり，このハンドブックでもこの考え方を採用し，ローバースカウト隊のことをクルーと呼ぶ。

グループプロセス(Group process) 英語：グループで活動するときに生じる相互作用を活用して教育目標や効果を達成する方法。個人がグループに加わりグループ内で活動しながら連続的な段階を経て進歩していくこと。

ケージェー法(KJ法) 創始者である川喜田二郎のイニシャルを取って名付けられた情報処理の技法。参加者は小グループに別れて、さまざまな意見を出し合い、それをカードに書き、項目ごとに整理し、発言内容をまとめる効果的な会議運営手法の一つである。

憲章(Constitution) このハンドブックでは、ローバースカウト隊が活動のねらい、方法、管理、隊員の加入、資金などを規定し、その定めの下で自分たち独自の活動を展開していくことを基本にしている。この定款を憲章と呼ぶ。

ケービング(Caving) 英語：洞窟探検、その活動。

コミッショナー(Commissioner) 英語：(政庁が任命した)委員、理事、弁務官。原意は特定の任務を託されて派遣された役職者。ボーイスカウト用語では、教育面で基準の維持と純正な発展のために県連盟、地区におかれる責任者と、全国レベルでは教育の分野で特定の任務を託された総コミッショナー、国際コミッショナー等がある。

[サ行]

サークル(Circle) 英語：円、範囲、仲間。通常、趣味やスポーツなどで同一のことに関心を持つグループによく使われる。本文の「サークル活動」はこの意味である。

サバイバル(Survival) 英語：生き残ること。サバイバル・キャンプとか、サバイバル・レースのように使われる。

サービス・オーガナイザー(Service Organizer) 英語：(ボーイスカウト用語)このハンドブックでは、奉仕活動を組織し実施する担当者のこと。

シニアスカウト(Senior Scout) 英語：(ボーイスカウト用語)高校生年齢のスカウトのこと。この名称が生まれた当時、ボーイスカウト(Boy Scout)より年長(Senior)のスカウトの意味で使われていたが、ボーイスカウト年齢とシニアスカウト年齢は全く異なったプログラムと指導がとられるべきであるという考え方が広まってきた現在では、シニアと呼ぶのは適当でないという意見で、高校生年齢のスカウトは別名称(例えば、ベンチャースカウト)が使われるようになってきている。略して、シニアという。

シンポジウム(Symposium) 英語：一つの主題について多くの人が研究発表や討論をする研究会。ボーイスカウト日本連盟は、ローバースカウト活動の活性化と充実のためローバースカウト自身の手で大会を開催することを決め、1985年と1989年の2回、ローバースカウト・シンポジウムを開催した。

スカウツオウン(Scouts' Own) 英語：(ボーイスカウト用語)ボーイスカウト教育における礼拝の一形式で、加盟員が各自の信仰心を高揚するために行うもので、ちかいとおきての実践をより深めることに目的がある。また、これは聖職者の司祭する礼拝ではなく、スカウト、指導者が独自に行うものであるから、礼拝を信仰の義務としている宗派に帰属するスカウト、指導者は、スカウ

ツ・オウンをもってこれに代えてはならない。外国では、イギリスの影響の強いスカウト国でしばしば用いられるが、全世界的なものではない。また、それらの国では、カブではカブズ・オウン、ローバーではローバーズ・オウンといったりする。

スカウト(Scout) 英語：(ボーイスカウト用語)ボーイスカウト運動の青少年加盟員。当初、ボーイスカウトだけであったものが、ビーバー、カブ、シニア、ローバーと部門が増えたことから、全体を総称するのにスカウトが使われる。また、指導者を含め、運動全体を示すのに「スカウト運動」の如く使われる。本来の意味は、斥候のこと。

スカウティング(Scouting) 英語：(ボーイスカウト用語)スカウト活動のこと。広くスカウト運動と同義に「スカウト運動の組織・運営・教育・指導者訓練等全て」を含んだ意味に使われることもよくある。

スキューバダイビング(Scuba Diving) 英語：簡単な潜水具を使って潜水や海中遊泳をするスポーツ。

スクワイヤー(Squire) 英語：(イギリスの歴史上の)地主、騎士の従者。ボーイスカウトでは、B-Pは騎士(すなわち、ローバー)を想定し、それに至るまでの過程にある新参者を従者(スクワイヤー)と呼称した。この伝統的なローバースカウト活動の展開を基本とした「伝統型」では、この用語を採用した。

スポンサー(Sponsor) 英語：保証人、後援者。このハンドブックでは、ローバースカウトになる決意をする前までの期間(スクワイヤーのとき)に課題や人生の問題等に先輩として指導するよう任命

されたローバースカウトのこと。

スローガン(Slogan) 英語：標語，合言葉。日本のボーイスカウトでは、「日日の善行」がスローガンである。

セクレタリー(Secretary) 英語：書記，秘書，書記官。このハンドブックでは，ローバースカウト隊の事務を担当する役職者のこと。

セルフエグザミネーション(Self-examination) 英語：自省，反省。このハンドブックでは，ローバースカウトになる決意をする前に自分の適正を自己判断する期間のこと。生涯スカウト運動に身を投じるか否かを決める重要な過程である。

【タ行】

タイムスケジュール(Time schedule) 英語：一般的には，スケジュールというが，作業日程など完成までの時間的経過を明確にするために，あえて Time (時間)を加えた。

中央審議会 ボーイスカウト日本連盟の教育規定における最高決定機関は全国会議であるが，それが開催されない期間，運営の責務を与えられ，全国の都道府県連盟それぞれを代表する47名，学識経験者30名程で構成され，年4回開催される。

ツイニング・プロジェクト(Twinning Project) 英語：(ボーイスカウト用語) 2か国平等の立場で企画し，計画をたて，実施するプロジェクト。1970年代からボーイスカウト運動は，開発途上国のさまざまなプロジェクトに世界機構を通じて財政的な援助を行ってきたが，これを一歩進めて1980年代後半から開発途上国1国と先進国1国が「対になる(Twinnig)」ことで，両国のスカウトが交

流し、理解を深め、結果的に開発途上国に必要なプロジェクトを
合同で達成するようになった。前者が経済援助プログラムである
のに対し、これは教育プログラムである。

デン(Den) 英語：動物の巣や穴。(ボーイスカウト用語)カブ活動
でスカウトの組の集会本拠地。そのことから組そのものをもデン
という。ローバースカウトの場合も定例の集会場所をローバーデ
ンということがある。

デンコーチ(Den Coach) 英語：(ボーイスカウト用語)以前はカ
ブスカウトの組の指導者にあたるため配置されたボーイスカウト
のことをデンチーフと呼んでいたが、現在は規約の改正によりこ
の役務はデンコーチと名称が変わり、同時にボーイスカウトに限
らず18歳までの男女がこの役務につけることになった。

デンリーダー(Den Leader) 英語：(ボーイスカウト用語)カブス
カウトの組の一つを担当する成人指導者のこと。ただし、指導に
は直接携わることはなく、活動が安全に円滑に進むように組の世
話をするのが任務である。

トレジャラー(Treasurer) 英語：会計係、監査役。このハンドブッ
クでは、ローバースカウト隊の会計を担当するものの役務名の一
例として例示されている。

トレイニー(Trainee) 英語：訓練期間中の者のこと。このハンド
ブックでは、伝統型の隊以外の隊で、ローバースカウトになる決
意をする前までの期間にある新参者の呼称として使われている。

[ナ行]

ニーズ(Needs) 英語：必要なもの(こと)，欲求。一般的に「青少年のニーズ」とか，「訓練ニーズ」というように前に限定する語が付くことにより「青少年の欲求」とか，「訓練により充足されるべきこと」のように使われる。

ネッカチーフ(Neckerchief) 英語：首巻き。ボーイスカウト用語では，首に巻く三角形の布で，胸の上部，首の下でネッカチーフ留めという留具で留める。正式な服装の一部である。

ノット(Knot) 英語：縄結び。

[ハ行]

ハイキング(Hiking) 英語：(ボーイスカウト用語)目的をもって，通常は予め定めたコースで野山(ときには，町の中)を歩くこと。

ハイク(Hike) 英語：徒歩旅行，ハイキングをすること。

バイス・プレジデント(Vice-President) 英語：副大統領，副会長，副社長。このハンドブックでは，ローバースカウトの中の代表者の呼称の一例としてプレジデント(会長)を使っているが，その補佐役をバイス・プレジデントと呼ぶ。

PR(ピーアール) 英語：Public Relation の略。広報，渉外。

ビジル(Vigil) 英語：(徹夜で祈る)祝日の前夜，夜の勤行。イギリスにローバースカウトが存在していたときには，正式にローバースカウトに叙任される前の者が，叙任直前に決心をする神聖な時間およびそのプログラム。

ビーバースカウト(Beaver Scout) 英語：(ボーイスカウト用語)

ボーイスカウト運動の最年少の部門のスカウト。この部門の教育プログラムは、カナダで始まったが、カナダでは固有の動物であるビーバーをこの部門の呼称に採用した。日本でも、固有の動物の名称を検討したが、適当なものが得られず、ビーバーの名称を用いることになった。

部門・分野 ボーイスカウトの用語としては、ビーバー、カブ、ボーイ、シニア、ローバーの区分を部門といい、プログラム、指導者養成、組織拡張等、運営面の区分を分野とする用語の使い方がある。

プレジデント(President) 英語：大統領、会長、社長。上記のバイス・プレジデントの項を参照のこと。

プログラム(Program) 英語：学習計画、計画、予定表。ボーイスカウト用語では、広義・狭義、さまざまな使い方がある。広義では青少年の教育に係わるすべてのこと(組織、教育課程、活動等を含む。例、カブスカウトのプログラム)、狭義では活動のプログラム(例、年間プログラム、隊活動のプログラム等)である。

プロジェクト法(Project Method) テーマを定め、自学自習する学習法。創意工夫や改善、実験などを繰り返しながら到達する学習法で、単に読書するだけに止まらず、調査し、検討し、実際に行ってみたり、製作してみたり、改善したりというプロセスを経て、修得するので身につけやすい。

工事や環境保全等の特別事業に使われることも多いが、これは教育用語とは異なる。

ブラウンシー島(Browse Island) 英国の地名で、イギリスの南

東部プール湾に浮かぶ小島。ここで1907年にボーイスカウト運動の創始者ベーデン・パウエル卿が実験キャンプを行った。

フラストレーション(Frustration) 英語：欲求不満。何かを達成しようと努めるが、途中で挫折することにより生じるいらいらした気持ち。

ブレインストーミング(Brain-storming) 英語：小グループが、論題について知識をもっていていなくてもよいから、会合し、皆が思い思いに解答や見解を提出する。後で、すべての解答や見解が吟味され評価される。これはグループの持っている能力の中から、興味をひきおこし、速やかに討議することを目的とする。

フォロー(Follow) 英語：後に従うこと、事態の成り行きを注視し必要な対応をすること。

ベーデン・パウエル(Baden-Powell) ボーイスカウト運動の創始者。1857年にイギリスで生まれ、1907年にボーイスカウト運動を始めるまでは軍人として名を成し、陸軍中將で退役。以後、1941年に逝去するまでボーイスカウト運動が世界中に発展するのに献身した。ボーイスカウト運動では、「世界の総長」として全世界のボーイスカウト運動加盟員から親しまれ、イギリスでは男爵に叙され、ギルウェルのベーデン・パウエル卿(Lord Baden-Powell of Gilwel)，または略してB-Pと呼ばれる。

ベンチャー(Venture) 英語：ボーイスカウト部門の上の年齢のスカウトは、シニアスカウトと呼ばれてきたが、その活動はボーイスカウト部門の活動とほぼ同じようであった。これをまったく異なった方法と内容で成り立つことがその年代の青年たちのニー

ズに応えるものであるとの考え方から、この部門をベンチャースカウト部門(国によってはベンチャラー, Venturer)という新しい名称の下で新しいプログラムが生まれるようになった。そして、ベンチャースカウトの大会をベンチャーと呼び、ジャンボリーと同じく4年周期で開かれるようになった。日本では、全国シニアスカウト大会(日本ベンチャー'92)のごとく使われ、これまでに3回開かれた。

【マ行】

マッピング(Mapping) 英語：読図。地図を使って野外を踏破する活動に必要な地図及びその使用に関する技能。スカウト活動に必須の野外活動技能のひとつである。

マネージメント(Management) 英語：経営, 管理, 経営力。

マナー(Manner) 英語：態度, 様子, 行儀, 方法, 仕方。ボーイスカウトでは、フェアプレイの精神でゲーム、つまりスカウティングを行うことが精神的なバックボーンであるので、とくにマナー(行儀, 作法)は重んじられている。

メッセージ(Message) 英語：伝言, 教書, お告げ, 使命。ボーイスカウトでは、創始者が残した「最後のメッセージ」が有名で、その中にある「幸福に生き、幸福に死ぬ」人生への創始者の願いが多くの人々の心を打つ。

メンバー(Member) 英語：会員, 仲間, 加盟員。ボーイスカウト活動では、グループの一員となることが教育の基本にあるので、メンバーおよびメンバーの資格要件(Membership)は重要な意味

を持つ。

モットー(Motto) 英語：標語，处世訓。ボーイスカウトのモットーは全世界的に「そなえよつねに (Be Prepared)」である。

モラトリアム(Moratorium) 英語：支払い停止(期間)。社会心理学的には、エリクソンが「青年期は知識，技術の研修のために知的，肉体的，性的な能力の面では一人前になっているにもかかわらず，なお社会人としての義務と責任の支払いを猶予している状態」と定義した。

この意味から，あれもこれも求めて，社会に対し当事者意識を欠き，お客さま的で組織，集団，国家，社会に対する帰属意識が希薄で，何事にも自分の全てをかけることを避ける心理傾向で，こういう人間をモラトリアム人間ともいう。

【ヤ行】

ヨットイング(Yachting) 英語：ヨットによる活動，ときにはヨットを操作する技能を含むヨットに関するすべてを包括的に意味することもある。

【ラ行】

ライフスタイル(Life-style) 英語：人生の過ごし方，とくに人生観，世界観にもとづく生活態度。ボーイスカウト教育は，各人の適正を伸ばすことを教育の原点におくことから，ライフスタイルを築く教育ともいえる。

ラッシング(Lashing) 英語：縛ること，縛材法。ノットイング

(Knotting)が「結ぶ」のに対し、ロープ等で「縛る」こと。一般に「結索」というときには、この2つ、つまりノットィングとラッシングである。

ラリー(Rally) 英語：集まり、大会。ボーイスカウトでは、カブスカウトの大会(宿泊をとまわず、1日でおわる大会)に使うことが多い。

リーダーシップ(Leadership) 英語：指導力、指導性。ボーイスカウトではとくにメンバーシップとの関連で使われることが多い。

ルール(Rule) 英語：規則、規定。ボーイスカウト運動は「ゲーム」であるという考え方の下では、方針(Policy)、組織(Organization)、規則(Rule)との関連から「目的を持った組織が、運動として柔軟にルールを適用する」ことが運動の本来の在り方であるといえる。ルールを硬直的に捉えないことが大切である。

ロッククライミング(Rock-climbing) 英語：登はん、岩登り。

ローバームート(Rover Moot) 英語：ローバースカウトの大会。単にムートということもある。本来、ムート(Moot)は、イギリスの歴史にある地方部族の集会、寄り合いに使われた言葉であり、現代では模擬裁判、討論会の意味に使われている。ボーイスカウトでのローバームートは、野外活動を中心に討論をも含めた大会というのが定着した概念である。

ローバーリング・ツー・サクセス(Rovering to Success) 英語：ボーイスカウト運動の最年長部門であるローバースカウトのために創始者ベーデン・パウエル卿が執筆し、1922年9月に初版がイギリスで発行された。副題に「若者が男らしさを身に付ける手引き」

とあるように期待される男性像が描かれ、そこに到達するように青年を励ましている。

レイノルズ(Reynolds, E. E.) イギリス人でボーイスカウト連盟に長年勤め、創始者B-P卿の公式伝記「ベーデン-パウエル」および「スカウト運動」の著者として名高い。1910年から約50年間、ボーイスカウト運動に係わり、その間、現役のスカウト指導者としてボランティアで活躍する一方、連盟本部の専従者としてギルウェルパーク訓練センターの副所長、所長代理、機関誌「スカウター」の編集長などを歴任した。

〔ワ行〕

ワークキャンプ(Work Camp) 英語：労働を伴った教育キャンプ。労働奉仕の必要な所に出掛け、援助活動をするが、必ずしもテント生活をするとは限らない。

ワンダーホーゲル(Wandervogel) 独語：ドイツで起こった自国や外国を旅行する野外活動の愛好家の団体の名。原意は渡り鳥である。

ローバースカウト ハンドブック 定価550円

平成7年8月20日 初版発行

発行

財団法人

ボーイスカウト日本連盟

〒181 東京都三鷹市大沢4-11-10

電 話 0422-31-5161

ファックス 0422-32-0010

印刷

共立印刷株式会社

©(財)ボーイスカウト日本連盟 1995 Printed in Japan

ISBN-4-89394-501-7 C3037 ¥550E

95820KY3NPOFE